

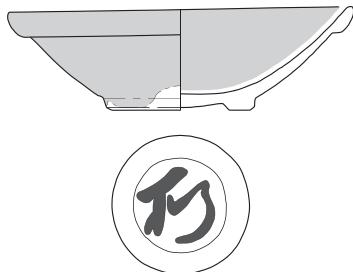
元総社蒼海遺跡群 (143)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2
0
2
3
•
3

元総社蒼海遺跡群（143）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



S = 1/3

古代土壙墓出土の白磁碗

2023.3

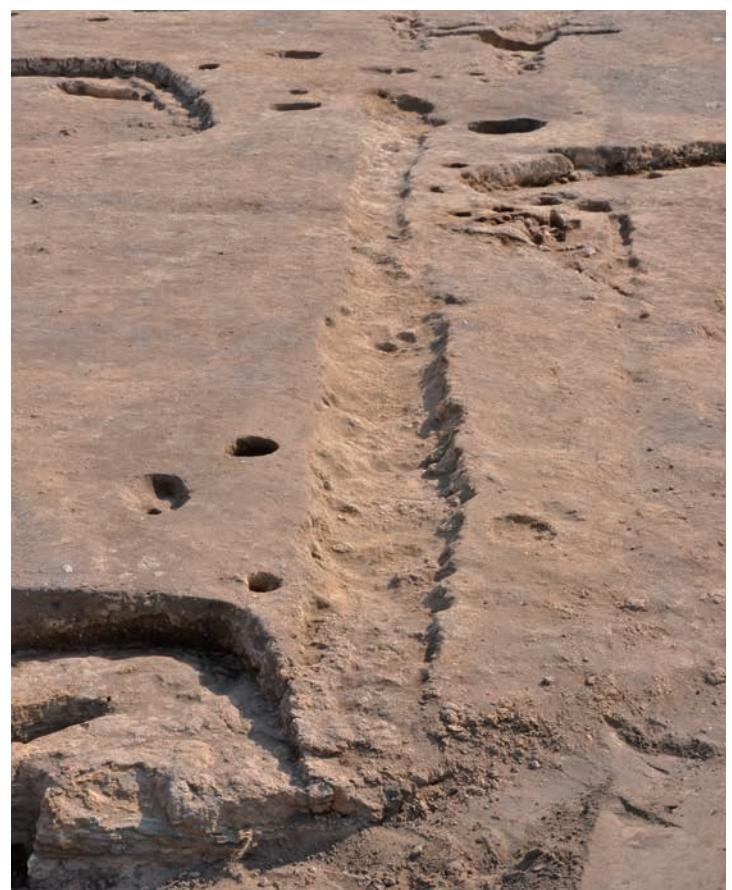
前橋市教育委員会



北方上空から見た区画溝 W-2 と基壇建物跡群の位置関係

区画溝（W-2）は残念ながら直接的に時期を示す遺物に恵まれなかったが、7世紀後半の竪穴建物跡を切り、10世紀代の竪穴建物跡に切られることから、8～9世紀に機能していたものと推定される。溝は今回の調査区に北接する（104）地点で東へ屈曲していることが判明していることから北辺は確定、南辺は蒼海城の破壊も激しく現状で不明であるが、南北370m、東西350mの方形区画の可能性がある（写真黄色推定線）。

この区画内南寄りからは、近年の調査で上野国府に伴う倉庫群か、群馬郡衛正倉の一部と考えられる礎石建物跡が8棟確認されており（写真赤枠み線）、その区画も推定されている（写真水色推定線）。今後の検証は勿論であるが、今回確認された区画溝は、ある段階での倉庫群を区画した可能性が考えられる。



8～9世紀の区画溝 W-2 左・南半 右・北半 共に北から

区画溝は上面を削られているとは言え、幅は1mにも満たない。掘方も安定せず、基準線的な粗掘段階を示しているのかも知れない。



7世紀中葉の竪穴建物跡 H-1 南西から

座標北から約45°傾く4×5mの長方形竪穴部。対角線上に4ヶ所の主柱穴と南東壁際に梯子穴、北東壁に大形の竈、右手前に小さな貯蔵穴。



H-1 竈 検出状況 南西から



H-1 竈 遺物出土状況 南西から



H-1 竈 煙道検出状況（赤線は煙道） 南東から



H-1 貯蔵穴 遺物出土状況 南東から



10世紀の竪穴建物跡 H-22 西から

座標と同じ角度で $3.5 \times (5)$ m の顕著な長方形竪穴部。明確な柱穴不明、東壁に竈。左手前は H-23。



H-22 窯付近 散乱する羽釜片 北西から



H-22 内黒土器 塹 出土状況



H-22 窯前からの馬前肢骨出土状況 西から

解剖学的位置を保つ状態で、床面に馬の前肢が放置されていたものと考えられる。食用として持ち込まれたものか？



10世紀の大形竪穴建物跡 H-26a・b 北から

4.3 × (6.5)mの長方形竪穴部のH-26b[焼失建物] を、埋めながら西側へ拡張して 6.3 × (6.5)mの正方形竪穴部のH-26aとしている。明確な主柱穴は不明、竈は南西隅にあることを最後のダメ押し拡張で確認している。宿舎的な建物か。



H-26b 炭化材等検出作業状況 北から



H-26b 炭化材・焼土検出状況 北から



H-26b 炭化穀物 検出状況



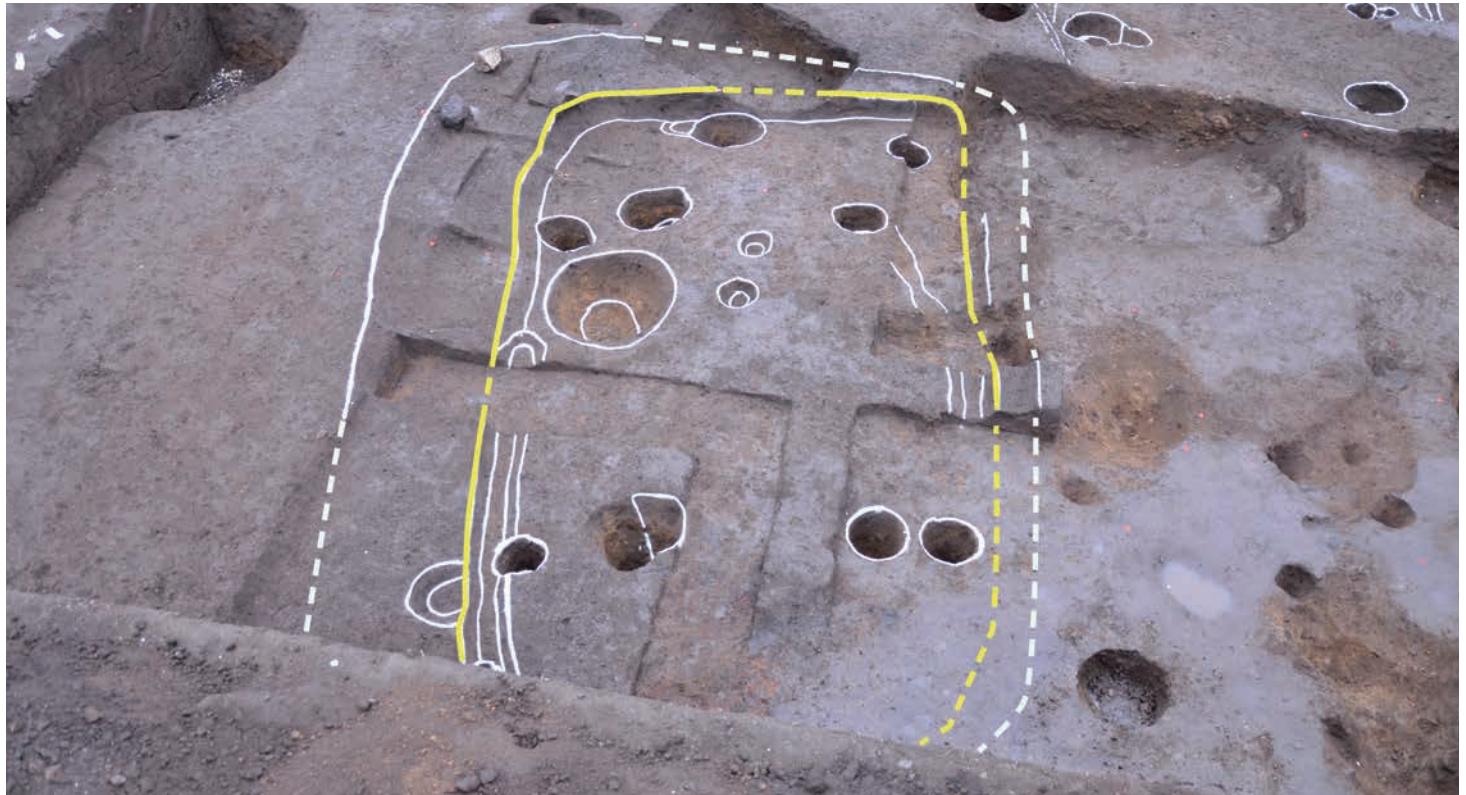
H-26b 炭化米 検出状況



H-26b 炭化米 検出状況 接写



H-26b 土屋根状の焼土 断面



12世紀初頭の竪穴建物跡 H-21a・b 西から

2.5 × (4) mの長方形竪穴部のH-21b（内側黄線）を一回り大きく拡張し、3.4 × (4.5) mのH-21a（外側白線）としている。主柱穴は対角線上に2ヶ所一对4ヶ所を配している。H-21bは2次堆積のAs-B軽石によって埋められ、結果H-21bの床面はAs-Bの貼床となっていた。以上の点から、H-21a+bは、As-B軽石の降下（1108・天仁元年の浅間山噴火）を契機に改修した、1軒の竪穴建物であったと考えられる。



H-21a・b の土層断面 接写



H-21a の竪状施設と床面硬化範囲 北から



H-21a 床面上からの白磁片出土状況 西から



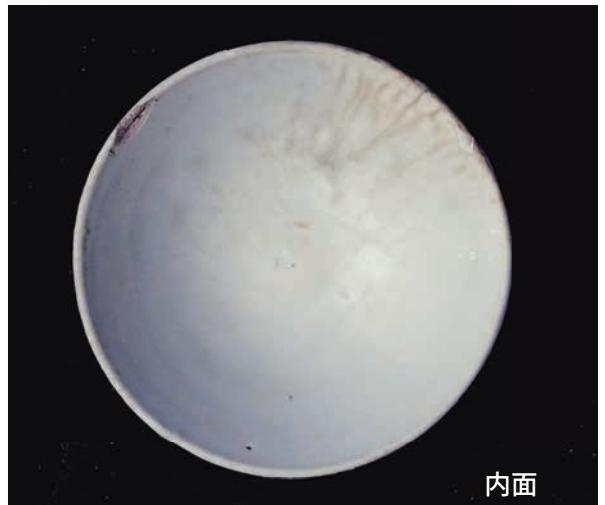
DB-3 古代土壙墓 南から



DB-3 白磁碗 出土状況 西から



DB-3 (150)



内面

白磁碗を副葬する古代の土壙墓

調査最終日、12世紀初頭の竪穴建物跡であるH-21aの竪状施設の掘方調査中、円形に回る骨粉が確認され、土壙墓の存在が確認された。

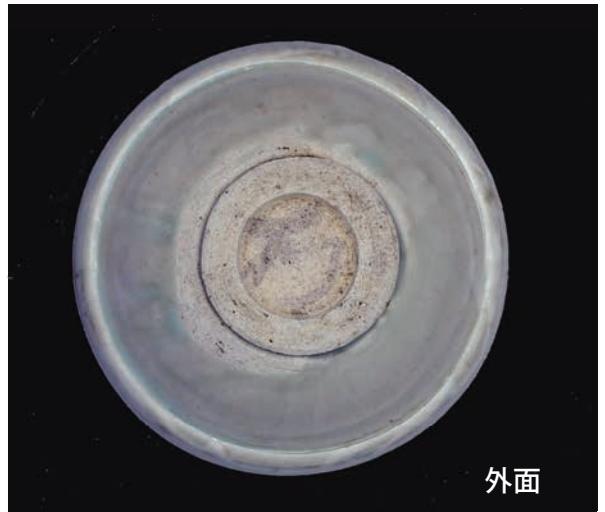
人の頭骨と考えられたこの骨粉を精査していたところ、その傍らから完形の白磁碗が出土した。最後の最後、大発見であった。

土壙墓は南北軸の長方形で、北頭位の伸展葬で埋葬された人骨は、後日の鑑定によって成人（性別不明）であることが判明した。

白磁は10世紀後半の優品で、中国河北省の邢州窯産と推定。

釉の厚いところは青みのある輝きを放っているが、残念ながら口縁に僅かな剥離がある。

底部外面、高台内側の無釉部分には1文字の墨書が確認された。鑑定によれば「梅」で、同様の例は中国との貿易の玄関である博多や、平安京で出土しており、墨書は中国の商人ギルド（同業者の自治集団）によって記されたサインと考えられている。



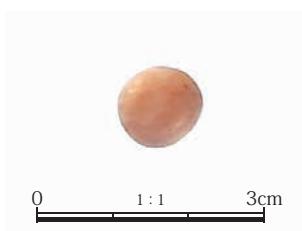
外面



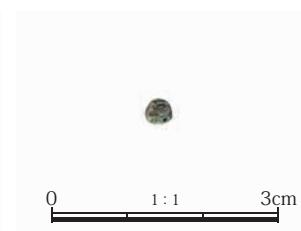
国府成立前の土器群



国府のマチの土器・陶磁器等



H-21a の墓石 (84)



H-19 出土の銅滓? (156)



H-21a の白磁碗 (83)



蒼海城 堀跡 W-1 北から



北壁 南から



南壁 北から

堀跡 W-1 土層断面

堀は薬研堀で、東側の段は改修による新段階堀の底面（左写真）。下層には水性堆積の砂層が幾重にもあり、一時的な水流を窺わせる（右写真）。



東から



堀跡 W-1 法面下間に確認されたピット列

斜めに上がるピット列。柱穴と言うより、ステップ状の断面であることから、作業用の足場の可能性が考えられる。

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国を中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群（143）は古代上野国の中核地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めております。今回の調査では、古墳時代後期と平安時代の竪穴建物跡を主体とする集落跡と中世の蒼海城堀跡が見つかりました。また、平安時代の土壙墓からは、舶載品と考えられる白磁碗がほぼ完形の状態で出土しており、元総社蒼海地区の特殊性を窺わせるものとなっております。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、こうした成果の積み重ねが「国府の解明」に繋がるものと確信しております。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和5年3月

前橋市教育委員会

教育長 吉川 真由美

例 言

1. 本書は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（143）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、前橋市（主管課：都市計画部区画整理課）の委託を受け、前橋市教育委員会事務局文化財保護課の指導・助言のもと、山下工業株式会社（代表取締役 山下尚）文化財事業部が実施した。発掘調査から報告書刊行までの作業は、前橋市の費用負担で実施した。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地 群馬県前橋市元総社町 1799-1、1888-1、1888-2、1888-5、2691-8
遺跡略称 3A270 遺跡番号 前橋市 0142・0147 遺跡 調査面積 1,293m²
調査期間【現地調査】令和4年1月5日～同年3月23日 【整理】令和4年6月20日～同年12月31日
調査担当者 青木利文 調査員 永井智教・関口信夫・辻口菜穂子・岡田萌
4. 遺構写真は各調査員が撮影し、空撮は神崎龍太による。遺物写真は橋本 優が撮影した。
5. 遺構測量及び平面図作成は田中隆明が行った。
6. 現地調査において、竈の調査については外山政子（元榛名町史編纂室）の指導・助言を受けた。
7. 現地調査に従事した作業員は以下の通り。

石原三郎 岩崎のぞみ 樋澤礼子 栗田満 下橋幸徳 津田千鶴 中野光雄 堀口満夫 渡辺寿美子
8. 整理作業は青木指示のもと永井が担当し、各調査員と青木ゆかり・川邊みづき・谷藤龍太郎・富田和美・津田がこれにあたった。
9. 本書の執筆は、I が前橋市教育委員会事務局（文化財保護課）、人骨鑑定は谷畠美帆（明治大学）、獣骨鑑定は樋泉岳二（明治大学）、炭化材同定は高橋敦（株式会社古生態研究所）、他は辻口・岡田・永井である。
10. 本書の編集は永井監修のもと谷藤・川邊が行った。
11. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。
12. 調査及び報告書の作成にあたっては、下記の諸氏からご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）

阿久澤智和 出浦崇 梅澤重昭 小宮俊久 斎藤達也 佐野良平 高島英之 高橋清文 田中広明 中村岳彦
並木史一 藤井康隆 前沢和之 前原豊 松田猛 三浦京子 右島和夫 村山卓 吉田智哉

凡 例

1. 遺跡、全体図におけるX・Y値は、平面直角座標IX系（世界測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。
2. 挿図中で用いる遺構等の略称は以下のとおりである。

【堅穴建物跡】H 【溝跡】W 【土坑】D 【土壙墓】DB 【ピット】P 【攢乱】K 【土器】P 【石】S 【井戸跡】I
3. 遺構図は1/300・1/200・1/80・1/40、遺物実測図は1/4・1/2とし、各図中には縮尺とスケールを示した。

遺構図・遺物実測図の網掛けについては、個々の図中に凡例を明示した。
4. 本書で用いる火山噴出物の略称と年代については以下のとおりである。

【浅間山B軽石】As-B 天仁元年（1108） 【榛名山二ツ岳・渋川テフラ】FA 5世紀末 【浅間山C軽石】As-C 3世紀末～4世紀初頭

目 次

巻頭図版 はじめに 例言・凡例・目次

| | | |
|------|----------------------------|----|
| I | 調査に至る経緯 | 1 |
| II | 遺跡の位置と環境 | 1 |
| III | 調査の方針と経過 | 5 |
| 1 | 調査の基本方針 | 5 |
| 2 | 調査経過 | 5 |
| IV | 基本層序 | 5 |
| V | 遺構と遺物 | 7 |
| (1) | 堅穴建物跡 | 7 |
| (2) | 溝跡 | 11 |
| (3) | 土坑 | 11 |
| (4) | 墓跡 | 12 |
| (5) | 井戸跡 | 12 |
| (6) | 各時代の出土遺物 | 12 |
| VI | 元総社蒼海遺跡群（143）出土人骨 | 35 |
| VII | 元総社蒼海遺跡群（143）出土獣骨の同定結果 | 35 |
| VIII | 元総社蒼海遺跡群（143）出土炭化材・炭化種実の同定 | 37 |
| IX | 発掘調査の成果と課題 | 38 |
| | 抄録 | |

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、24年目にあたる。本調査地周辺では埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

令和3年11月1日付で前橋市長 山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より、埋蔵文化財発掘調査業務に係る依頼が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。事業実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、

市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。令和3年12月8日付で前橋市と、民間調査組織である山下工業株式会社との間で業務委託契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定を締結し、発掘調査に着手した。

なお、令和3年度は現地での発掘作業のみ実施し、整理作業については令和4年度業務として、山下工業株式会社が受注した。なお、遺跡名称である「元総社蒼海遺跡群（143）」（遺跡コード：3A270）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「（143）」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。（文化財保護課）

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置

今回報告する元総社蒼海遺跡群（143）は、前橋市西部の元総社地区に位置する。一帯は市内でも開発の遅れた地域と言っていたが、昭和40年代の国道17号高前バイパスの開通、次いで昭和50年代の関越自動車道前橋インターチェンジ供用開始と共に周辺地域の区画整理が継続的に実施され、都市化が進んだ。今回の調査原因である前

橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業も、一連の流れの中で実施されているもので、事業もようやく終盤に差しかかろうとしている。本地区南方では西部第一落合土地区画整理事業も開始され、元総社地区の変貌はより加速度的に進むこととなるだろう。

地理的環境

遺跡は榛名山東麓末端に位置し、約13,000年前の榛名山系の山体崩壊である「陣場岩屑なだれ」によって形成された広大な扇状地形である「相馬ヶ原扇状地」の末端でもある。岩屑なだれ層下には、約20,000年前に形成された「前橋泥流」が堆積しており、南東に広がる前橋台地の基層をなしている。

岩屑なだれや前橋泥流の上には、「前橋下部泥炭層」の堆積後、浅間 - 板鼻黄色軽石（As-YP・約13,000年前）・浅間 - 総社軽石（約11,000年前）を含む「前橋上部泥炭層」が堆積し、それを洪水性堆

積物である「総社砂層」が厚く覆う。総社砂層上には黒ボク土が生成された後、浅間C軽石（3世紀末降下）以降複数回に及ぶ火山灰を被っている。地形を詳しく見ると、扇状地の等高線に直行して下る八幡川・牛王頭川・染谷川・牛池川等の中小河川があり、総社砂層の供給源となる半面、砂層を深く抉る部分も多く、総社周辺の地形を左右したのだろう。また、古墳時代後期の榛名山活動期には、火山灰を泥流として押し流して谷筋を埋め、今日に近い比較的平坦な地形を造り出した。



Fig.1 遺跡の位置

「国土地理院発行 数値地図 1/200000」を改変

歴史的環境

総社周辺は、先述の「総社砂層」堆積後、地表面が安定して黒ボク土が生成され始めた縄文時代前期以降、遺跡の分布がみられるようになる。弥生時代以降の広域での考古学的経緯については一昨年度刊行の(142)報告書においてまとめていたため、ここでは今回報告の主体である古墳時代後期後半以降の様相について触れておきたい。

古墳時代後期後半 中期末～後期初頭に発生した榛名山火山災害後の復興的様相が発展し、榛名山東麓では標高150m程度まで大小の集落遺跡が連続と点在する様相へと至る。元総社周辺では、これまでの調査で夥しい数の竪穴建物跡が検出されており、大形竪穴建物跡を複数伴う大規模集落遺跡の片鱗が見えつつあるが、後世の国府→蒼海城の攬乱に阻まれて未だ全貌は不明である。

後期後半の墳墓としては、総社地区の北部に総社二子山古墳(イ)と総社愛宕山古墳(ロ)が相次いで築造されている点は示唆的である。総社二子山古墳(イ)は全長90mを超える前方後円墳で、葺石・埴輪をもつ。後円部に角閃石安山岩の加工石材を用いた横穴式石室、前方部に安山岩乱石積の一回り小さい横穴式石室をもつ。2つの石室に時期差が存在するか否かは明らかにし得ないが、前者は6世紀に榛名火山から噴出した軽石(FP)を加工して用いる特徴的な石室構造で、高崎市綿貫觀音山古墳(全長98mの前方後円墳)に代表され、利根川中流域に広くその分布をもつ。一方の後者は榛名山南東麓に多く分布し、後期前半の榛東村高塚古墳(ヲ)等がそのプロトタイプとなる。つまり2系統の石室を一つの墳丘に内包する総社二子山古墳(イ)は、2系統の集団による前方後円墳であった可能性が考えられる。なお、前方部石室からは過去に頭椎大刀の優品が出土していることが絵図によって知れるが、一般にこの種の大刀は物部氏との関係を示唆する。続く愛宕山古墳(ロ)は一辺56mの大方墳で、近年の調査で幾重にも墳丘を覆う葺石が確認され、後期初頭の王山古墳のそれを彷彿とさせるものであった。安山岩乱石積の大規模な横穴式石室内には精美な剝抜式家形石棺が納められているが、残念ながら副葬品は不明である。とは言え本古墳が方墳であること、前方後円墳である総社二子山古墳(イ)に次いで築造されたと考えられることは重要である。同時期の畿内に目を転じると、森浩一によって崇峻陵と説かれている奈良県桜井市赤坂天王山古墳が墳形・規模、家形石棺をもつという点で酷似しているが、葺石や横穴式石室構造には在地の伝統が明瞭である。何れにせよ愛宕山古墳の被葬者が、畿内中枢部と深い関わりを持っていた事は確かであろう。

古墳時代終末期(飛鳥・白鳳期) 集落遺跡は元総社地区に広がり、竪穴建物跡の数は増加の一途を辿る。該期後半には元総社蒼海遺跡群で長大な掘立柱建物跡が、山王廃寺(c)下層からは規則的に並ぶ掘立柱建物跡群も確認されており、これらは正方位に斜行する地割を指向している。特に後者建物跡群については、豪族居館や群馬評衛ないしはその前身である屯倉に關係する遺構群との理解があり、元総社蒼海遺跡群等で確認されている同時期の夥しい数の竪穴建物跡も、これに付随するのであろう。

墳墓として、まず総社古墳群中の宝塔山古墳(ハ)と蛇穴山古墳(ニ)があげられる。宝塔山古墳(ハ)は一辺66mの大形方墳で、3段築成で葺石をもつ。複室構造の横穴式石室は截石切組積の精美なものであるにも関わらずさらに漆喰を厚く塗って仕上げており、玄室に納められた脚部をもつ特異な剝抜式家形石棺には格狭間の意匠があしらわれている。格狭間は仏教文化の影響とされており、墳墓の事例としては大阪府太子町の聖徳太子墓の棺台が知られる程度である。また、横穴式石室はその平面形態が奈良県奈良市帶解黄金塚古墳(一辺30mの方墳)と酷似することが指摘されている。帶解黄金塚古墳は蘇我石川麻呂の墓であるという奥田尚の説があり、総社愛宕山古墳(ロ)共々、蘇我氏との関わりが見える点は興味深い。蛇穴山古墳(ニ)は一辺44mの方墳ないしは長方墳で、近年の調査では二重周溝で法面に葺石をもつ中堤の存在や、愛宕山古墳同様に幾重にも墳丘を覆う葺石の存在が明らかとなっている。石室は硬質の加工石材をパネル状に組み合わせた玄室と截石切組積の短い羨道とハの字状に開く前庭部という特殊な構造であるが、これは後世の改変である可能性が近年の調査によって高まった。石室内には漆喰が塗られ、玄室中央には棺台とされる大きな加工石がある。

群集墳については、元総社周辺では確認されておらず、総社古墳群北方の稻荷山古墳(ト)等、小円墳数基が点在する程度である。また、元総社地区を流れる染谷川・牛池川・八幡川・牛王頭川の上流部には榛東村長久保古墳群(ル)・前橋市清里・長久保古墳群(タ)・吉岡町南下古墳群(カ)、高崎市金古如来古墳群(ヌ)があり、長久保古墳群(ル)は後期後半からの継続で、数十基が裾を重ねる程に密集し小規模前方後円墳を群中に伴う等、典型的な後期群集墳の様相を示しているが、清里・長久保古墳群(タ)は小円墳の点在で石室内から鉄釘を出土する例があり、南下古墳群(カ)は宝塔山古墳(ハ)に類似する截石切組積の精美な石室を伴う円・方墳が数基点在、金古如来古墳群(ヌ)では帶金具を多量に出土、吉岡町三津屋古墳(ヨ)は明確な

Tab.1 周辺遺跡一覧

| 集落 | 14 | 大屋敷遺跡 | 28 | 棟高村北遺跡 | 42 | 日輪寺觀音前遺跡 | ヲ | 高塚古墳 | |
|----|-------------|-------|-----------|--------|------------|----------|---------|------|-----------|
| 1 | 元総社蒼海遺跡群 | 15 | 総社町屋敷遺跡 | 29 | 棟高南八幡街道遺跡 | 43 | 南橘東原遺跡 | ワ | 大藪城山古墳 |
| 2 | 元総社寺田遺跡 | 16 | 大渡道場遺跡 | 30 | 熊野堂遺跡 | | 古墳・古墳群 | カ | 南下古墳群 |
| 3 | 大友屋敷遺跡 | 17 | 前橋城 | 31 | 井出村東遺跡 | イ | 総社二子山古墳 | ヨ | 三津屋古墳 |
| 4 | 天神遺跡 | 18 | 石倉下宅地遺跡 | 32 | 三ツ寺I遺跡 | ロ | 愛宕山古墳 | タ | 清里・長久保古墳群 |
| 5 | 弥勒遺跡 | 19 | 元総社稻葉遺跡 | 33 | 三ツ寺II遺跡 | ハ | 宝塔山古墳 | | 神社 |
| 6 | 中尾遺跡 | 20 | 新保田中村前遺跡 | 34 | 三ツ寺III遺跡 | ニ | 蛇穴山古墳 | A | 総社神社 |
| 7 | 鳥羽遺跡 | 21 | 日高遺跡 | 35 | 棟高遺跡群 | ホ | 遠見山古墳 | B | 三宮神社 |
| 8 | 上野国分僧寺・尼寺中間 | 22 | 小八木村東遺跡 | 36 | 北谷遺跡 | ヘ | 大小路山古墳 | | 寺院 |
| 9 | 国分境遺跡 | 23 | 正觀寺遺跡I～IV | 37 | 池端北耕地下ノ割遺跡 | ト | 稲荷山古墳 | a | 上野国分寺 |
| 10 | 北原遺跡 | 24 | 小八木志志貝戸遺跡 | 38 | 七日市遺跡 | チ | 王山古墳 | b | 上野国分尼寺 |
| 11 | 下東西遺跡 | 25 | 正觀寺西原遺跡 | 39 | 大久保A遺跡 | リ | 諸口古墳群 | c | 山王廃寺 |
| 12 | 柿木遺跡 | 26 | 中泉源十内遺跡群 | 40 | 熊野・辺玉遺跡 | ヌ | 如來古墳群 | d | 新保廃寺 |
| 13 | 村東遺跡 | 27 | 菅谷万年貝戸遺跡 | 41 | 金竹西遺跡 | ル | 長久保古墳群 | | |

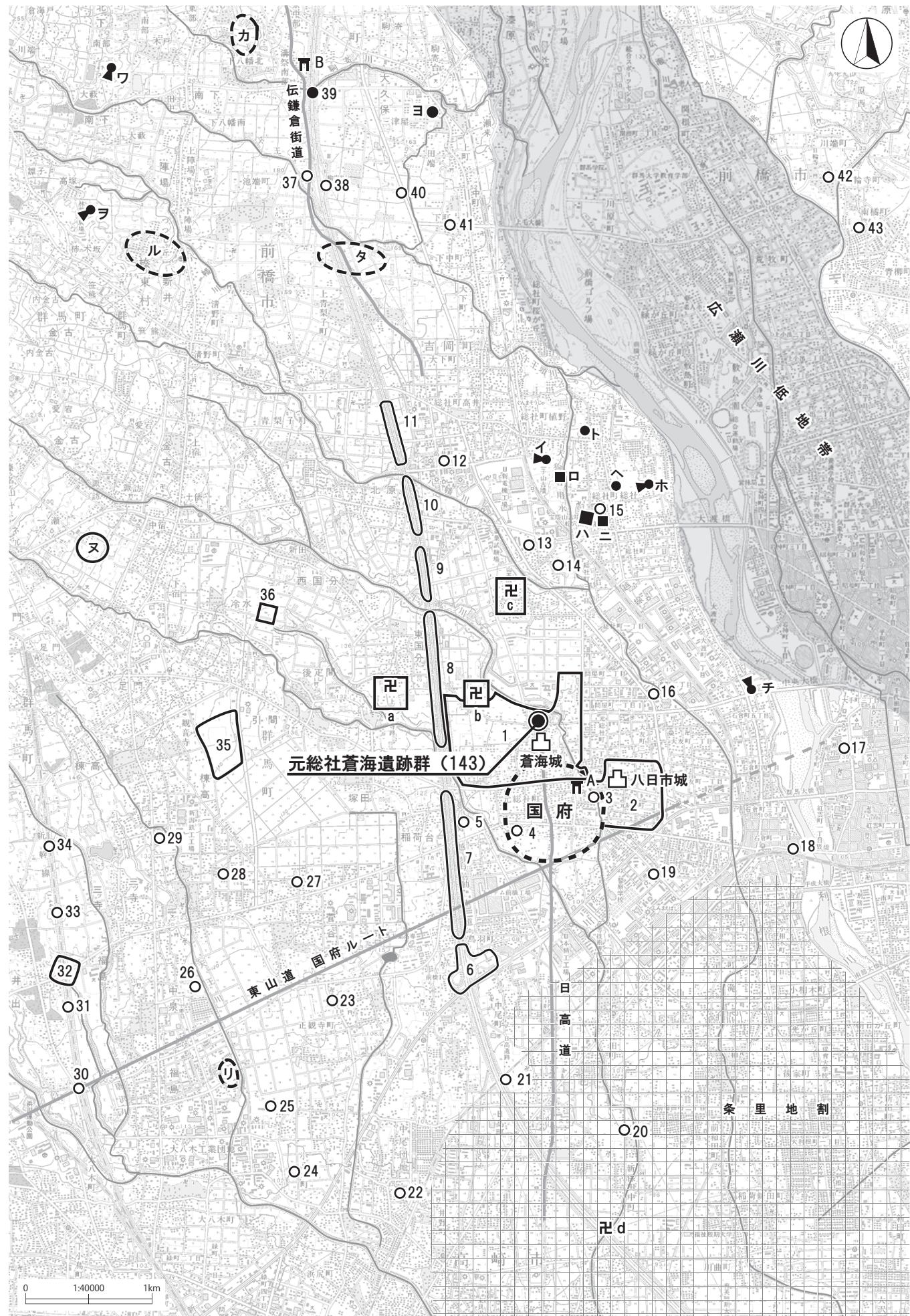


Fig.2 元総社蒼海遺跡群（143）の周辺遺跡

八角墳で截石切組積の横穴式石室をもつ。いずれも総社地区の遺跡群との関係で理解すべきと思われる。

白鳳期には総社古墳群北方に山王廃寺（c）が建立される。前期評段階に創建された寺院としては上野唯一のもので、昭和・平成の2回におよぶ確認調査が行われ、出土瓦に見られる線刻・押印から旧寺名が「放光寺」であった可能性が考えられる点、塔跡周辺から出土した大量の塑像から畿内中枢部の寺院と深く関わる寺であった事が判明している。また、先述した下層遺構を豪族居館や評衛・屯倉とした場合、こうした重要施設を移動させて造営していることになる。また、塑像は造形技術水準の高いもので、作風は斑鳩法隆寺塔本塑像に類似している。奇しくもここで再びの蘇我氏の影は、総社愛宕山古墳（口）から蛇穴山古墳（二）への流れに沿う事象と言え得る。また、東山道駅路の開鑿もこの時期で、今日までの研究によって「牛堀・矢ノ原ルート」→「下新田ルート」→「国府ルート」へ3時期・3ルートの変遷が定説となっている。最初の「牛堀・矢ノ原ルート」は太田一伊勢崎一高崎の平野部をほぼ東西の直線で通ることが発掘調査で判明している。元総社エリアからは遠く南方であり、その間を南北に繋ぐ連絡路として「日高道」が以前より指摘されているが、開鑿時期については不明である。

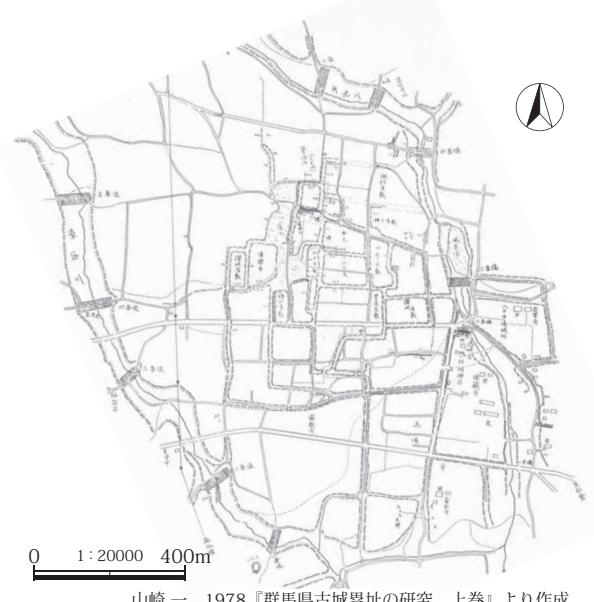
奈良時代 元総社蒼海遺跡群の南東、総社神社に近い一帯で竪穴建物跡が姿を消す。代わりに正方位の区画溝や掘立柱建物跡、基壇建物跡が出現する。無論、元総社エリア内に以前より推定されている上野国府との関わりで理解されると考えられるが、国府域の一角に設けられたと考えられる群馬郡衙の可能性が高いと考えられつつある。現在前橋市教育委員会による確認調査が継続中であり、今後の動向が注目されるところである。また、やや標高の高い前橋市池端北耕地下ノ割遺跡（37）では廂をもつ大規模な掘立柱建物跡が単独的に検出されており、その性格については不明であるが、前時代の南下古墳群（カ）や三津屋古墳（ヨ）等が近傍であることを勘案すれば、国府の出先施設等の可能性もある。他にも高崎市棟高南八幡街道遺跡（29）には、布掘の掘立柱建物跡や大形竪穴建物跡からなる公的な雰囲気をもつ遺構群があり、その性格が注意される。推定国府域の西方には、国分寺（a）・国分尼寺（b）も建立される。上野国分寺（a）は昭和の調査成果からある程度整備が行われていたが、近年県教育委員会の再調査で伽藍配置が異なることが判明、その研究は新たなスタートに立っている。国分尼寺（b）は近年高崎市教育委員会によって確認調査が進められており、伽藍配置が判明しつつある。一方で該期には国府周辺域を含め、古墳時代以来の生産域の再編が行われる。前橋・高崎台地とその間の井野川低地帯を包括する広域条里の施工である。前橋市南部拠点地区遺跡群No.11では坪交点からまとまった土器の出土が確認され、施工年代を示している。また、条里の施工に伴い用水路網の整備も行われており、前橋台地では広瀬川から取水した用水路網（女溝や川曲大溝）が、高崎台地から井野川低地帯では榛名白川から取水した用水路網（後の長野堰用水）が開鑿されたと考えられる。これらの用水路からは発掘調査によって「物部」と記した遺物が出土している点は注目される。また、交通網の整備も行われたと考えられ、高崎市倉賀野地区や新保・日高地区では条里余剰帶を利用した道路跡と推定される遺構が検出されている。当該期前半に想定される東山道駅路の「下新田ルート」も、現状広瀬川以西では未確認だが、おそらく条里余剰帶を利用したものであったと推定される。なお、当該期における条里施工は確実であるが、先行する飛鳥時代にその設営に関わると推定される短命な集落遺跡が点在していることは興味深い。本地域における条里施工時期は、今後も検討を深める必要がある。

平安時代 国府域やその周辺では、集落・寺院・条里は前時代からの継続と理解されるが、集落は標高の高いエリアに集中する傾向が

指摘でき、畑作や馬匹生産を視野に置く必要があるだろう。吉岡町大久保A遺跡（39）はかつて「有馬島牧」の可能性が示唆されたが、その後渋川市半田中原遺跡から「有牛」墨書き土器が出土したことでも牧関係遺跡説は否定された経緯がある。現状では三宮神社（B）が北に隣接して鎮座していること、古代伝路の可能性がある「鎌倉街道」沿いに位置する点から、群馬郡桃井郷の中心的集落であると考えられる。何れにせよ、こうした集落の成立背景は、条里水田の荒廃と対をなす現象と言えるのだろう。

古代末～中世 元総社地区に蒼海城が築城される。その詳細な時期や成立過程については不明な部分が多いが、『上毛伝説雜記拾遺』「総社記」には長元元年（1028）に城館の存在を示す記述があり、実際の発掘調査成果でもこれを肯定し得るような古代末の遺構・遺物の集中が、蒼海城中枢部で確認されている。しかしながらその実体は「区画溝に囲まれた何か」で、住宅のようなものと推察される。『吾妻鏡』には、治承四年（1180）に元総社地区を支配していた源氏方の千葉常胤の居宅を平氏方の足利俊綱が焼き払ったとの記述があり、まさにその千葉氏の居宅が蒼海城初期の姿であったと思われる。

その後、建武四年（1337）に山内上杉憲顕が上野国守護に、上杉氏家宰である長尾氏が14世紀中頃までに入部したと考えられ、長尾氏は白井城の白井長尾氏と蒼海城の総社長尾氏とに分立、守護代として栄える。享徳三年（1454）に始まる享徳の乱は東国全域を巻き込む戦乱となり、上野国でも長尾景春の乱（文明九年・1477）や長享の乱（長享元年・1487）が相次いで勃発する。これらの戦乱を契機に蒼海城は城郭化したようである。大永七年（1527）には北条氏綱方の白井・総社長尾氏と箕輪・厩橋長野氏の間で抗争が勃発、蒼海城は長野方業の攻撃を受けている。後に両長尾氏は上杉家との関係修復を果たすも、長野氏とは依然緊張関係が続いた。永禄九年（1566）、甲斐国の武田信玄によって箕輪城が落城、翌年には蒼海城も攻略され上野国西部は武田氏の支配域となる。以降、元総社地域は武田・上杉・織田・北条の支配が繰り返され、天正十八年（1590）の小田原城落城によって徳川家康の支配域となる。蒼海城には同年に諫訪頼忠、慶長六年（1601）にはその子である諫訪頼水に替わって秋元長朝が入部する。秋元氏は荒廃した蒼海城を捨てて父景朝ゆかりの地である上野勝山（現在の総社町）に新城を築くことを選んだようで、新城が完成するまでの間は蒼海城の東方牛池川対岸の八日市城に居住し、慶長十五年（1610）に完成した新城である総社城に入城、これをもって蒼海城は廃城となった。



山崎一 1978『群馬県古城墓址の研究 上巻』より作成

Fig.3 蒼海城縄張図

III 調査の方針と経過

1 調査の基本方針

今回の発掘調査は、区画整理事業地内の道路新設に先立つもので、ちょうど十字路部分に相当する。直前まで平屋の「文化住宅」複数棟と鉄筋コンクリートのアパート1棟が建っており、緩い傾斜地を水平に造成するための削平をかなり受けている印象であった。また、南側畠地には蒼海城本丸西側へ続く堀跡が確認され、その延長部の確認も明白であった。こうした経緯もあり、隣接既調査区の成果を参考に、事前の確認調査は行わずに本調査となつた。現地調査は排土処理の関

係から、蒼海城堀跡部分の調査を先行し、その後堀跡部分に排土山を形成するスイッチバック方式で実施することとした。蒼海地区最後の大面積調査で、かつ蒼海城の堀底を見ることのできる最後のチャンスと考え、堀跡調査は弊社の機械力を集結させてこれに臨んだ。堀跡以外は、堀の東側では攪乱層直下の総社砂層上位、堀の西側ではAs-C混土下位の黒ボク土上面を確認面とした。

2 調査経過

令和4年1月5日、アパート跡地である推定堀跡東側の遺構残存状態を探るため、トレーナーを重機により掘削。思いのほか残存状態が良いことを確認、心の準備。そのまま堀跡の重機掘削に移行。翌6日から作業員投入。堀の立ち上がり→堀底の順で精査を行う。排土は既に重機のバケットが届かない深さ・距離なため、調査区端で堀跡を切断するトレーナーを開削、ここに人力精査の排土を運び、重機で上げる方法で調査。12日に堀跡部分の確認を文化財保護課より受けた後、空撮・測量、その後埋め戻し。休日を利用して東端から表土除去開始。これを追いかけて人力で鋤簾による遺構確認を行い、適宜遺構に附番して掘り下げ開始。並行して堀跡西側の表土掘削。東側とは驚くほど土の様相が異なっており、剥ぎ足りない部分を何度も再進入して掘削するという試行錯誤もあった。

調査は冬から春にかけてという最悪の条件下であった。特に一面総社砂層が露呈した東側調査区では、北西からの季節風による砂塵が凄まじく、給水車で川の水を汲んで持ち込み、動力噴霧器で散水するも焼け石に水状態であった。かと思えば降雪によって作業中止となり、土が凍結して作業不可能となることも度々、迫る調査期限に担

当以下調査員はかなり精神的に追い詰められた。終盤に至って春の気配を感じるようになった頃、ようやく西側調査区の遺構に手がついたが、良好な焼失建物跡や平安期とは思えない程に重複した建物跡群に悩まされ、調査関係者全員が体力・気力の限界に達する頃、ほぼ完掘することができた。埋め戻しを翌日に控えた調査最終日、12世紀初頭の竈という誰も経験したことの無い遺構のダメ押しをしたところ、担当者の移植ゴテが白磁碗の完形品を掘り当てた。急遽精査したところ、竈の下に古代の土壙墓があったことが判明した。白磁碗は頭骨と思われる骨粉集中の脇からの出土で、副葬品と判断された。既に測量用の杭を撤去した後で手間取ったが、人骨も発砲ウレタンで土ごと取り上げる等、今回の調査で最大の成果とも言える資料を記録することができた。つくづく調査は最後まで気を抜けないことを再認識した、印象深い出来事であった。

整理作業と報告書作成は、契約締結後の令和4年6月から開始。遺物の水洗・注記・接合、9月から遺物実測に着手、点数多く11月まで要した。その後図版作成と原稿執筆、編集を経て、3月6日に本書の刊行に漕ぎつけた。

IV 基本層序

調査区は北西から南東へ延びる微高地で、南東方向への緩斜面地であったようだが、中央を南北に走る蒼海城堀跡を境に東側は昭和期の

アパート造成によって削平され、確認面の環境は調査区内でかなり異なる。以下が、本地点の基本層序である。

- 0 昭和期の宅地造成に伴う攪乱層。調査区東側のみ。
- I 灰褐色土 As-A等を含む砂質土壤。耕作土。調査区西側のみ。
- II 暗灰褐色土 As-B軽石を含む。いわゆるB混。調査区西側のみ。
- III 灰褐色土 As-B軽石。調査区西側のみ。
- IV 黒褐色土 As-Cを多量に含む。いわゆるC黒。調査区西側のみ。
- V 淡黒褐色土 しまり強い。いわゆる黒ボク。調査区西側確認面。
東側では南東端のみ残存。
- VI 淡黄褐色土 総社砂層。調査区東側の確認面は本層上位に相当。
下位に薄い泥炭質黒色土層を数枚挟んでいる。

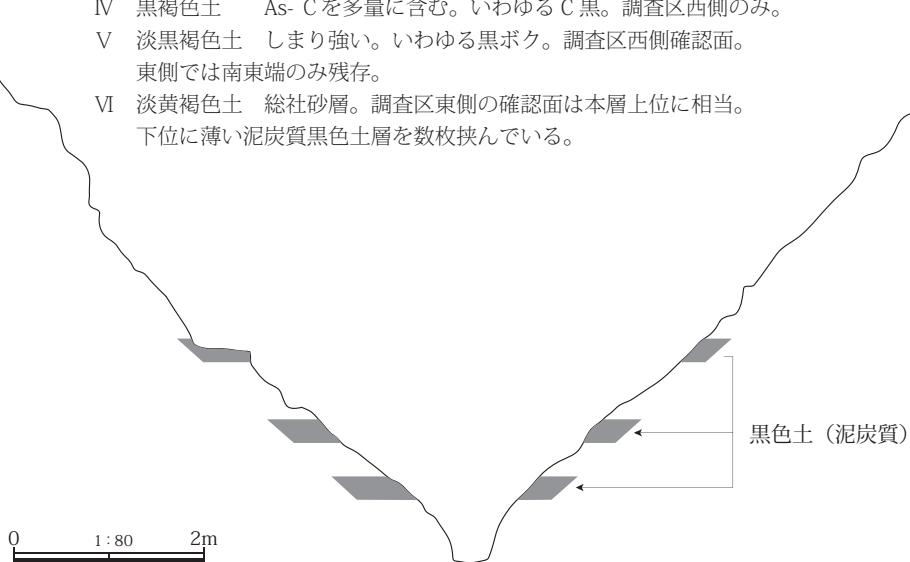


Fig.4 基本層序模式図



Fig.5 周辺調査区とグリッド設定図

V 遺構と遺物

今回の調査区は、北に平成27年度実施の元総社蒼海遺跡群(104)、西に元総社蒼海遺跡群(6)東調査区が隣接しており、南北に走る蒼海城堀跡等の検出遺構や出土遺物は予め予想可能であった反面、東半部では昭和期の文化住宅群等の建設による削平・攪乱が懸念された。実際には中央の堀跡と西半部は隣接調査区の成果から予想された範囲であったが、東半部は全面的に上面削平されているものの遺構を消滅させるほどでは無く、予想以上の遺構数であった。既に述べたように

(1) 竪穴建物跡

現地調査段階ではH-29まで附番し、H-5・20を欠番としたが、枝番を合わせて合計29軒である。本報告では遺物注記や遺構図面原図の混乱を避ける意味で欠番枝番のままとした。以下、遺構毎に説明する。

H-1 竪穴建物跡 調査区中央北寄りに位置し、蒼海城堀跡であるW-1に切られ、北西壁の一部を近年の攪乱によって失っている。竪穴部は北に対して斜行する軸方向で、正方形に近いが南北にやや長い長方形である。覆土は比較的黒味が強く自然堆積と考えられ、土師器・須恵器片が出土している。床面はほぼ直床で、総社砂層の上に貼床状の汚れた土を認めるが、硬化範囲ははっきりしなかった。壁周溝は竪を除いて全周するようである。床面からは土器以外に砥石と自然石が散在的に出土しており、南東壁際から出土した自然石4点は使用状態を示す菰編石と考えられる。柱穴については対角線上に4ヶ所深い主柱穴(P1～4)と、南東壁際に浅い出入口の梯子穴を1ヶ所確認できた(P6)。竪は北東壁の中央南寄りから検出された。構築材として総社砂層の板状材を両側に使用していた。焚口部付近で土師器長胴甕がソケット状に重なって出土しており、天井部の構築材であったことがわかる。また、煙道入口部には太い円柱状粘質土(焼結している)が検出されているが、位置も燃焼室より奥であること、高さも20cmあるので、甕を支える支脚ではなく燃焼室奥の天井を支える構造材と判断される。貯蔵穴は竪に向かって右手前から1ヶ所確認され(P5)、長方形の浅い段の中に円形で深い部分がある。上面からは土師器壺と須恵器壺蓋各1点が重なった状態で出土した。本遺構は貯蔵穴の土器を根拠に7世紀中葉と位置づけられる。

H-2 竪穴建物跡 調査区中央北端近くに位置する。北側半分以上を蒼海城堀跡であるW-1に、南西壁の一部をわずかにW-2によって切られている。竪穴部は北に対して斜行する軸方向の方形で、南東壁の中央が丸く張り出している。覆土は比較的黒味が強い自然堆積で、土師器・須恵器片が出土している。床面はほぼ直床で、硬化範囲ははっきりしなかった。壁周溝は張り出し部でやや浅いが、残存する範囲では全周している。床面からは土器以外に菰編石と考えられる自然石が出土している。柱穴については対角線上の主柱穴と考えられるもの(P2・3)と、位置的には柱穴だが長方形気味で貯蔵穴の可能性があるもの(P1)、南東壁張り出し内の浅い梯子穴と考えられるもの(P4)が確認された。竪は確認できなかった。本遺構は床面出土土器から7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。

H-3 竪穴建物跡 調査区東側に位置し、北側過半が調査区外に、不鮮明であったがH-7が上に乗っている。竪穴部は北に対してやや斜行する方形で、比較的深い。覆土は比較的黒味が強いが堆積状況は人為的埋め戻しの可能性があり、土師器・須恵器の細片が出土している。床面はほぼ直床で、砂礫質の凹凸を均す程度に薄く硬質な黒色土があるが、その硬化範囲についてははっきりしなかった。壁周溝は西側のみで、東側には確認できなかった。床面からは東隅付近から完形ないしはそれに近い土師器・須恵器が出土しているほか、壁近くから菰編

季節的な条件の悪さ、それから生ずる作業進捗の遅れがスケジュールを圧迫し、精度の低い調査となってしまったことは否めない。

今回の調査区では古墳後期～奈良時代、平安時代の竪穴建物跡と溝跡・土坑・土壙墓、遺物もその時期の土器・陶磁器・鉄器をはじめ、縄文時代の土器・石器もある。遺構の数値は図・表を、遺物は觀察表を参照されるとし、ここでは竪穴建物跡、溝跡、墓跡を中心に説明する。なお、ピットの多くは時期不明であることから、割愛させて頂く。

石と考えられる自然石が散在的に出土している。柱穴については明確なものは確認できず、南東壁際東寄りのものは浅く梯子穴の可能性がある。竪は確認できなかった。本遺構は出土土器を根拠として7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。

H-4 竪穴建物跡 調査区中央北寄りに位置し、H-2の東側至近にある。北側をW-1に切られ、南東を攪乱に破壊され、東側が調査区外となり、確認段階で床面がほぼ消失するほどの残存状態であった。竪穴部は北に対して斜行する方形である。覆土は殆ど残っていないが、比較的黒味が強い。平安期の須恵器塊片が出土しているが、混入か重複と考えられる。床面は周囲がほぼ直床ないしは浅い掘方をもつが、中央部分はやや深い掘方があり、床面自体が一段下がっていた可能性があるが、残存状態が悪く判然としない。壁周溝は南西辺のみで、北西辺側には確認できなかった。柱穴については攪乱下も含めて柱穴と思われる小穴が4ヶ所確認されたが、位置的に主柱穴といえるのは3ヶ所(P1～3)である。他に2ヶ所の土坑(D2・3)があり、覆土は埋め戻し風で掘方の一部と考えられるが、D3(D-2と同一)についてはその形状から、上位に想定される平安期竪穴建物に伴う貯蔵穴の可能性もあるだろう。竪は北西辺のほぼ中央に確認されたが、空焚き時の火床面とその下の掘方が確認されたのみで、残存状態は悪いが改修された形跡がある。なお、竪は竪穴内部で収まる。貯蔵穴は竪に向かって右側にあり(D1)、平面は不整長方形で比較的深いものを円形で更に深い構造に改修していた。根拠に乏しいが、本遺構は7世紀前半頃と推定される。

H-6 竪穴建物跡 調査区東端近くにあり、今回調査区で最東端である。確認面の層序は東へ向かって下り始めているが、東側現道へ擦りつけるような昭和の造成の為、遺構の東半は削平され床面も消失している。また、東側には近世土坑(D-16)が重複、昭和期の配管に伴う溝状の攪乱も袈裟懸け状に本遺構を切っている。竪穴部はほぼ正方位で、覆土は殆ど残っていないが、比較的黒味がある。床面はほぼ直床で西辺沿いに掘方があり、硬化面は南半部で認識され、出入口と後述する竪と貯蔵穴の導線を示している。壁周溝は確認できず、柱穴についても明確なものは確認できなかった。竪は東壁南端に火床面が残存していたが軸方向は不明で、あるいはコーナー部であった可能性がある。貯蔵穴(P1)は竪に向かうと背後ないしは右背後に相当する位置にあり、平面は楕円形で比較的深い、北側から埋め戻されたかのような堆積で、底面には白色の粘質土も確認され、本来粘土貼りであった可能性がある。覆土中位から羽釜片が出土している。本遺構は貯蔵穴出土遺物から10世紀代と推定される。

H-7 竪穴建物跡 調査区東側に位置し、H-3の上に乗っている。古い立木痕跡と思われるシミ状の黒色土部分が確認面で確認が困難であった上に、近世以降の囲炉裏状の攪乱から窓われる民家の攪乱が全体的に及んでおり、残存状態は悪い。竪穴部は壁面が確認できなかったが、正方位に近い方形であったと考えられる。覆土は殆ど残っていないが、比較的黒い。床面は硬化面が確認され、概ね竪の前面に相当

する。硬化面の西端付近には被熱を受けた浅い窪みがあり、炉と判断したが鉄塊系遺物は確認できなかったことから鍛冶炉ではないようである。遺物はほぼ炉の近くの床直で出土しており、土師質土器の小皿等がある。竈は竪穴部の残存状態が惨憺たる状況であったものの比較的良好で、南東 - 北西軸であることからコーナー部設置であることがわかる。燃焼室は判然としないが竪穴部床面より下に潜る煙管状の長い煙道部が掘方内より確認された。本遺構は 10 世紀後半～11 世紀代と推定される。

H-8 竪穴建物跡 調査区東側に位置し、H-7 の南東至近にある。I-1 に切られ、上位は削平されている。竪穴部はほぼ正方位の正方形で、覆土は暗褐色であった。床面は竪穴中央付近に硬化面が確認されたが、調査開始時に入れたトレーニングによって半分以上を失ってしまった為、判然としない。壁周溝は竈を除き全周し、比較的太くしっかりしたプランで検出された。柱穴は小穴を複数確認したものの、明確なものは無く（P5・6 は後世か）、南壁際に近いもの（P1・2）は出入口施設にかかる可能性を指摘できる程度である。床面下には全面的に浅い掘方があり、特に中央部分には不整形に深い部分が認められたが、西側のものは縄文期の土坑の可能性がある。竈は東辺南端にあり、掘方では東西主軸であることからコーナー部設置ではない。改修を経て 2 時期あるようだが、後世のピットに切られた上に覆土も薄く、平面と断面で確認を繰り返したものの判然としない結果となってしまった。瓦片が数点出土しており、構築材と考えられるがその位置は動いているようであった。貯蔵穴は竈に向かって右背後にあり、平面楕円形で上端に浅く段をもつ（D1）。本遺構は 10 世紀後半と推定される。

H-9 竪穴建物跡 調査区中央北東寄りに位置し、D-5 に僅かに切られる以外は比較的の残存状態は良いが、近傍の H-1 と共に上位はかなり削平を受けている筈で、本来的な深さは倍以上であったのだろう。竪穴部は北に対して斜行し、南北に長い隅丸長方形で、全体に丸みがある特徴的なプランと言える。覆土は黒味の強い自然堆積で、土師器・須恵器片が出土している。床面は半がほぼ直床で、硬質な総社砂層上に貼床状の汚れを認めるが、硬化範囲ははっきりしなかった。北半は床面が無く、不定形な掘り込みとなっている（D1）。明確な掘り込み面を層位的に示せないものの、上半は黒褐色の竪穴部と同じ覆土であることから、建物廃絶後程なくして床面から掘り込まれたと理解される。壁周溝は断続的であるが全周しており、東辺では壁から離れて二重になっている。内側の壁周溝は床面を剥がして確認されたことを考慮すれば古段階と判断されるので、東壁を拡張する改修が想定される。柱穴については北辺と南辺の壁下中央に対となる小穴があり（P1・2）、稀であるが主柱穴 2 ケ所であったと考えられる。注目されるのは、北辺壁下中央の柱穴（P2）は、先の床面からの掘り込み（D1）がこれを避けたかのような半島状に突出する部分に位置している点である。おそらく床面からの掘り込み（D1）は、上屋の存在していた建物内での掘削であった為、無理矢理でも柱を残す必要があったのだろう。掘り込みの性格については、硬質な総社砂層を層理で剥ぎ取ったかのような凹凸が観察されること、排土と思しき土が竪穴内には無いので、基本搬出した可能性が高い。つまり竈構築材の採掘坑と考えられる。竈は東辺の南寄りにあり、明確な構築材は抜き取られたのか判然としない。断面観察を繰り返した結果、南寄りの旧竈をやや北の新竈を作り直した可能性が導かれた。貯蔵穴は一般的な位置（竈右側）から確認されなかったが、これについては竈左側の貯蔵穴が廃絶後の竈材採掘坑（D1）によって消失した可能性も排除しきれない。本遺構は壁周溝から想定された竪穴壁を東に拡張する改修、竈を作り直す改修が認められ、廃絶（＝空家）を挟んで 2 時期存続した建物と捉えられる。そして最後には上屋を残したまま竈材の採掘に供されたという、興味深い所見が得られた。7 世紀末～8 世紀初頭に位置づけられる。

H-10 竪穴建物跡 調査区東側に位置し、H-6 の南西、H-8 の南東至近にある。昭和期の宅地に伴う配管が集約する場所であり、その撤去に伴う攪乱も激しく、残存状態は悪い。竪穴部はほぼ正方位の概略正方形で、覆土は暗褐色でやや黒味があった。床面は竪穴中央で僅かに硬化面が確認されたが、大半は攪乱による損傷を受けていた。従つて壁周溝は確認できなかった。柱穴は不明で、北辺西寄りの竪穴壁に喰いこむ土坑状の窪み（P1）が確認されたが、柱穴とは考え難い。床面下には全面的に浅い掘方があり、土坑状の浅い窪みが複数確認されたが、攪乱と判別が難しい状態であった。竈は攪乱によって失われたようで、東辺南端にあったと推定される。貯蔵穴は竈に向かって右背後で確認され（D1）、平面は不整楕円形で、基盤層中の石を避けたようである。覆土中から土師質土器の高台付碗と小皿が出土している。これを根拠に、本遺構は 10 世紀中葉～後半に位置づけられる。

H-11 竪穴建物跡 調査区東側南寄りに位置し、近世～現代までの攪乱によって破壊されている上、南東隅は調査区外となる。竪穴部は北に対してやや斜行し、南北が僅かに長い長方形である。覆土は暗褐色系で埋め戻しと考えられる層序、土師器片が含まれている。床面は貼床状に複数面認められるが、全体的に緩く硬化面は確認できなかった。床下には掘方をもち、中央部分は不定形土坑状にやや深い。壁周溝は竪穴壁の残存する全ての場所に認められ、竈の袖下にも巡る。柱穴については対角線上から 4 ケ所確認された（P1～4）。竈は南西辺の南寄りに確認されたが、大半は攪乱により破壊され、右袖のみ残存している状態であった。袖は粘質土で構築され、先端には土師器甕が逆位で封入された状態で出土した。貯蔵穴は竈に向かって左側にあり（D1）、平面長方形でやや深いものを、円形で深い構造へ改修していた。竈に封入された土器を根拠に、6 世紀後半～7 世紀前半に位置づけられる。なお、H-4 は貯蔵穴や床面・掘方が本遺構に類似していることから、同期的と考えられる。

H-12a 竪穴建物跡 調査区中央南東寄りに位置し、H-12b の覆土上で確認した。昭和期の鉄筋コンクリートアパートの合併浄化槽とそれに繋がる配管、さらにそれらの撤去によって破壊されており、床面と推定貯蔵穴を辛うじて把握したに過ぎない。竪穴部の形態は全く不明であるが、面的に確認された床面硬化範囲と推定貯蔵穴（D1）の位置関係から、H-12b よりも東側に中心をもつ正方位で正方形のプランであった可能性がある。床面からは高台付碗（挿図 62）が出土している。竈は攪乱によって失われているが、推定貯蔵穴の位置から逆算すると東辺の南寄りであったと推定される。推定貯蔵穴（D1）は円形であった。本遺構は 10 世紀後半に位置づけられる。

H-12b 竪穴建物跡 調査区中央南東寄りに位置し、近世～現代までの攪乱や土坑（D-8）によって破壊されているが、遺構自体が深い為、比較的の残存状態は良かった。上に H-12a、西側に H-19 が重複しているが、切り合いの実態は攪乱で不明、遺物から本遺構が最も古い。竪穴部は北に対してやや斜行し、東西にやや長いが正方形の範囲内である。覆土は黒味が比較的強いもので、土師器・須恵器の破片が西方から流れ込んだかのように多数出土している。床面はほぼ直床、周囲が掘方状に下がる部分もあるが、掘方は無いに等しい。汚れた土が貼床状に薄く認められたが、硬化範囲は判然としなかった。壁周溝は竈を除いて全周していたようで、北辺と西辺では竪穴部の壁から少し離れている。柱穴については対角線上から 4 ケ所確認され（P1～4）、北東の 1 ケ所を除いて新旧認められた。壁周溝の在り方を含め、竪穴部の拡張と柱の付け替えという大規模な改修を、最低 1 回は想定できる。竈は東辺中央やや南寄りに確認されたが、廃絶時の破壊のためか判然としない。とは言え右袖には土師器甕 1 個体が逆位の封入状態で出土し、空焚き内の充填土下から煙道を確認している。貯蔵穴は竈に向かって右側にあり（P5）、断面逆台形の平面円形である。柱穴

(P4) が側面に露呈する位置関係で掘り上がったことから、貯蔵穴も本来は新旧あったと思われるが、把握することが出来なかった。本遺構は出土土器を根拠に、7世紀前半に位置づけられる。東に位置するほぼ同時期のH-11が先述のように埋め戻しを思わせる覆土であることから、建て替えの可能性は十分と言える。

H-13 竪穴建物跡 調査区南側東寄りに位置し、北東一部を攪乱によって破壊されているが、比較的保存状態は良好である。南東部でH-14の北西隅を切っている。竪穴部は北に対してやや斜行し、東西に長い長方形である。覆土は黒味のある褐色系で、床面はほぼ直床である。壁周溝は認められず、柱穴についても明瞭なものは無い。竪は東辺の南寄りに確認され、煙道が竪穴外へ大きく伸びる(旧)段階から、より手前に作り直された(新)段階へ、大きく1回の改修が確認された。貯蔵穴は竪に向かって右側にあり(D1)、隅丸方形で比較的大きいものを、南にずらして二回りほど小さい円形に改修している。これは竪の新旧に対応するものであると言える。また、竪の左側から確認された小穴(P1)も貯蔵穴の可能性があり、土器片が入っていた。本遺構は7世紀末~8世紀初頭と考えられる。

H-14 竪穴建物跡 調査区南側東寄りに位置し、南側の一部を攪乱、東側大半は調査区外、北西隅はH-13に切られる。また、覆土中に10世紀代の土坑(D-21)が重複していた。竪穴部は北に対してやや斜行し、半分近くが調査区外であることから不確定だが、正方形と考えられる。覆土は黒味が強い自然堆積で、床面は浅い掘り込みをもつ。北西隅の床面には自然石が露呈して周囲が下がっており、除去を試みたが諦めた可能性がある。壁周溝や柱穴、竪は確認されなかった。明確な出土遺物は無く困難だが、本遺構は7世紀後半以前と考えられる。竪穴部を掘削したが石に当たり、放棄された建物の可能性もある。

H-15 竪穴建物跡 調査区中央やや南寄りに位置し、蒼海城堀跡であるW-1に西半を切られ、近年の攪乱によって南辺を失っている。竪穴部は北に対して斜行、東西に長い長方形である。覆土は黒味が強い。新旧2時期あり、北東辺の北寄りに旧段階の壁が残り、竪穴部の角度をずらす改修であったようだ。床面はほぼ直床で、新段階のほうが深い。壁周溝は旧段階のみである。柱穴については明瞭なものは確認できなかった。竪は北東辺の中央に旧段階(A)が煙道のみ残存、南東隅には新段階(B)が攪乱に南半を破壊された状態である。貯蔵穴は竪に向かって左側にあり(P2)、P1・P3については掘方の可能性がある。遺物は少ないが、新段階貯蔵穴の北側床面上から土師器の小型短頸壺が出土している。時期判定困難な器種だが、これを根拠に6世紀代と考えたい。

H-16 竪穴建物跡 調査区南側の南寄りに位置し、H-17の覆土上で確認した。総社砂層上位の確認面でH-17とは異なるプランを確認したことから精査して検出に至ったが、硬化した床面範囲と弧を描く壁の立ち上がりを把握したのみで、竪等は不明であった。弧を描く部分から隅丸方形の竪穴部を推定できない訳でもないが、角度が北に対して傾く方形となってしまい、平安期の竪穴建物としては相応しくない。何より竪の痕跡が確認できないことも不可思議である。しかし後述するH-27のような西側に竪状の火所を持っていたとすれば、竪は中世のW-3によって破壊されたという説明がつく。床面出土遺物から本遺構は10世紀後半以降に位置づけられる。

H-17 竪穴建物跡 調査区南端近くに位置し、北半上位をH-16、南端をH-18、東隅をW-2、南西辺中央をI-2に切られ、南東辺の西半は桑根の攪乱が入っている。竪穴部は北に対してやや斜行する正方形で、覆土は黒味が比較的強い。土師器・須恵器の破片が床面ないしやや浮いた状態で多く出土している。床面はほぼ直床だが周囲は浅い掘方をもつ部分もある。硬化範囲は判然としなかった。壁周溝は竪付近と南東辺を除いて確認されたが、攪乱を受けた南東辺も本来は巡っ

ていた可能性がある。柱穴については対角線上で4ヶ所、西側2ヶ所は新旧2基がセットで確認され、柱の付け替えを伴う改修が最低1回行われていたことがわかる。竪は東辺中央に確認されたが、廃絶時の破壊か上位のH-16の床面造作によって攪乱されており、形態を明らかにすることは叶わなかった。貯蔵穴は竪に向かって右側にあり、深い円形部分の上縁に浅い方形部分をもつ。本遺構は出土遺物から6世紀後半に位置づけられる。

H-18 竪穴建物跡 調査区南端に位置し、北辺でH-17を切り、東辺北半をD-19、西辺全てをD-20に切られ、南側過半は調査区外となる。北辺はH-17との重複部分が攪乱されており不明だが、僅かに残存する東辺の壁を根拠とすれば北に対してやや傾く方形と考えられる。覆土は比較的黒味があり、調査区壁断面では東側に焼土等が認められることから、竪が近いことを知れる。床面はほぼ直床だが、硬化範囲は凍結が激しい時期の調査であったため明らかにし得なかった。壁周溝・柱穴は未確認である。竪は先述のように土層から東辺の調査区外と推定される。本遺構は出土遺物から、7世紀中頃と考えられる。

H-19 竪穴建物跡 調査区中央南寄りに位置し、H-12a・bの西に接しているが、近世のD-8が存在し、切り合い関係は不明である。昭和期の鉄筋コンクリートアパート下に相当し、その撤去に伴う攪乱が激しく、北半は失われている。また、後世の土坑(D-25・40・41)もある。竪穴部は北に対してわずかに傾くがほぼ正方位の方形で、上位が削平されているとは言え浅い。床面は竪前を中心に硬化しており、周囲は柔らかい。また、竪穴部南西隅には焼土が集中し、焼失建物の可能性がある。柱穴は確認されなかった。竪は東辺の南寄りに焼土・粘質土の集中があり、これを竪の残骸とした。貯蔵穴は竪の両側に2ヶ所確認し、南のD2の方が古く、北のD1が新しい。従って竪も新旧あったと思われるが、南東隅は攪乱で失われており不明である。本遺構は出土遺物から10世紀代と考えられる。

H-21a・b 竪穴建物跡 調査区西側西端近くに位置し、H-22・23・DB-3を切り、D-13に切られ、東辺中央を攪乱されている。新旧2時期あり、新段階をH-21a、旧段階をH-21bとした。

H-21aは竪穴部が北に対して西へ少し傾く東西軸の長方形で、As-B軽石を含む「B混土」を覆土とする。「B混土」は当地域では中世の遺構覆土の指標となる土で、当初は竪穴建物跡埋没過程の窪地が中世に攪乱されたものと考えて掘り始めたが、当該土の直下から床硬化面が確認されたものである。床面はAs-B軽石を多く含む土で形成され、竪状施設前を中心に硬化していた。床面上からは白磁碗破片と鉄鏹、碁石が出土している。柱穴は床面上で確認できず、後述する旧段階H-21bの調査時に確認しており、その内のいくつかは新段階である本遺構に伴う可能性が考えられる。竪(竪状施設)は竪穴部の北辺東寄りにあり、竪穴部内に收まり竪穴部外には出ない位置関係である。環状と西側へ半島状に伸びる範囲で焼土・炭化物を含む粘質土が確認され、環状部には3個の石が正三角形の位置で据えられて、石の内側は被熱していた。断面を多く残して精査したが、いかなる形状の施設であったか、解明することは叶わなかった。ただ、半島状に伸びる粘質土下には床硬化面が確認できた部分があるので、粘質土の範囲は崩壊した構築土を示すが施設の範囲では無いようである。近世民家に見るように「へつつい」に近い形態であった可能性がある。竪施設の左手前には円形の土坑が1ヶ所確認され、貯蔵穴の可能性がある。

H-21bはH-21a下から入籠状に確認された。竪穴部はH-21aと相似形で、二回り程度小さく、位置的には南に偏る。As-Bを含むH-21aの床面を剥がすと、As-Bを主体とする砂層が現れ、この砂層直下から床面が確認された。床面はあまり硬くなく、床下には浅い掘方をもつ。なお、床面構成土(=掘方)にはAs-Bの混入は無い。柱穴は4隅で確認され、2ヶ所が組となる位置関係のものがある。新旧

に対応する可能性があるが、雪の降る調査終盤の精査であり、細かい検討を行う余裕が無かった。壁周溝は北辺西半のみで確認された。遺物は土器細片以外、本遺構に伴うものは出土していない。竈についても確認されなかった。状況的にはH-21bはH-21aの改修前の姿と考えられ、具体的には竪穴部の拡張である。この新旧の堆積土層中におけるAs-Bの在り方を見る限り、改修はAs-B降下（被災）を契機としていると考えられる。なお、H-21bに竈が確認できず、床面が硬くない、伴う遺物の出土が無い点を考慮すれば、H-21bは建築中の建物であった可能性もある。いずれにせよH-21a・bは、As-Bの降下時、浅間山天仁元年（1108）の噴火を跨ぐ時期の遺構と位置づけられる。

H-22 竪穴建物跡 調査区西端南側に位置し、H-21a・21b・23・26a、D-13に切られ、南辺が調査区外となる。竪穴部は北に対してやや東に傾く南北軸の長方形で、竈の位置から調査区外となる南端部は僅かだろう。覆土は淡い黒色で、床面は竈前から南にかけて硬化しているが、それ以外は柔らかく判別しにくい。掘方もごく浅いものであった。床面上には焼土や粘質土が分布していたが、これは竈由来と思われ、焼失建物とは思われない。また、床面上や少し浮いた状態、すなわち覆土最下層から比較的多くの遺物が出土しており、竈前の床面上から出土した馬骨は廃屋内への廃棄であるが、解剖学的位置を保った前肢という鑑定所見である。かなり奇異な事例と考え、土ごと切り出して取り上げた。柱穴については、明確なものは確認できなかつたが、床下相当から不定形な土坑・小穴が確認された。本遺構以前のものも含まれていると思われる。竈は東辺中央南寄りにあり、袖に粘質土が残るが全体に貧弱な構造で、煙道部先端はH-26aに切られて失っている。燃焼室上位から羽釜破片が多数、煙道入口相当からは支脚状の石が立てられた状態で出土している。貯蔵穴は竈の両脇にあり、何回かの作り直しが想定される。最終的なものは竈左側で、多数の土器や馬骨が出土した。右側のものは複数基重複した状態で、床面下のものと床面を切るものがあるが、先述の馬の前肢骨の取り上げを優先せざるを得ず、細かい観察を果たせなかった。本遺構は出土遺物や切り合い関係から、10世紀後半に位置づけられる。

H-23 竪穴建物跡 調査区西端に位置し、H-21a・21bに切られ、H-22を切っている。また、西側調査区外は平成17年度に（6）地点東調査区H-3・5として調査されており、同一遺構である。

竪穴部は北に対してやや傾く南北軸の長方形で、覆土は淡い黒色である。床面は竈前から中央部分南にかけて硬化し、部分的に壁周溝が巡る。柱穴は複数のピットが確認されているが、明確に伴うものは不明である。竈は東壁中央南寄りと南隅に2ヶ所確認され、南隅をA、東壁中央南寄りをBとした。断面観察ではBからAへ造り替えられており、2基共土坑状に下がるタイプであるが、共に残存状態は芳しくなく、具体的な構造については判然としなかった。貯蔵穴はそれと思しきものが2ヶ所確認された。南壁近くのD1はB竈に伴う旧段階のもので、覆土は埋め戻し土であった。北壁に近いD2は、既に（6）地点の調査でも確認されていたが自然堆積の黒色系覆土で、A竈に伴う新しいものと推定される。本遺構は出土遺物や切り合い関係から、11世紀前半に位置づけられる。

H-24 竪穴建物跡 調査区西側に位置し、H-26a・bに切られている。北に対して傾いた角度、比較的黒味の強い覆土から、当初は古墳時代の竪穴建物跡の可能性を考えたが、結果として硬化面等は確認できず、竪穴建物跡という確証は得られなかった。方形のプランとして掘り上がったが、自然遺構の可能性も否定できない。平安期の壙が出土しているが、H-26bのものが取り上げ段階で混入した可能性が高い。

H-25 竪穴建物跡 調査区西側に位置し、H-26a・26b・29を切り、東辺はW-1に切られている。また、覆土上には中世墓(DB-1)がある。

竪穴部は北に対して僅かに傾く南北軸の長方形で、比較的深く、黒味のある覆土である。床面中央部は広く硬化しており、遺物・自然石が散在、東側には焼土の分布もある。壁周溝は部分的に途切れる部分もあるがほぼ完周し、西辺では二重になる部分もあることから、壁を拡張する改修が行われたことを窺い知れる。柱穴は規則性に乏しいものの比較的深い穴が数ヶ所あるが、壁周溝から窺われる改修によって付け替えられた結果の累積のようで判然としない。竈はW-1に破壊された東辺に存在していたようで、床硬化範囲が集約される東辺中央南寄りに推定される。貯蔵穴はD1としたものがそれで、竈に向かって右手前に相当する。やはり新旧2時期あり、新段階のものは周囲が土手状に高くなっている。本遺構は出土遺物から11世紀前半頃と考えられる。

H-26 竪穴建物跡 調査区西側に位置し、H-22・24を切り、H-25に切られる。また、南側は調査区外となる。新旧2段階あり、新段階をH-26a、旧段階をH-26bとする。

H-26aは竪穴部が浅く、北に対してやや傾く方形プランで、調査区外を勘査しても正方形に近いものであったと推定される。覆土は黒味が強く、床面は中央部から南にかけて硬化面が確認されるが、東側では柔らかく下層のH-26b覆土と区別が困難であった。壁周溝は確認されず、柱穴は浅いものが壁際に不等間隔に並ぶが、主柱穴と言えるしっかりしたものは確認できなかった。床面上の壁近くには所々に焼土が見られたが、床面は被熱していないので炉等ではなく、炭化物も伴わないことから焼失建物という訳でも無い。壁土等の可能性がある。遺物は小破片のみで、明確に伴うものは無い。竈は調査区外で、最後に重機でダメ押ししたところ、南西隅近くにあることが判明している。貯蔵穴は竈の背後に相当する南西隅付近に1ヶ所、調査区壁に半分かかった状態で確認された。円形で比較的深い。本遺構はH-26bを西側へ拡張したものと考えられるが、旧段階であるH-26bの西壁付近で床面に弱い段差があり、水平で無い点からは通常の建物（住居）とは異なる性格が考えられる。

H-26bの竪穴部はH-26aと同角度で、南辺が調査区外となるが南北軸の長方形である。H-26aの床面下から確認された。床面は中央部南寄りに硬化面が確認され、ほとんどは直床だが、北西隅に一段深くなる掘方をもつ。床面上には多量の炭化物と焼土があり、焼失建物であることは確実である。炭化物に混じて炭化米や炭化穀物の塊やそれらが散乱したものが検出され、屋根裏に収納されていたものが焼け落ちたと考えられる。また、炭化物の下や間からは多数の土器・鉄器が出土した。土器は完形品が少なく、火災後に周囲から捨てられた雰囲気である。壁周溝は確認されず、柱穴も小穴が点在するが主柱穴は見当たらない。竈はH-26aで指摘したように調査区外で、H-26aと同一であったと思われる。貯蔵穴は竈の左後ろ、調査区壁にかかる2ヶ所重複して確認され、床面との兼ね合いから新旧である。本遺構は遺物や切り合い関係から、10世紀末～11世紀初頭に位置づけられる。また、遺物に鉄器各種が多い割に鉄滓が見られず、鉄器の修繕工房のような性格が考えられる。

H-27 竪穴建物跡 調査区西側に位置し、D-32・W-1に切られている。竪穴部はほぼ正方位の方形で、非常に浅い。比較的黒味の強い覆土であるが、この部分は確認面も黒く、確認に難儀した。床面は竈前がやや硬いが、それ以外では認定すら困難で、D1とした南西隅の窪みは掘方であると考えられる。壁周溝や柱穴は検出できなかった。竈は西辺中央にあり、竪穴内で収まることから、当初は古墳時代の建物跡と考えていた。平面楕円形の浅い土坑状となる窪み中央に被熱部があるが、構築材の粘質土等は確認できなかった。正確にはH-21aと同様、竈状施設とすべきかも知れない。竈周辺からは破片化した土釜と土師質土器の塊が出土しており、特に土釜は復元後の使用痕跡等

の観察から、移動式竈として転用されたものと判断された（外山政子氏ご教示）。本遺構の竈（竈状施設）は、この移動式竈に対応したものであったと考えると、構築材が確認できること、竪穴部の壁から出ないこと、西側に設置される稀有な状況の説明もつく。時期については10世紀後半に位置づけられる。

H-28 竪穴建物跡 調査区西側に位置し、D-28・38に切られている。北側は調査区外だが少しの未調査区を挟み、(6) H-1として平成17年度に調査されている。それを参考すると竪穴部は北に対してやや傾き、南北にやや長い長方形である。今回調査区では土坑によって大半破壊されているが、東辺南寄りから竈の煙道部分が確認された。煙道は深く、竪穴外へ延びるものであった。本遺構は、今回調査では時期の特定が可能な遺物は出土しなかったが、(6)の報告では遺物こそ図示されていないが、9世紀後半～10世紀初頭とされている。

H-29 竪穴建物跡 調査区西側に位置し、H-25・D-35に切られている。H-25と同角度だが規模は小さく、残存部分で壁周溝が確認された。時期判定可能な出土遺物は無く、時期不明であるが、H-25の拡張前とすれば平安時代であろう。

(2) 溝跡

3条を調査した。W-1は蒼海城堀跡、W-2は古代の区画溝、W-3は中世でW-1と平行することから、関連遺構と考えられる。

W-1 調査区を南北に縦断し、調査区北側で東方に屈曲している。溝（堀）の両側、すなわち東西で確認面の高さが異なっており、これは先述した後世の削平もあるだろうが、地形の勾配に合わせた曲輪の造成も考慮される。高い側には調査直前まで旧道があり、その部分は段切状に削られてテラス状をなしていた。この道の開鑿に際してはかなりの土量を移動したはずであるが、堀の上層にその気配は無かった。（永井）

両肩が確認できる調査区中央部分を広く底面まで調査し、北側の屈曲部分は幅広のトレンチ調査を行った。完掘した調査区中央部分では堀幅約12m、深さ約6mを測る。大きく分けて3期の変遷が認められ、a→b→cの順である。

a期の堀は薬研堀状に最大深度まで掘られており、湧水層に達している。下層には土層観察により砂とシルトのラミナ状堆積が複数認められ、管理された水路として利用された時期が一定期間想定される。その後、この堀は堀肩部の層序である総社砂層の砂礫ブロック土と黒色土の混成土で埋没、短期間に廃絶され、さらに東方向からのみ堀の傾斜に沿った層状堆積土によって埋め戻される。この堆積土は総社砂層下層に認められるやや粘質の砂質堆積土由来の小ブロックを含み、やや風化が進んでいる。このことから、a期の掘削時発生土は堀の東側に土壠として積み上げられ、a期廃絶時には埋め戻し土として利用されたと想定される。

b期の堀は、堀底がa期に比べやや西に移動し、また堀底はU字状を呈し浅い。西に移動するのはa期の廃絶に伴う埋め戻し土の存在に起因すると考えられ、また、b期掘削による切り合いは浅い。北壁の土層には僅かであるが砂とシルトのラミナ状堆積が認められ、水流があった時期も想定できる。b期の堀はa期廃絶後に長大な窪地として残されていた堀跡を利用する形で再掘削され、地山掘削を伴わない、掘削事業としてはa期に比べ大きなものではなかったと想定する。また、この段階では何回か溝さらいのような小規模な再掘削が行われ維持されていた形跡が観察できる。

c期の堀は、堀底がa、b期に比べ東に移動し、断面は逆台形状を呈する。東側立ち上がりの地山（硬質な総社砂層）を掘削して垂直に近い壁面を作り出し、その発生土は西側に積み上げた形跡が観察できる。堀底はわずかに砂の堆積を認めたが、雨水程度であり水流はなかつ

たものと考える。東側と西側の堀肩には大きな高低差があり、堀というよりは壁に近い施設を志向しているように思える。（辻口）

北側の屈曲部分の調査区でも中央部分の調査区と同様に3期の変遷が認められるが、異なる点がいくつか見受けられる。

a期の堀はほとんどがトレンチ外のため部分的な所見になるが、砂とシルトによる互層の上層はブロックをほとんど含まず、短期間に埋没した形跡は見られない。

b期の堀も部分的だが、溝底の細かい砂層と粗い砂粒を多く含む層からは、緩急のある水の流れがあったと考えられる。

中央部分の調査区との最大の違いは、トレンチ中央から南壁にかけてa期の堀壁が溝状に掘り込まれている点である。掘り込まれた溝はa期の土層を切り、レンズ状に暗褐色土が堆積したのち、西側から総社砂層ブロックや黒色土によって埋没、これがc期の堀に切られているため、b期からc期の間に掘削されていることがわかる。また、総社砂層ブロック等による埋没土の上面には硬化面が確認され、一時期は通路として使用されていた可能性がある。

c期の堀は、地山掘り込み面とは反対、すなわち覆土をベースとした立ち上がり部分に粘土を多く含む土層が認められ、掘削面の崩落を防止するために貼り付けたものではないかと考えられる。（岡田）

遺物は覆土中から少量出土しており、近世の陶器擂鉢や塊、縄文時代と推定される結晶片岩製の石器がある。また、図示には至らなかつたがカワラケの小破片も採集された。何れにせよ、堀の開鑿や変遷を示すような遺物は無い。

W-2 調査区中央を南北に貫き、北に対してやや西に傾く。南端は調査区外、北端はW-1に切られ、7世紀代のH-2や6世紀後半のH-17を切るが、平安期のH-16には切られている。幅は1m弱、全体に浅いが後世の削平によるもので、本来は幅1.5m、深さも1m近かったものと推定される。断面形態は皿状や逆台形と随所で異なつており、底面には所々に土坑状の窪みや、テラスを有する場所もあって、形状が一定しない。また、中央やや北寄りには2.5m程途切れる部分があるが、残存状態由来であるか否かは不明である。堆積土は黒色で、最下層に地山主体土を多く含む場合がある。遺物はほぼ含まれていない。以上の特徴から本遺構は水路ではなく、区画溝と判断され、掘削作業単位の凹凸が顕著で整わない形態の場所も多いことから、未完成で放棄された可能性も考えられる。なお、本遺構は北側の（104）地点で延長部分相当が既に調査されており、東に屈曲している。従つて区画対象は南東にあったのだろう。時期については切り合い関係から、8～9世紀と考えられる。

W-3 W-1とほぼ並行し、調査区中央付近から調査区南端手前まで確認され、幅と深さが安定しない不定形なものである。時期の判明する遺物は無く、覆土特徴から蒼海城堀跡であるW-1に付帯する施設であったと思われる。土壙裾の土止め構造等が想起されるが、その場合、土壙は本遺構の東側にあったことになろうか。

(3) 土坑

時期的には古代・中世・近世以降の、大きく3時期ある。古代の土坑は調査区西側に集中し、基本的には大小円形か不定形で、判明したものは竪穴建物跡を切っているが出土遺物は非常に少ない。近接して確認されたD-29・30は円形で深い類似形態で、竪穴建物跡の空閑地にあることから、何等かの補完的な施設であったと思われる。中世の土坑も古代と同様の形態で、遺物を含まないものが過半で生活臭に乏しい。とは言えH-19を切るD-25からは香炉か火鉢の破片が出土しており、推定土壙下という位置を踏まえると貴重な資料である。近世以降の土坑は長方形のものが目立ち、畑の天地返し等に関係するものと思われる。市街化する前の元総社地区の景観を示す遺構と言える。

Tab.2 土坑一覧表

| 番号 | 位置 | 平面形状 | 備考（遺物・時期・その他） |
|-------|-----------------|---------|--------------------------|
| D-1 | F-15・F-14 | 円形 | |
| D-2 | C-10・B-10 | 隅丸長方形 | H-4 を切る。 |
| D-3 | F-15 | 円形 | D-1 を切る。 |
| D-4 | F-9 | 不整円形 | |
| D-5 | E-10 | 隅丸方形 | H-9 を切る。 |
| D-6 | G-10 | 不定形 | 東側を攢乱に切られる。 |
| D-7 | G-11 | 円形？ | 西側を攢乱に切られる。 |
| D-8 | H-10 | 隅丸長方形 | H-19 を切る。東を攢乱に切られる。 |
| D-9 | G-12 | 方形？ | 東西を攢乱に切られる。 |
| D-10 | F-15 | 不整楕円形 | D-12、D-3 を切る。 |
| D-11 | E-13 | 不整円形 | |
| D-12 | F-15 | (不整長方形) | |
| D-13 | G-2 | 隅丸方形 | H-21、22、26a を切る。覆土 As-B。 |
| D-14 | K-9・J-9 | 円形 | H-17 を切る。H-16 D1 と同一。 |
| D-15 | J-9 | 双円形 | 石出土。 |
| D-16 | F-14・E-14 | 不整長方形 | キセル・魚骨出土。近世。 |
| D-17 | G-15 | 双円形 | 土坑が重複。 |
| D-18 | G-15・G-14 | 隅丸方形 | |
| D-19 | K-9・L-9 | 隅丸長方形 | H-18 を切る。覆土 As-B。 |
| D-20 | L-8・L-9 | (隅丸長方形) | H-18 を切る。攢乱か。 |
| D-21 | K-11 | 不整形 | H-14 を切る。 |
| D-22 | G-13 | 隅丸方形 | 攢乱。近世。 |
| D-23 | H-8 | 楕円形 | |
| D-24 | H-8・I-8 | 隅丸長方形 | |
| D-25 | H-10 | 楕円形 | H-19 を切る。 |
| D-26 | J-9 | 不整円形 | |
| D-27 | I-10 | 方形 | W-2 に切られる。古代。 |
| D-28 | E-3 | 円形 | H-28 を切る。 |
| D-29 | F-2・E-2 | (円形) | 北側調査区外。 |
| D-30 | E-4・F-4 | 円形 | |
| D-31 | E-4・D-4 | 円形 | |
| D-32a | E-4 | 楕円形 | D-32b を切る。 |
| D-32b | E-4 | 楕円形 | D-32a に切られる。 |
| D-33 | F-3 | 双円形 | |
| D-34 | F-2・F-3 | 不整方形 | |
| D-35 | G-3・F-3・F-4・G-4 | 円形 | H-29 の一部か？ |
| D-36 | H-2 | 円形 | 南半部は調査区外。H-26 D1 と同一。 |
| D-37 | E-4・D-4 | 不明 | D-31 に切られる。西側調査区外。 |
| D-38 | E-3 | 不明 | D-28 に切られる。 |
| D-39 | F-12・F-13 | 不明 | H-8 竈、pit を切る。 |
| D-40 | G-10・H-10 | 不整長方形 | H-19 を切る。近代。 |
| D-41 | H-10 | 不整長方形 | D-40 に切られる。 |

(4) 墓跡

調査区西側から、3ヶ所の墓跡が確認された。その内訳としては中世2基、古代1基である。中世のDB-1・2は共に土壙墓と考えられる。DB-1はH-25の覆土上にあり、骨の出土をもってその存在が判明した為、詳細は不明であった。DB-2は調査区壁にかかっており、調査終盤にダメ押ししたところ、人骨と共に銭と鉄製の毛抜が出土した。骨の出土状態から被葬者は、北頭位で西を向いていたようである。DB-3はH-21aの竈下から確認された。骨粉状になった頭骨と肢の骨が残存しており、南北軸の長方形土坑内に、北頭位の伸展葬であった。頭の傍らからは副葬品と思われる白磁碗が出土している。白磁は大宰府編年XI類の玉縁碗で、乳白色～青白色の釉がかかり、外底面に「梅」の墨書がある優品である。編年上与えられている10世紀後半～11世紀中頃を拠り所とし、下限は本遺構を直接切る12世紀初頭のH-21a、上限を近傍の堅穴建物跡に想定される11世紀前半とすれば、本遺構の時期は11世紀後半頃が妥当と考えられる。（人骨についてはVI章の鑑定を参照のこと）

(5) 井戸跡

調査区東側から合計5基確認した。安全上確認面から2mで掘り下げ調査を止めている為、出土遺物によって時期判定できたものは無いが、覆土は全体に褐色系の砂質土で、As-Bの混入は少ない。従つて近世と考えられる。畑地の傍らに設けられた農業用井戸であろうか。

(6) 各時代の出土遺物

確認された遺構やその周辺からは、多種・多様な遺物が出土した。ここでは時代毎に、概要を記しておきたい。

縄文時代 少量の土器・石器が、後世の遺構内から出土した。土器は図示に耐える資料は無いが、石器は打製石斧と凹石を図示した。打製石斧は片岩製で、破片のため判然としないが弥生期に特徴的な石鍬の可能性もある。

古墳時代後期～飛鳥・白鳳期 土師器を主体に、少数の須恵器がある。以下、時期毎にその在り方を瞥見する。

6世紀後半のH-11・17は、全体に厚手だが長胴化した土師器甕と、胴部の張る土師器丸甕（広口甕？）、坏蓋模倣・坏身模倣の坏に加え、須恵器の無蓋高坏が目を引く。酸化焰気味の焼成からは藤岡産と思われるが、片岩や海綿骨針が見えないので藤岡系とすべきか。

7世紀前半のH-12bは、土師器長胴甕以外に土師器短頸壺や小型甕、大型の高坏と共に口縁部の変形する土師器坏蓋模倣坏がある。この土師器坏は群馬県南部から埼玉県北部に良く見られるもので、軟質で橙褐色の焼成ときめ細かい胎土を通有しており、後の「北武藏型坏」に先駆けて大量生産されたものと言える。須恵器には坏身（高坏？）と半球状の蓋があり、坏身は精良な胎土で硬質な焼成から東海産の可能性があり、蓋については天井部外面を手持ちヘラケズリする在地的なもので、県内産と考えられる。

7世紀中葉のH-1は、長胴甕の中に薄手のものがあり、「武藏型甕」の萌芽段階と考えられる。土師器坏の中には半球状で口縁部の内屈する「北武藏型坏」がある反面、古墳時代後期以来の蓋模倣坏も混在している。他に土師器には台付の小型甕や高坏もあるが、全体に厚手で古墳時代的な器種と言えるのだろう。土師器の蓋模倣坏と共に重なって出土した須恵器坏蓋は東海産と考えられ、TK209型式期の伝世品と考えられる。

7世紀後半のH-2・3・9・13では、土師器「武藏型甕」と「北武藏型坏」が主体となる。坏の出土数が多いH-9では、大口径から小口径まで大きさの異なる重塗的傾向が見いだせる点、H-3の須恵器高盤やH-13の土師器高盤は、律令的と言える雰囲気である。国府成立前夜の土器様相と言えるだろう。

平安時代 10～11世紀で、煮沸具は須恵器系の羽釜（吉井型）や土師器の土釜、坏・塊・皿は須恵器系の技法で成・整型されて酸化焰焼成された土師質土器が主となる。形式的な連續性が不鮮明で、单品での時期判定は難しく、共伴する灰釉陶器や白磁を年代根拠とせざるを得ない。その中でもAs-Bを床面に敷くH-21aの床面出土の白磁は、編年的にも注目される資料と言える。土釜転用の移動式竈と推定されるH-27出土品も注目され、火所の形態変化を示している。土器・陶磁器以外に、鉄鎌等の鉄製品が多く出土しており、鉄のリサイクルの為に集積されていた可能性が考えられる。

他に碁石、土器片製円盤も碁石的な性格とすれば、遊興具の出土が目立つ点は指摘できる。これは当該期の元総社地区全域の特徴とも言えそうで、農耕や手工業生産等、日中の大半を労働・労役に費やす通常集落居住者とは、全く異なる日常生活を垣間見れるようである。

元総社地区では、古代においては高級食器である白磁や灰釉陶器の出土量も多い。奢侈的と言える遺物相は、やはりここが国府のマチであることを再認識させられる。（永井）

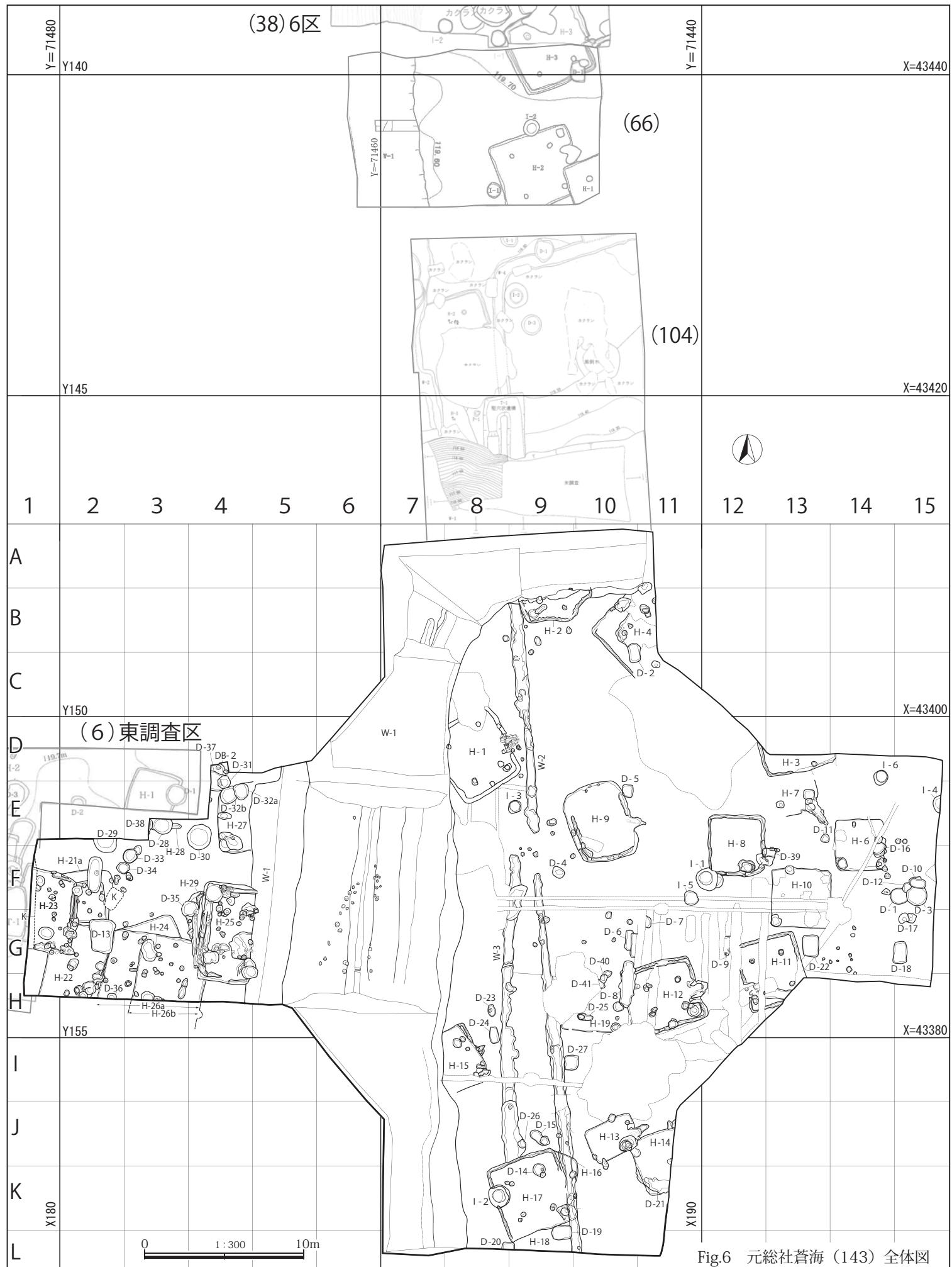


Fig.6 元総社蒼海（143）全体図

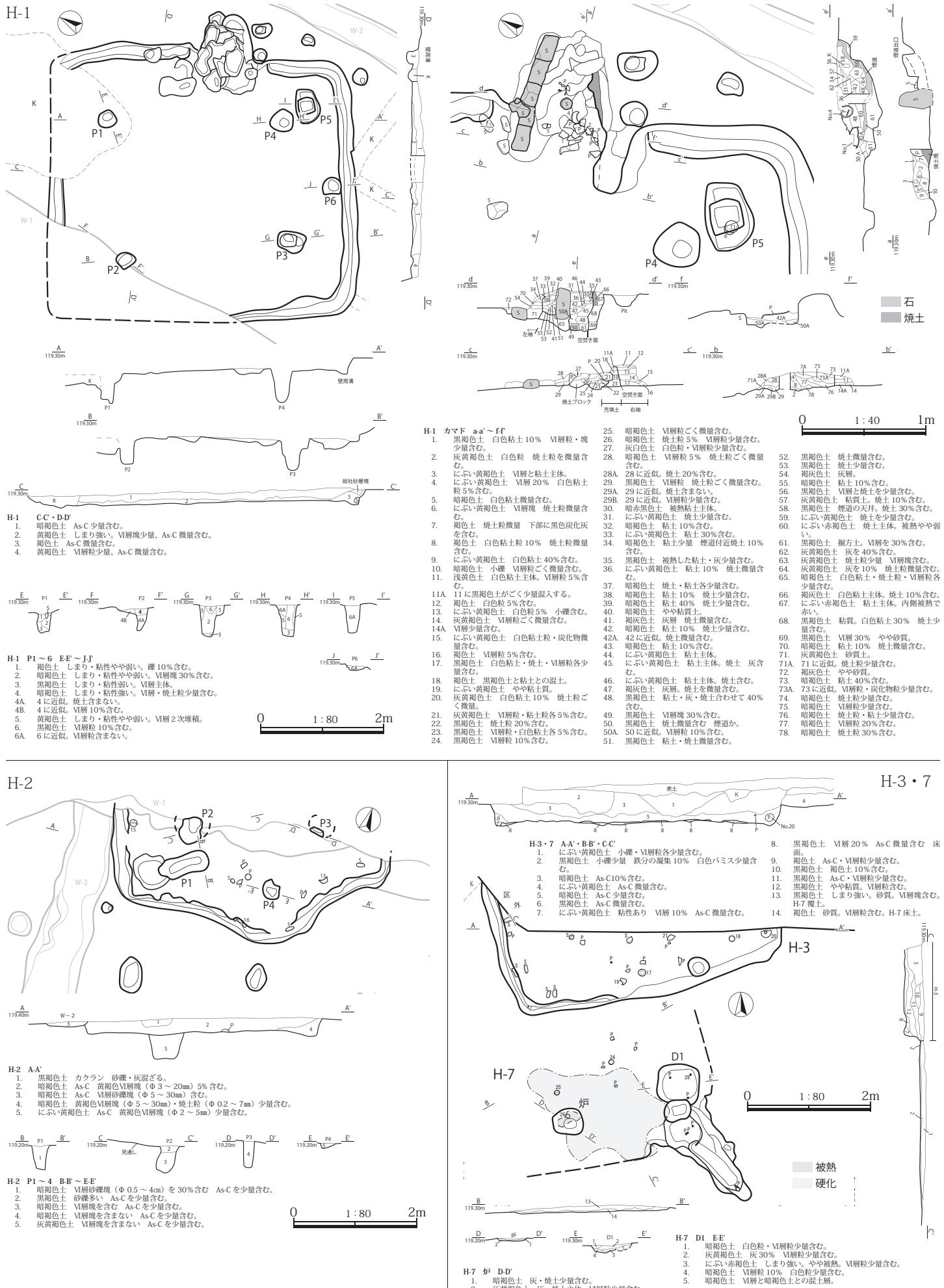


Fig. 7 H-1 • 2 • 3 • 7

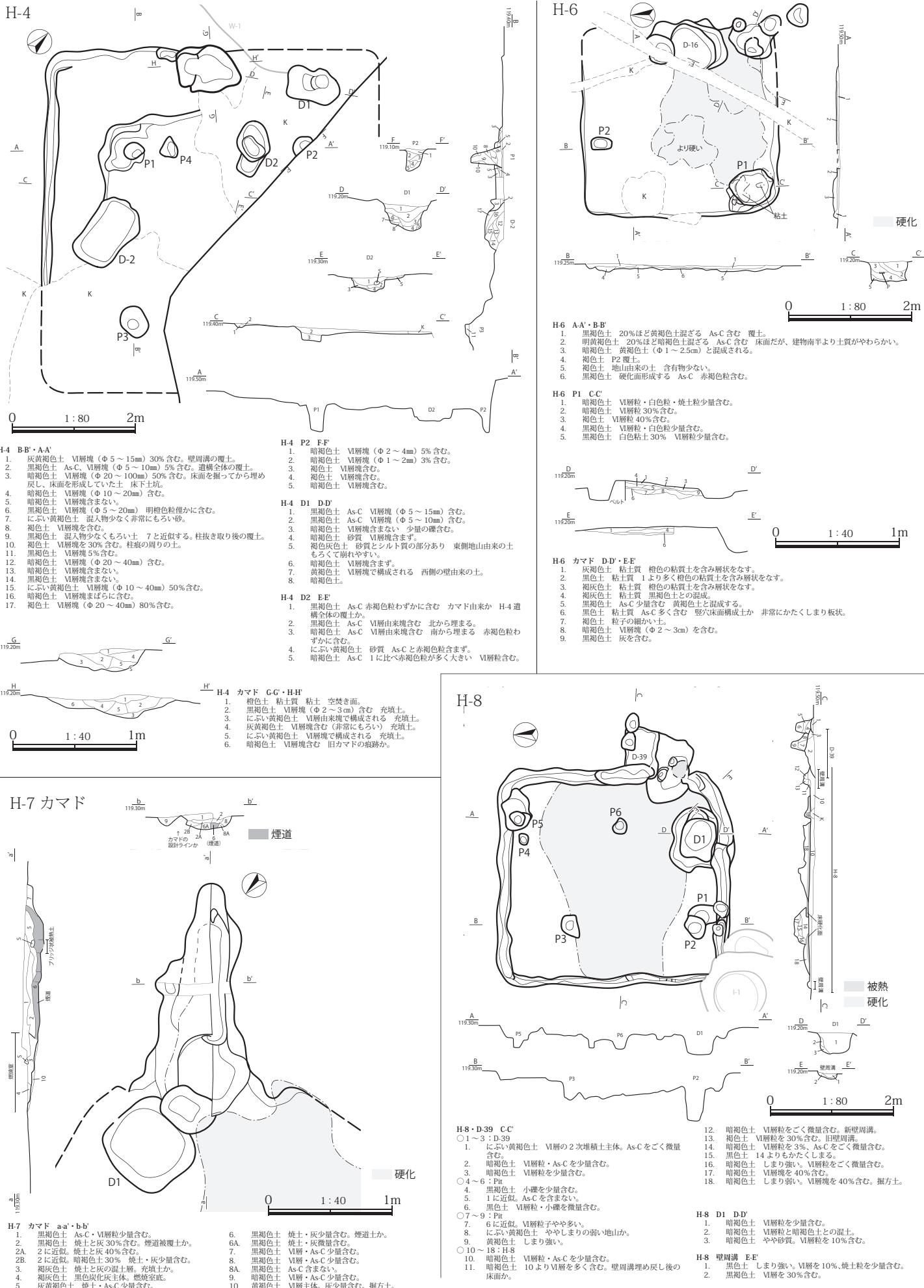
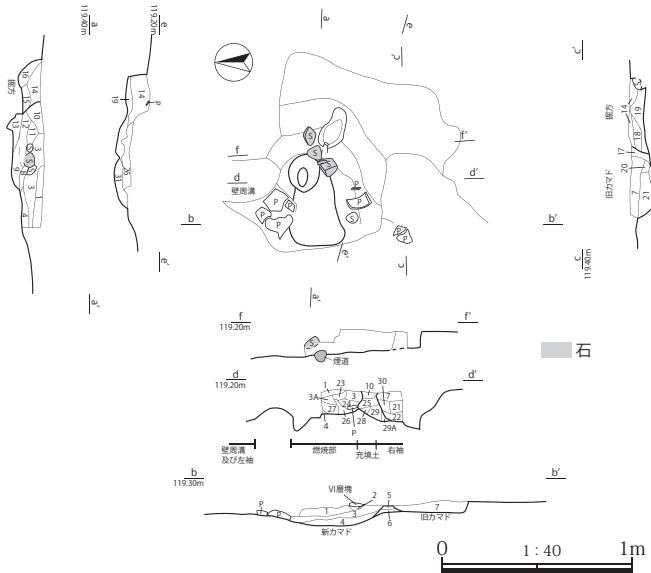


Fig. 8 H-4・6・7 カマド・8

H-8 カマド



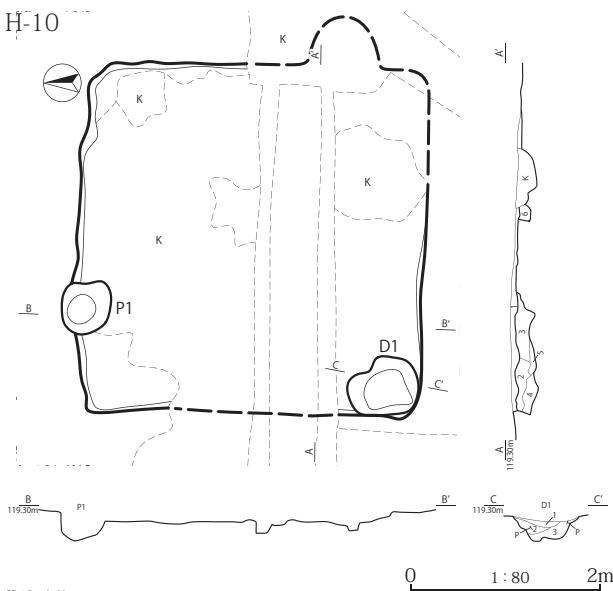
- H-8 カマド a-a' ~ e-e'
1. 黒褐色土 VI層粒少量 焼土・As-C 微量含む。
 2. 黒褐色土 VI層塊含む。
 3. 黒褐色土 焼土・炭化物・VI層粒少量含む。
 - 3A. 3に近似。灰10%含む。
 4. 黑褐色土 焼土・VI層粒少量含む。
 5. にぶい黄褐色土 焼土主体。暗褐色土10%。袖土。
 6. 黑褐色土 黑色炭化灰層。VI層粒微量含む。袖土。
 7. 暗褐色土 VI層粒。黑色粘粒微量含む。
 8. 暗褐色土 焼土・灰20% VI層粒微量含む。
 9. 暗褐色土 VI層粒微量含む。
 10. 黑褐色土 粘土10% VI層粒微量含む。
 11. にぶい黄褐色土 焼土粒・VI層粒、被熱小礫含む。
 12. 暗褐色土 焼土・灰20% VI層粒微量含む。
 13. 暗褐色土 VI層と暗褐色土との混土層。
 14. 暗褐色土 VI層とVI層10% 炭5%含む。
 15. にぶい黄褐色土 VI層主体。黒褐色土・暗褐色土少量含む。

16. 黑褐色土 VI層と暗褐色土との混土層。掘方土。
17. 黑褐色土 VI層主体。暗褐色土少量含む。
18. 黑褐色土 VI層粒を少量含む。
19. 褐色土 VI層40% 小礫微量含む。
20. 暗褐色土 VI層塊含む。
21. 暗褐色土 焼土・炭化物粒少量含む。
22. 暗褐色土 VI層と暗褐色土との混土層。袖掘方土。
23. 黑褐色土 粘土・灰少含む。
24. 黑褐色土 焼土・VI層粒含む。
25. 黑褐色土 烧土主体。被熱小礫含む時の灰灰。
26. 黑褐色土 灰30% 焼土10%含む。
27. 褐色土 灰褐色土と灰の混土層。焼土少量含む。
28. 黑褐色土 黑色炭化灰と焼土の混土層。空焚き敷。
29. 黑褐色土 黑色炭化灰主体。VI層20%含む。掘方土。
- 29A. 29に近似。燒土少量含む。掘方土。
30. にぶい黄褐色土 粘土・VI層10% 炭5%含む。
31. 褐色土 VI層20%含む。



H-8 カマド調査状況（西から）

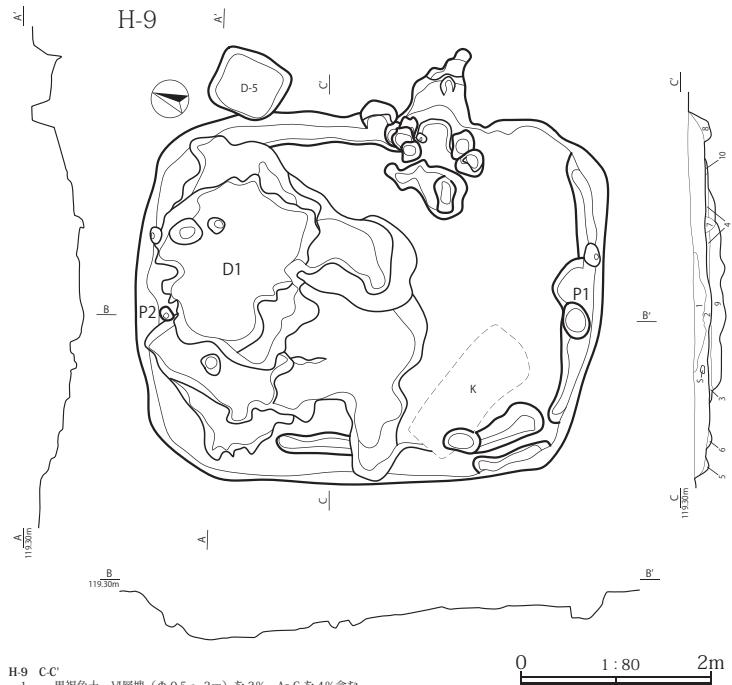
H-10



- H-10 AA'
1. 黑褐色土 白色粒10%含む。
 2. 黄褐色土 VI層土主体。礫を含む。
 3. 暗褐色土 VI層粒を少量、白色粒を微量含む。
 4. 暗褐色土 VI層粒を少量、白色粒を微量含む。
 5. 暗褐色土 VI層粒、礫を少量含む。
 6. 暗褐色土 VI層粒10%含む。

- H-10 D1 C-C'
1. 黑褐色土 VI層粒・炭化物・小礫を少量含む。
 2. 暗褐色土 VI層粒・炭化物を微量含む。
 3. にぶい黄褐色土 VI層粒10%含む。

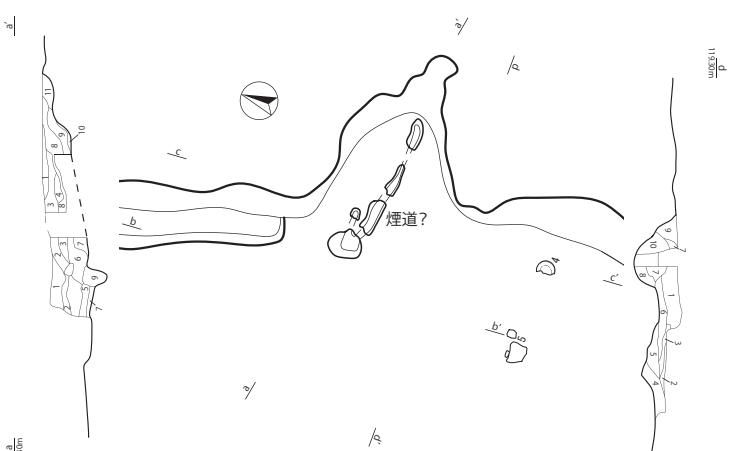
H-9



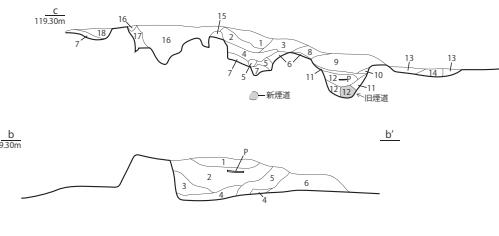
H-9 C-C'

1. 黑褐色土 VI層塊 (Φ 0.5 ~ 3cm) を3%、As-Cを4%含む。
2. 暗褐色土 VI層塊 (Φ 0.5 ~ 3cm) を2%、As-Cを3%含む。
3. 褐色土 ブロック土・As-Cを含まない 床土。
4. 褐色土 ブロック土・As-Cを含まない 床土。
5. 黑褐色土 ブロック土・As-Cを含まない。
6. 暗褐色土 ブロック土・As-Cを含まない。

7. にぶい黄褐色土 ブロック・As-Cを含まない。
8. 黑褐色土 ブロック・As-Cを含まない。
9. 黄褐色土 砂質 As-Cを含まない 挖方。
10. 暗褐色土 ブロック土・As-Cを含む 床土。



H-9 D-D'



H-9 カマド c-c'

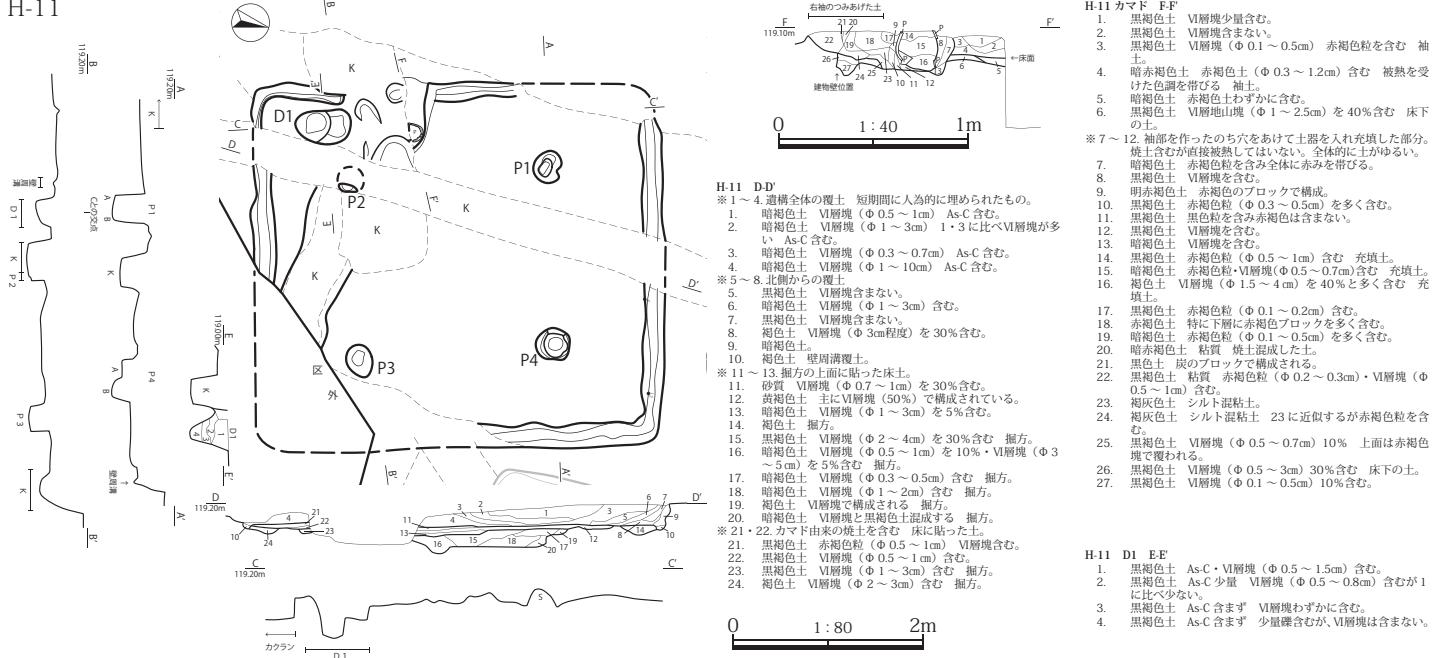
1. 前褐色土 As-C・明赤褐色土・灰白色粒・黑色粒を含む。
2. 黑褐色土 As-C・赤褐色土・黑色粒を含む。
3. 暗褐色土 しまり強い 明赤褐色土・VI層塊含む。
4. 黑褐色土 明赤褐色土・黑色粒を含む。
5. 暗褐色土 明赤褐色土・VI層塊を含む。
6. 明赤褐色土 強い被熱を受けたブロック土で構成される。
7. 黑褐色土 VI層塊主。
8. 暗褐色土 As-C含む。被熱した土を含む。
9. 黑褐色土 しまり強い 赤褐色土・VI層塊含む。
10. 褐色土 VI層塊を多く含む。
11. 暗褐色土 赤褐色土を含む。
12. 暗褐色土 VI層塊を含む。
13. 暗褐色土 砂質。
14. 暗褐色土 As-C・赤褐色土を含む。
15. 黄褐色土 As-C・赤褐色土・黑色粒を含む。
16. 黑褐色土 As-C・VI層粒を含む。
17. 褐色土 As-Cを含む。
18. 黑褐色土 As-C・VI層塊を含む。

H-9 カマド b-b'

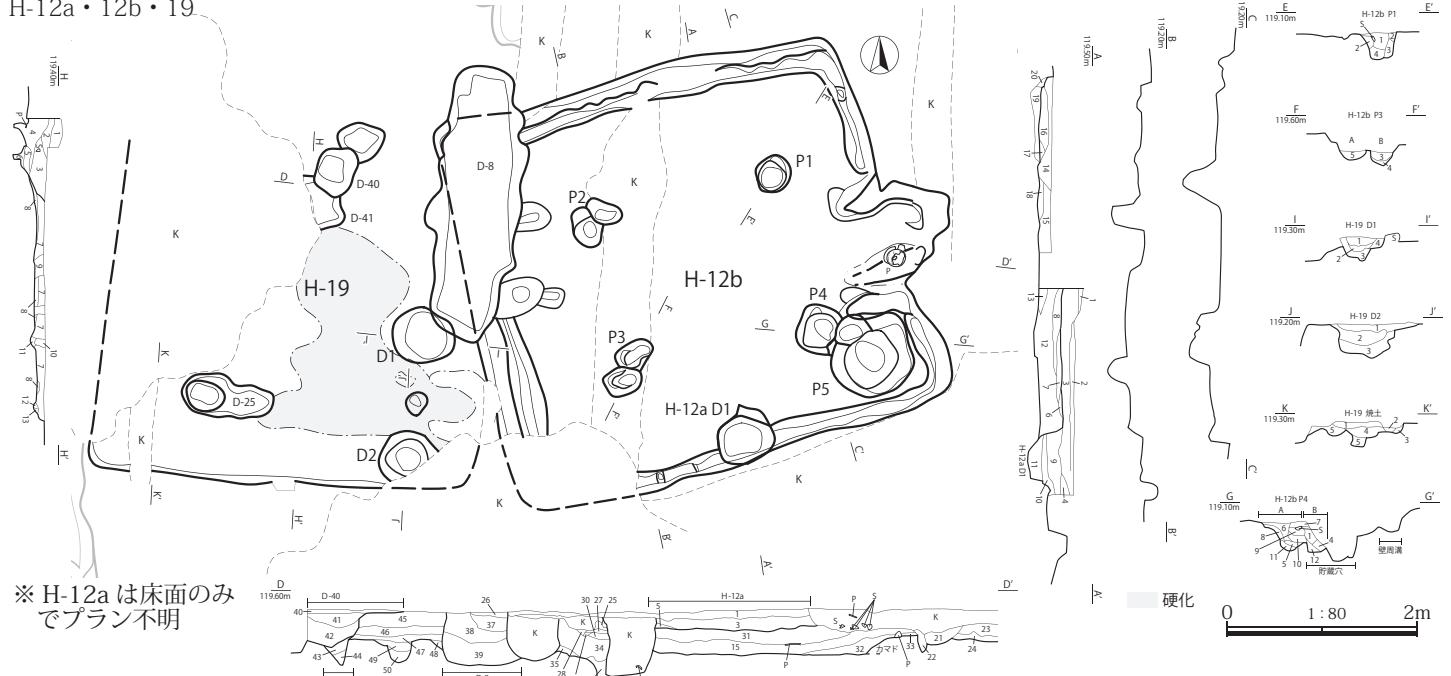
1. 黑褐色土 しまり強い 粘性あり As-C・赤褐色土・VI層塊を含む。
2. 黑褐色土 しまり強い 粘性あり VI層塊を含む。
3. 褐色土 しまり強い 赤褐色土を含む。
4. 暗褐色土 VI層塊を含む。
5. 黑褐色土 反黄褐色土塊を含む。
6. 黑褐色土 VI層塊・赤褐色土塊を含む。
7. 黑褐色土 しまり強い 粘性あり。
8. 暗褐色土 しまりあり 粘性あり 赤褐色土・As-C・灰色塊を含む。
9. 暗褐色土 しまりあり 粘性あり。
10. 暗褐色土 しまりあり 粘性あり。

Fig. 9 H-8 カマド・9・10

H-11



H-12a・12b・19



- H-19 H-H'**
- ※ 1 ~ 4. D-40 覆土
 - 1. にぶい 黄褐色土 As-C (Φ 1 ~ 3mm) を 5% 含む ビニールが含まれる。
 - 2. にぶい 黄褐色土 As-C (Φ 1 ~ 3mm) を 5% VI層粒 (Φ 1mm) をごく微量含む。
 - 3. 暗褐色土 As-C (Φ 1 ~ 3mm) を 10% VI層粒 (Φ 1 ~ 10mm) を 5% 含む。
 - 4. 暗褐色土 As-C (Φ 1 ~ 3mm) VI層粒 (Φ 2 ~ 7mm) を各 5% 含む。
 - 5. D-41 覆土
 - 6. 黑褐色土 As-C (Φ 1mm) を少量含む。
 - 6. にぶい 黄褐色土 VI層粒と暗褐色土 (YOR3/3) の混土。
 - 7. 暗褐色土 As-C (Φ 1 ~ 3mm) を 10% VI層粒 (Φ 1 ~ 2mm) を微量含む。
 - 8. にぶい 黄褐色土 As-C (Φ 1 ~ 3mm) を 5% VI層粒 30% 含む。ビニールが含まれる。
 - 9. 暗褐色土 As-C (Φ 1 ~ 3mm) を 10% VI層粒 (Φ 1mm) を少量含む。
 - 10. 暗褐色土 As-C (Φ 1mm) VI層粒 (Φ 1 ~ 5mm) を各 5% 含む。
 - 11. 黑褐色土 VI層粒 10% 含む As-C は含まれない。
 - 12. 暗褐色土 As-C (Φ 2mm) をごく微量含む。
 - 13. 烧褐色土 VI層主体。

- H-19 D1-I-I'**
- 1. にぶい 黄褐色土 As-C (Φ 0.5mm) を 10% VI層粒 (Φ 0.1 ~ 5mm) を 5% 塵化物を含む。
 - 2. 黑褐色土 As-C (Φ 0.5mm) を 5% 含む。
 - 3. 黑褐色土 VI層の細かい粒子をわずかに含む。
 - 4. にぶい 黄褐色土 As-C (Φ 1mm) を 5% 含む。

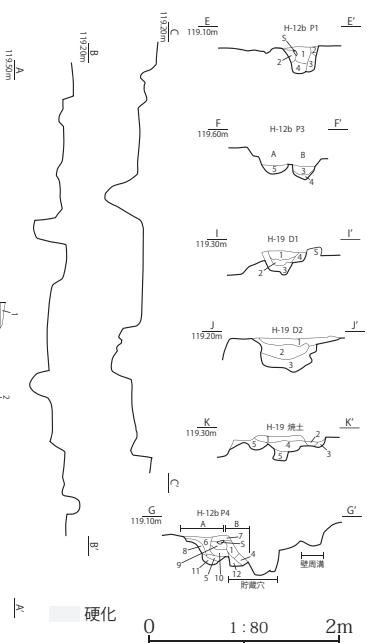
- H-19 D2-J-J'**
- 1. 黑褐色土 As-C (Φ 0.2mm程度) を 2% 含む。
 - 2. 暗褐色土 As-C (Φ 0.2 ~ 1mm) を 5% VI層粒 (Φ 1cm) を 1% 含む。
 - 3. 黑褐色土 As-C (Φ 1mm) VI層 (Φ 1cm) をわずかに含む。

- H-19 焼土-K-K'**
- 1. 暗褐色土 焼土 20% 白色粒 (Φ 1mm) を微量含む。
 - 2. 烧褐色土 焼土を含む。
 - 3. 黑褐色土 黑褐色土とVI層との混土層 2 次積砂。
 - 4. 黑褐色土 焼土・VI層粒 (Φ 1mm) を微量含む。
 - 5. 黑褐色土 VI層を 20% 含む。

- H-11 カマド F-F'**
- 1. 黑褐色土 VI層塊少量含む。
 - 2. 黑褐色土 VI層塊含まない。
 - 3. 黑褐色土 VI層塊 (Φ 0.1 ~ 0.5cm) 赤褐色粒を含む 焼土。
 - 4. 暗褐色土 赤褐色土 (Φ 0.3 ~ 1.2cm) 合む 被熱を受ける色を帯びる 焼土。
 - 5. 暗褐色土 赤褐色土 (Φ 0.5 ~ 1.5cm) 合む。
 - 6. 黑褐色土 VI層塊 (Φ 1 ~ 2.5cm) を 40% 含む 床下の土。

- ※ 7 ~ 12. 焼土を作ったのち穴をあけて土器を入れ充填した部分。燒土含むが直接被熱ではない。全体的に土がゆるい。
- 7. 黑褐色土 赤褐色粒を含み全土に赤みを帯びる。
 - 8. 黑褐色土 VI層塊含む。
 - 9. 明赤褐色土 赤褐色土 (Φ 0.3 ~ 0.5cm) を多く含む。
 - 10. 黑褐色土 赤褐色土 (Φ 0.3 ~ 0.5cm) を多く含む。
 - 11. 黑褐色土 VI層塊含む。
 - 12. 黑褐色土 VI層塊含む。
 - 13. 暗褐色土 VI層塊含む。
 - 14. 黑褐色土 赤褐色土 (Φ 0.5 ~ 1cm) 含む 充填土。
 - 15. 暗褐色土 赤褐色土 (Φ 0.5 ~ 0.7cm) 合む 充填土。
 - 16. 褐色土 褐色土 (Φ 1.5 ~ 4cm) を 40% と多く含む 充填土。
 - 17. 黑褐色土 赤褐色土 (Φ 0.1 ~ 0.2cm) 含む。
 - 18. 赤褐色土 特に下部に赤褐色ブロックを多く含む。
 - 19. 暗褐色土 赤褐色土 (Φ 0.1 ~ 0.5cm) を多く含む。
 - 20. 暗赤褐色土 粘質 燃土混成した土。
 - 21. 黑褐色土 炭のブロックで構成される。
 - 22. 黑褐色土 粘質 赤褐色土 (Φ 0.2 ~ 0.3cm) ・VI層塊 (Φ 0.5 ~ 1cm) 含む。
 - 23. 黑褐色土 シルト混粘土。
 - 24. 黑褐色土 シルト混粘土 23 に近似するが赤褐色粒を含む。
 - 25. 黑褐色土 VI層塊 (Φ 0.5 ~ 0.7cm) 10% 上面は赤褐色塊で覆われる。
 - 26. 黑褐色土 VI層塊 (Φ 0.5 ~ 3cm) 30% 含む 床下の土。
 - 27. 黑褐色土 VI層塊 (Φ 0.1 ~ 0.5cm) 10% 含む。

- H-11 D1-E-E'**
- 1. 黑褐色土 As-C・VI層塊 (Φ 0.5 ~ 1.5cm) 含む。
 - 2. 黑褐色土 As-C 少量 VI層塊 (Φ 0.5 ~ 0.8cm) 含むが1に比べ少ない。
 - 3. 黑褐色土 As-C 含まず VI層塊わざかに含む。
 - 4. 黑褐色土 As-C 含まず 少量疊合が、VI層塊は含まない。



H-12b 遺物出土状況

Fig.10 H-11・12・19

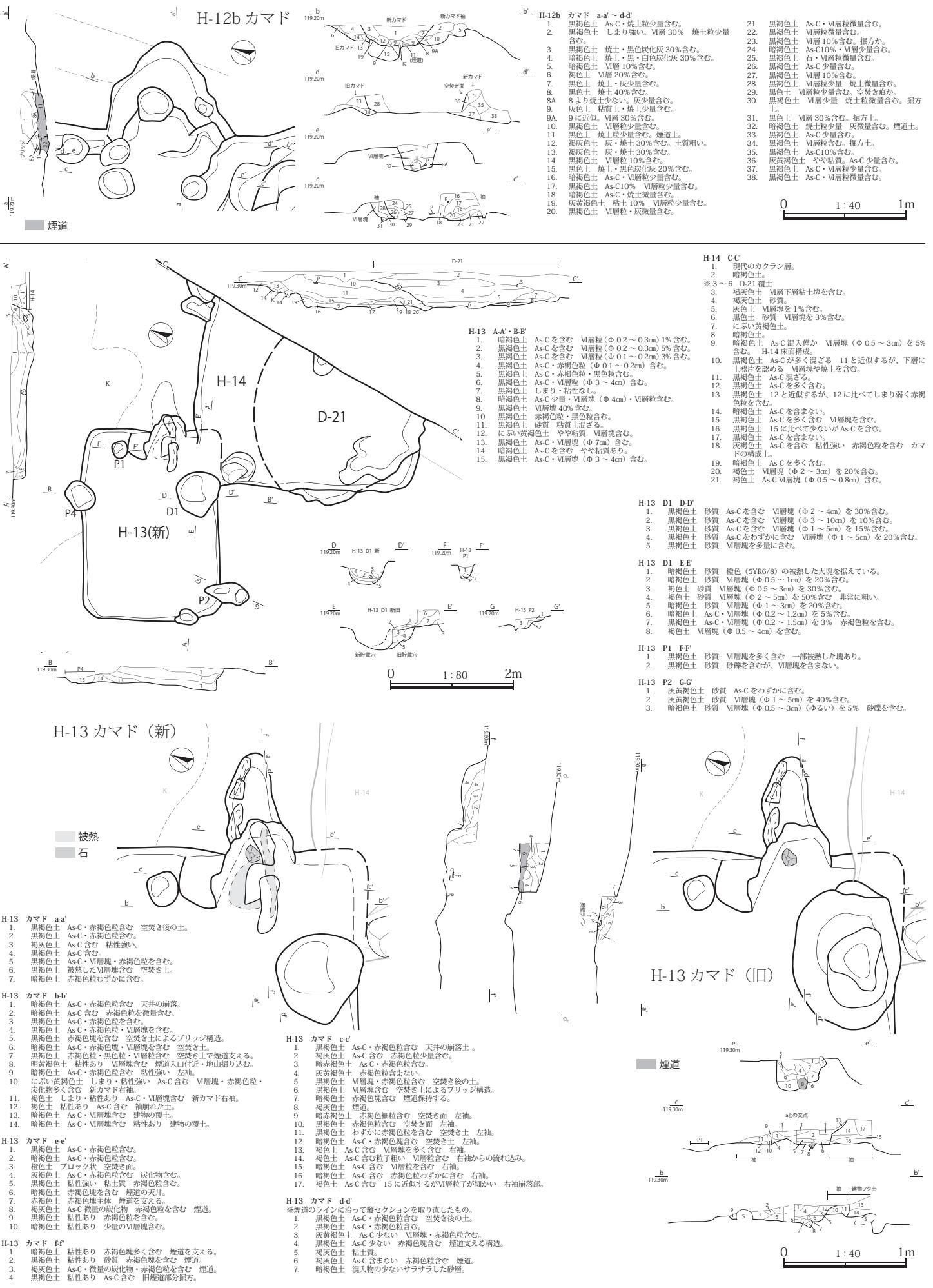
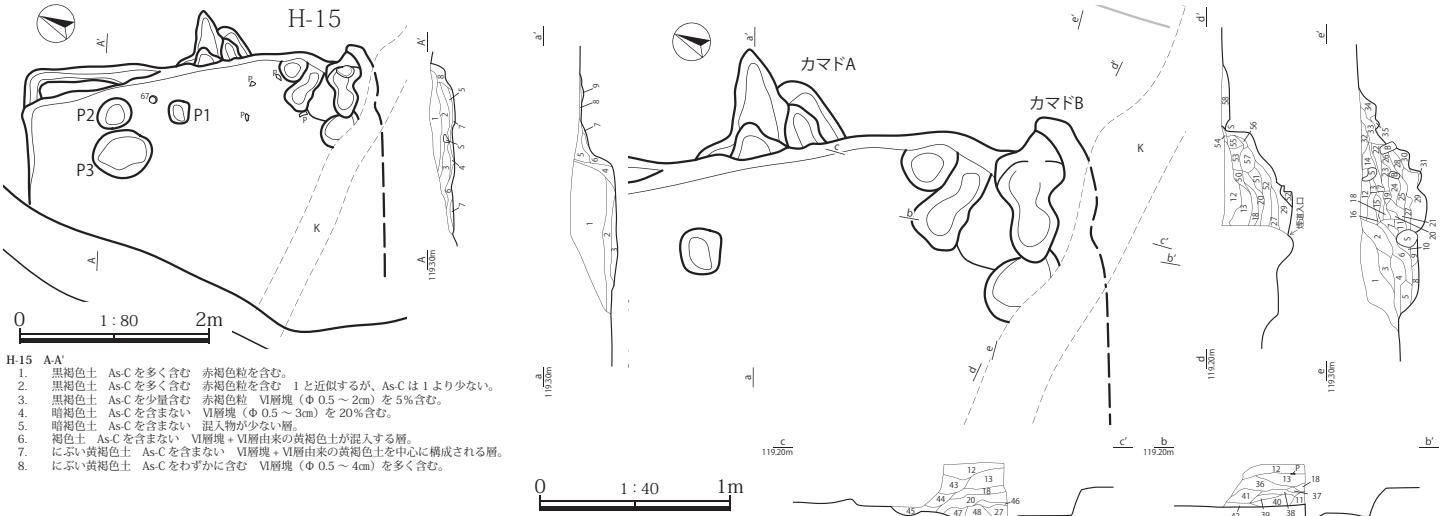
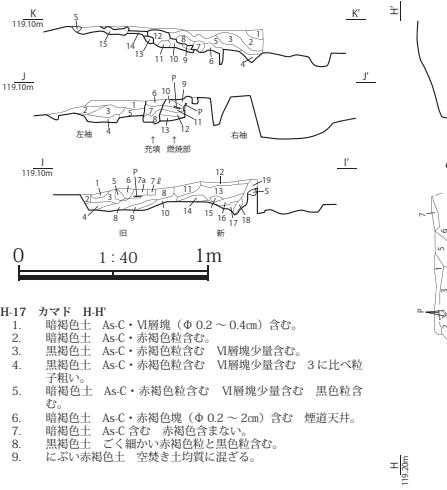


Fig.11 H-12b カマド・13・14、D-21





H-17 カマド K-K'

※ 1 ~ 8 新カマド

1. 黒褐色土 H-17 I-I' 12に対応する。
2. にぶい赤褐色土 H-17 A-A' 6に対応する。
3. 黒褐色土 As-C 赤褐色粒・炭化物質を含む。
4. 黑褐色土 As-C VI層粒含む。
5. 黑褐色土 As-C 赤褐色粒・炭化物質を含む 3に比べ粒子細かい。
6. 黑褐色土 赤褐色粒 (Φ 0.1cm) 微量含む。
7. 黑褐色土 煙道を埋める。
8. 黑褐色土 As-C 赤褐色粒・炭化物質を含む。
9. 黑褐色土 塊状を構成する。
10. 黑褐色土 As-C 赤褐色 1%含む。
11. 茶灰色土 構造を埋める土。
12. 黑褐色土 As-C 多く 赤褐色粒・VI層粒含む。
13. 黑褐色土 As-C VI層塊 (Φ 1.5cm) 含む。
- ※ 14 ~ 15 明黄色土 VI層塊で構成される。
15. 灰褐色土 暗褐色土とVI層塊混成。

H-17 カマド J-J'

※ 1 ~ 8 新カマド

1. 黑褐色土 As-C 粒大きい 赤褐色粒 VI層粒含む。
2. 黑褐色土 As-C 赤褐色粒含む VI層塊 (Φ 0.2 ~ 1cm) 5%含む。
3. 灰褐色土 As-C 赤褐色粒をすかに含む VI層塊 (Φ 0.8 ~ 2cm) 含む。
4. 灰褐色土 As-C 3より多い VI層塊 新カマド袖 右が空焚きライン。
- ※ 6 ~ 8 空焚き土による充填土。
5. 黑褐色土 As-C 赤褐色粒 1%含む。
6. 黑褐色土 As-C 赤褐色粒 5%含む 塗がはっきりしている。
7. 黑褐色土 As-C 赤褐色粒 5%含む。
8. 黑褐色土 赤褐色粒 10%含みよく混成している。
- ※ 9 ~ 13 焼却部断面土。
9. 灰褐色土 As-C 赤褐色粒 3%含む。
10. 暗褐色土 As-C 赤褐色粒。
11. 黑褐色土 As-C VI層粒含む。
12. 黑褐色土 11と近似するが粒子少ない。
13. 茶褐色土 赤褐色粒 (Φ 0.5cm) VI層塊 (Φ 0.8 ~ 2cm)。

H-17 カマド I-I'

※ 1 ~ 8 新カマド

1. 黑褐色土 As-C 含む VI層塊 (Φ 0.2 ~ 0.3cm) 1%含む。
2. 暗褐色土 As-C 含む VI層塊 (Φ 0.3 ~ 0.5cm) 5%含む。
3. 黑褐色土 VI層塊 (Φ 0.3 ~ 0.5cm) 3%含む。
4. 黑褐色土 VI層塊 (Φ 0.5 ~ 0.8cm) 1%含む。
5. 黑褐色土 As-C 含む VI層塊 (Φ 0.1 ~ 0.2cm) 1% 炭化物・赤褐色粒含む。
6. 黑褐色土 As-C 含む VI層塊 (Φ 0.1 ~ 0.2cm) 3% 炭化物含む。
7. 黑褐色土 As-C 含む VI層塊含まない 炭化物を 7%含む 7a は 7b に比べ炭化物の粒が大きい。
8. 灰褐色土 As-C 含む VI層塊 (Φ 0.3 ~ 0.8cm) 30% よく混ざっている。
9. 灰褐色土 VI層塊 10%含む。
10. 灰褐色土 VI層塊 (Φ 0.8 ~ 1cm) 5%含む。
11. 黑褐色土 VI層塊人がが混じていない わずかに赤色を含む。
12. 黑褐色土 As-C 粒が多い (Φ 0.1 ~ 1.2cm) 白色粒・赤褐色粒を含む。
13. 暗褐色土 As-C 含む 赤褐色粒多く含む (15%) 砂礫多く含む部分と粘性強い部分入り混じる。
14. 暗褐色土 As-C 含む 赤褐色粒多く含む (10%) 13より砂礫少なくて細かい。
15. 暗褐色土 As-C 含む 赤褐色粒多く含む。
16. 黑褐色土 赤褐色粒 (Φ 0.1cm) 5%含む。
17. 黑褐色土 赤褐色粒 (Φ 0.1cm) 7%含む。
18. 黑褐色土 赤褐色粒 (Φ 0.1cm) 3% 炭化物含む。
19. にぶい赤褐色土 H-17 E-E' 7に対応する。

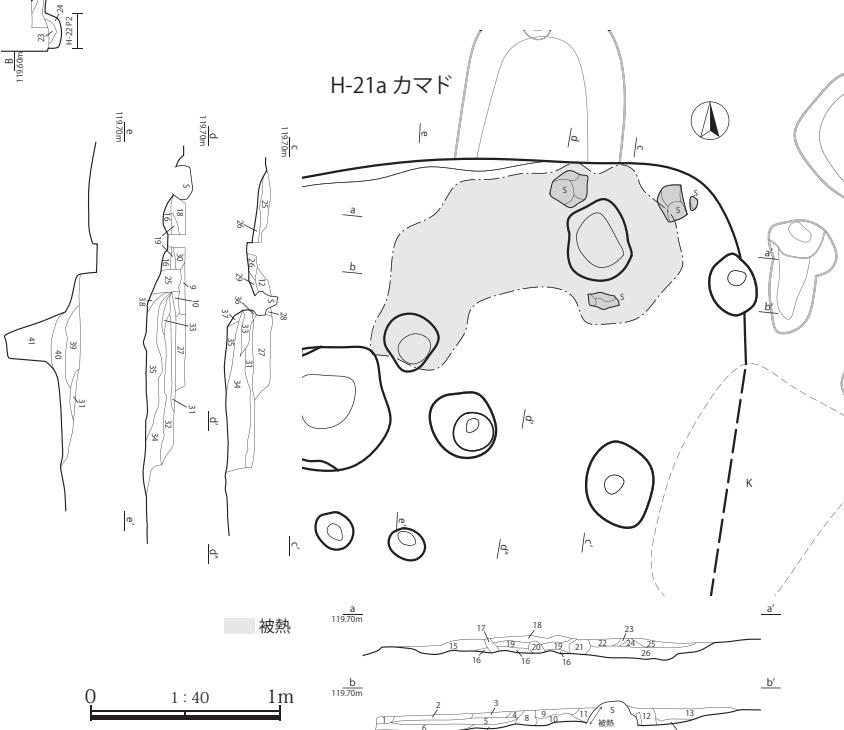
H-17 カマド



H-21a・21b・22・23 AA'・BB'

1. 灰黄褐色土 砂質 As-B を多量に含む。
2. 褐褐色土 地山由来の土。
3. 灰黄褐色土 砂質 As-B を多量に含む。
4. 灰黄褐色土 砂質 多量の As-B で構成され、にぶい橙色のプロック (Φ 1cm) を 3%含む。
5. にぶい黄褐色土 砂質 3や7に比べて少ないが、As-B を多量に含む VI層塊、粒子の粗いミスを含む。
6. にぶい黄褐色土 砂質 3や7に比べて少ないが、As-B を多量に含む VI層塊 (Φ 1.5cm) 粒子の粗いミスを含む。
7. 灰黄褐色土 砂質 7と難観するが、西へ行くほどベースの褐色土のミスとにぶい橙色の砂プロックを含む、ユニットを形成する。
8. 灰黄褐色土 砂質 褐色の砂質土をベースに多量の As-B の粒子の粗いミスにより上がったものか。
9. 明黄色土 砂質 1がカランするが、上がったものか。
10. 黑褐色土 砂質 VI層塊を含む 粒子の粗い As-B ミスが混入する。
11. 褐褐色土 砂質 粒子の細かい地山由来の土。
12. 暗褐色土 砂質 VI層塊 (Φ 1.5 ~ 3cm) (ゆるい)を含む。As-B は含まない。
13. 暗褐色土 砂質 As-C がわずかに混ざる。
14. 灰黄褐色土 砂質 As-B を多量含む わずかに VI層塊・炭化物を含む。
15. 黑褐色土 砂質 As-B・As-C を少量含む。
16. 暗褐色土 やや粘土質 灰褐色土主体だが橙色塊を 20% 炭化物を含む。
17. 暗褐色土 砂質 As-B・As-C を少量含む 赤褐色土・VI層塊・わざかに炭化物を含む。
18. 黄褐色土 砂質 (粒子細かい) わざかに赤褐色粒含む。
19. 褐褐色土 砂質 ごく細かい白色粒 (As-Cか)・黒色土を含む。
20. にぶい黄褐色土 砂質 VI層塊 (Φ 2 ~ 4cm) を含む 砂礫が多く粗い。
21. 黑褐色土 砂質 砂岩ブロックを含む。
22. 褐褐色土 砂質 (Φ 0.1 ~ 0.2cm) を 10%含む。
23. 黑褐色土 砂質 As-C をごく細粉 炭化物を 5% VI層粒を含む。
24. 黑褐色土 砂質 VI層塊 (Φ 2 ~ 5cm) (もろい) 炭化物を 5%含む。
25. 暗褐色土 砂質 As-B を多量、褐色土をごく少量含む。砂礫多い。
26. 暗褐色土 砂質 上層と近似するがやや粘質多い。
27. 暗褐色土 砂質 VI層粒を少量含む。

28. 褐褐色土 粘土質 赤褐色ブロック・灰色粘土ブロックを多く含む。
29. 黑褐色土 砂質 赤褐色ブロックを含む。
30. 明黄色土 砂質 ブロッケで構成される。
31. 暗褐色土 砂質 VI層塊・赤褐色粒を少含む。
32. 黑褐色土 砂質 25と近似するが混入物は少ない。
33. 黑褐色土 粘土質 灰褐色の粘土塊・赤褐色の小塊 (Φ 0.8 ~ 2cm) を含む。34に比べ塊は少ない。
34. 黑褐色土 粘土質 灰褐色の粘土塊・赤褐色の燒土塊 (Φ 5cm) を多く含む。
35. 暗褐色土 砂質 VI層塊 (Φ 0.5 ~ 1cm)・赤褐色粒を含む。
36. 黑褐色土 赤褐色質・炭化物を含む。
37. 暗褐色土 砂質 被熱を含む やわらか砂。
38. 暗褐色土 砂質 砂礫を含む やわらか砂。
39. 黑褐色土 砂質 As-B をブロック状に含む。
40. 黑褐色土 砂 地山由来の土を多量含む 砂質土。
41. 黑褐色土 砂 地山由来の土を多量含む ブロック状に砂質土に入る。
42. 黑褐色土 砂質 ごく細かいVI層粒含む。
43. 褐褐色土 As-B の粗い粒子を多量含む 41と近似するがVI層塊を含む。

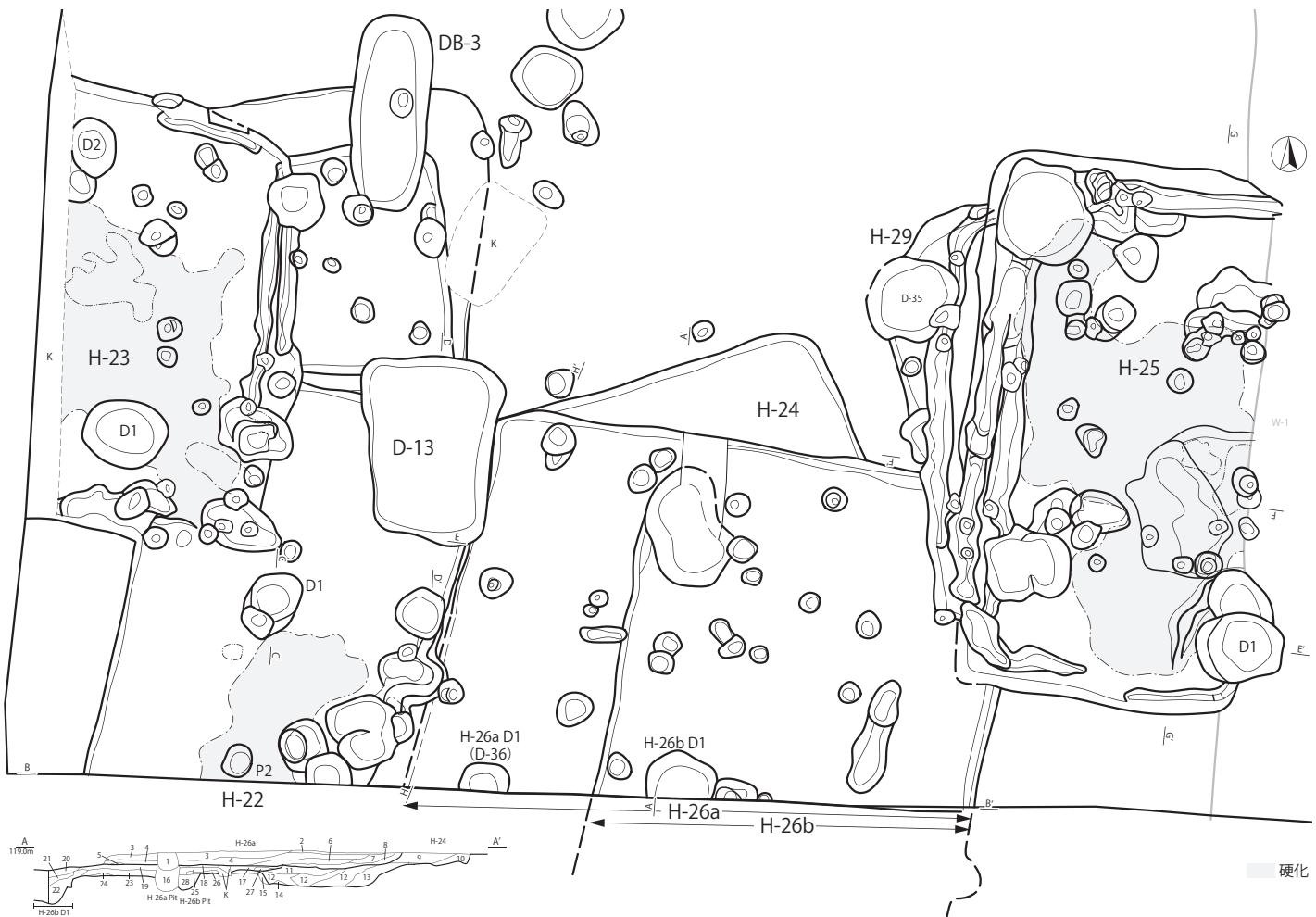


H-21a カマド a-a'~e-e'

1. 灰褐色土 砂質 As-B を多量に含む。
2. 陥没黄褐色土 粘土質 黄褐色土主体がブロック状に構成された粘質土 黑褐色土がブロック状に構成された粘質土 黑褐色土ブロック状に構成された粘質土 黄褐色土 (Φ 0.5 ~ 2cm)・褐色土 (Φ 0.1 ~ 0.3cm)・灰褐色土 (Φ 0.8 ~ 3cm)・炭化物を含む。物を含む。物を含む。物を含む。
3. にぶい黄褐色土 砂質 黒褐色土塊を含む。As-B を多量に含む。
4. 反灰褐色土 粘土質 灰褐色土ベースににぶい褐色塊を 40%含む 灰白色の粒子と橙色粒子を含む。
5. 暗褐色土 砂質 黑褐色土塊・明黄色土塊・褐色土塊を含む。
6. にぶい黄褐色土 砂質 やや粘質である暗褐色土の砂質土に粒子の粗い As-B を多量に含む 上層の方から褐色塊の純度が高い。
7. 黑褐色土 砂質 橙色塊を含む。白色粒・黑色粒を含む。
8. 暗褐色土 砂質 粒子粗い 炭化した木片を含む。
9. 暗褐色土 粘土質 粘土質焼きしまる 橙色塊を主体に構成。
10. 黑褐色土 砂質 にぶい黄褐色土 粘土 橙色粒・黄色粒・白色粒を含む。
11. にぶい黄褐色土 粘土 橙色粒・黄色粒・白色粒を含む。
12. 反灰褐色土 粘土 橙色粒 (Φ 0.1cm)・黃褐色粒・灰白色粒・灰白色粒を含む。
13. 暗褐色土 粘土 橙色小片 (未掲載) を含む。
14. 黑褐色土 砂質 As-B を多量含む。
15. 黑褐色土 砂質 粒子が細かい。
16. 黑褐色土 砂質 粒子が細かい。
17. オグラによるカラン。
18. 暗褐色土 砂質 植物の大塊を含む 9と近似するが硬くしまる。
19. 反灰褐色土 砂質 植物の大塊を含む ごく少量の砂礫と橙色粒を含む。

20. 灰黄褐色土 砂質 カクランか 砂礫を含む。
21. 灰黄褐色土 砂質 砂礫を多く含む。
22. 反灰褐色土 砂質 黃褐色・灰褐色・炭化物の塊を 20% 含む。
23. 灰褐色土 砂質 炭化した木片を含む。
24. 灰黄褐色土 砂質 粘土質 黃褐色・橙色塊・灰褐色塊を含む。
25. 灰黄褐色土 粘土質 2と近似するが粒子は細かい。
26. 暗褐色土 砂質 少量の砂礫を含む 地山由来の土。
27. にぶい黄褐色土 砂質 As-B を含む。
28. 灰褐色土 粘土質 橙色粒・橙色塊 (Φ 0.1cm)・褐色土塊を含む。
29. 黑褐色土 砂質 粒子細かい 炭化物を含む。
30. 黑褐色土 砂質 粒子細かい 炭化物を含む。
31. 黑褐色土 粘土質 As-C を多く含む 赤褐色土の砂質土を含む。
32. 黑褐色土 砂質 As-B を多く含む 砂質土と As-B が混じている。
33. 暗褐色土 砂質 As-B 主体に構成される。
34. 黑褐色土 砂質 As-B 主体の砂と黑褐色砂質土が構成する。
35. 黑褐色土 砂質 As-Bと黒褐色砂質土が層状をなす。
36. 黑褐色土 砂質 ごく細かい粒子の炭化物を含む。
37. 褐褐色土 砂質 壁土由来 粒子細かい わずかにブロック土を含む。
38. 褐褐色土 砂質 少量の礫を含む。
39. 黑褐色土 砂質 VI層塊 (Φ 1 ~ 4cm) を 20%含む As-B を含む pit 上面にのみの土。
40. 黑褐色土 砂質 VI層塊 (Φ 1 ~ 4cm) を 5%含む As-B を含む。
41. 褐褐色土 砂質 少量の砂礫・As-B・ゆるいVI層塊を含む H-21b の床面から掘り込まれたpitの覆土。

Fig.13 H-17 Kamado・21

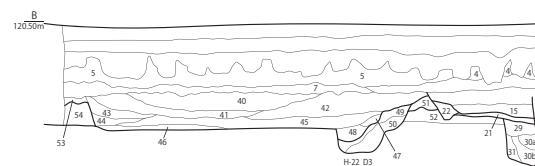


H-24・26a・26b A-A'

1. 黒褐色土 少量の埋含む。
- *2 ~ 6 H-26 覆土。
2. 黒褐色土 As-C 微量。
3. 黒褐色土 4に近似するが炭化物不含。
4. 黒褐色土 炭化物含む As-C 微量含む VI層塊 ($\phi 0.1 \sim 0.5cm$)。
5. にぶい黄褐色土 粘土 黒褐色の砂質土と混ざる。
6. 黒褐色土 炭化物含む 4に近似するが全的に粒子細かい。
7. 黑褐色土 4に近似するが全的に粒子細かい。
8. 黑褐色土 炭化物含む 全体に砂礫多く粗い VI層塊含まない。
9. 灰褐色土 少量のAs-C 含む 砂礫多く粗い 覆土。
10. 黑褐色土 少量の砂礫の他は含有物がなく柔らかい 覆土。
11. 黑褐色土 ごく微量のVI質粒含む。

12. 暗褐色土 砂礫少量含む他は含有物なし。
13. 黑褐色土 ごく微量のVI層塊含む。
14. 明黄褐色土 地山ブロック。
15. 暗褐色土 粒子細かい。
16. Pit 覆土 完掘後。
- *17 ~ 19 H-26a の床面 南に行くほど硬くなる。
17. 黑褐色土 地山化 5%含む 赤褐色粒 ($\phi 0.1cm$)・炭化物 ($\phi 0.3 \sim 0.8cm$) 多量に含む。
18. 黑褐色土 VI層塊 10% 赤褐色粒 ($\phi 0.1cm$)・炭化物 ($\phi 0.3 \sim 0.8cm$) 多量に含む。
19. 黑褐色土 VI層塊 3% 赤褐色粒 ($\phi 0.1cm$)・炭化物 ($\phi 0.3 \sim 0.8cm$) 多量に含む。

20. 明黄褐色土 VI層塊主体に構成される。しまりあり H-26b の貯穴により凹凸面に貼た床。
21. 黑褐色土 VI層塊・少量の砂礫含む しまりなくゆるい H-26b 貯穴覆土。
22. 黑褐色土 VI層塊・少量の砂礫含む H-26b 貯穴覆土。
23. 暗褐色土 多量の炭化した木片 30%含む にぶい褐色の塊 7%含む。
24. 黄褐色土 ごく少量のVI層塊含む。
25. 炭化した木片 3%含む。
26. 橙色土 板状のブロック土で構成される 焼失家屋の屋根材か 黒色炭化材張り付く 墓碑等から中央にいくにつれやや赤みがなくなる。
27. 棕色土 ブロック土の土主体に構成される 焼失家屋の屋根材か。
28. 黑褐色土 少量の砂礫含む。



H-22・26a・26b B-B'

1. 黒褐色土 砂質。
2. 黄褐色土 砂質。
- *3, 4, 5, 6 (As-A 階下後天地返しを行った痕跡) にぶい黄褐色土 As-A が入る。
4. 灰黃褐色土 (10YR5/2)。
5. 灰褐色土 (10YR4/2) ブロック。
6. 灰褐色土 上層の土塊状に入る。
7. 黑褐色土。
- *8, 9 (H-26a 廃絶後のPit)
8. 黑褐色土 (10YR3/1)。
9. 黑褐色土 (10YR3/2)。
10. 暗褐色土 カラクリン。
- *11, 13 (H-26a の覆土)
11. 灰黄色土 砂礫多い粗い土 均等ではなく所々VI層塊含む人為的な埋設。
12. 棕色土 塵土塊主体 H-26b 焼失した際の屋根材か。
13. 暗褐色土 比較的大きめな礫 ($\phi 5 \sim 8cm$) VI層塊 ($\phi 2 \sim 8mm$) 3%含む。
14. 暗褐色土。
15. 黑褐色土 砂礫多く粗い。
16. 黑褐色土 24に近似するが炭化した木片少量、灰白色粒を含む。

17. 灰褐色土 炭化した木片含む。
- *18, 19 (H-26b 焼失した際の覆土)
18. 黑褐色土 炭化した木片多く、赤褐色の塊を含む。
19. 黑褐色土 春褐色粒含む。
20. にぶい黄褐色土 カラクリン。
21. 黑褐色土 黄褐色の粒子多く含む H-26a 床面構成する。
22. 暗褐色土 H-26a 西壁埋立土 褐色土と地山褐色土混成する。
23. 黑褐色土 VI層塊含む H-26a 床底块状に凹凸埋立がもの。
- *24, 25 (H-26a の段階で貯穴の凹みを埋めて貼床状にしたもののか)
24. H-26・26 A-A' 20と共通する。
25. 黑褐色土 黄褐色 40%混入。
26. 黑褐色土 棕色塊と黒色塊混成された土を各15%含む H-26b 焼失時の土で蓋をする。
27. 黑褐色土 砂を少量含むが焼土は含まれない。
28. 暗褐色土 VI層塊と少額の砂礫含む H-26a 床下土状か。
29. 暗褐色土 VI層塊含む。
30. 黑褐色土 aに比べてbはVI層塊含む。
31. 暗褐色土 黄褐色土塊 40%混入。
32. 暗褐色土 炭化した木片含む。
33. 黑褐色土 24-A-A' 21と共通する。
34. 黑褐色土 24-A-A' 22と共通する。

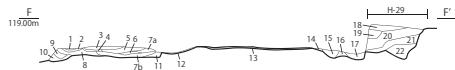
35. にぶい黄褐色土 地山由來の土 黄褐色塊含む H-26b の床面構成する。
36. 黑褐色土 地山土。
- *37, 41, 42 (粒子粗く比較的短時間で人為的に埋めたか)
40. にぶい黄褐色土 白色粒 (As-Cか) VI層塊、わずかに赤褐色粒と黒色粒含む。
41. にぶい黄褐色土 40に近似するが、含まれる粒子細かく少ない。
42. 暗褐色土 砂質 40に近似するが、含まれる粒子より粗い。
- *43, 44, 45 (上層に比べ粒子細かい)
43. 暗褐色土 ごくわずかに白色粒と砂礫含む 黄褐色塊混入。
44. 暗褐色土 43と近似するが含有物少ない。
45. 黑褐色土 僅かにVI層塊を含む。
46. 暗褐色土 黑褐色土と地山褐色土混成している H-22 床面構成する。
47. 黄褐色土 VI層塊 ($\phi 5 \sim 20mm$) 15%含む。
48. 黑褐色土。
49. 暗褐色土 砂 炭化物含む。
50. 黄褐色土 ゆるいVI層塊と混成する。
51. 黑褐色土 VI層塊、白色粒 (As-Cか) 含む。
52. 黄褐色土 地山土。
53. 暗褐色土 白色粒 (As-Cか) VI層塊含む。
54. 海色土 地山土。



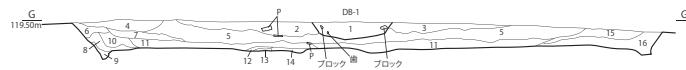
1. 黄褐色土 砂質 III層多く含む。
2. にぶい黄褐色土 砂質 III層多く含む VI層塊 ($\phi 0.5 \sim 3cm$) を 5%含む 砂質 ($\phi 0.2 \sim 0.3cm$) を含みもろい。
3. にぶい黄褐色土 砂質 III層含む VI層塊 ($\phi 0.7 \sim 3cm$) 含む。
4. にぶい黄褐色土 砂質 III層含む。
5. 黑褐色土 砂質 VI層塊 ($\phi 1 \sim 5cm$) を 20%含む。
6. 砂質 As-B 明確に確認できず VI層塊含む 砂礫多くもろい。

1. 黄褐色土 As-C 粒子 VI層塊 ごく細かい赤褐色粒含む。
2. H-24・26 A-A' 11と共通する。やや大きいVI層塊 ($\phi 1.5cm$) 含む。
3. 暗褐色土 砂質 やや性粘あり As-C 少ない VI層塊、炭化した木片を含む。
4. にぶい黄褐色土 砂質 As-C 少ない ゆるいVI層塊、炭化した木片 ($\phi 1 \sim 4cm$) 含む。
5. 暗褐色土 As-C わずか ゆるいVI層塊、炭化した木片 ($\phi 1 \sim 4cm$) 含む。
6. 黑褐色土 As-C 少ない ごく細かいVI層塊、炭化した木片 ($\phi 0.5 \sim 1cm$ と細かい) 含む。
7. 暗褐色土 As-C 少ない ごく細かいVI層塊、炭化した木片 ($\phi 0.5 \sim 1cm$ と細かい) 含む。
8. 暗褐色土 やや粘性あり がゆや暗褐色土色。
9. 暗褐色土 黄褐色土の混成 炭化した木片 ($\phi 1 \sim 5cm$) ・ 黑褐色土 砂質含む。
10. 黑褐色土 砂質 VI層塊 ($\phi 0.3 \sim 1cm$) 含む。
11. にぶい黄褐色土 As-C 少ない 砂礫や多い VI層塊 ($\phi 0.2 \sim 0.4cm$) 20%含む。

Fig.14 H-22・23・24・25・26、D-13



- H-25・29 F-F'
- ※ 1~12 H-25 カマド
1. 棕色土 粘土質 熟成を受けた粘土層 上面に黒色の粘土層(黒褐色)が薄くつく。
2. 暗赤褐色土 砂質 灰白色粘土含む 上面硬化している。
3. 黑褐色土 粘土質 灰白色粘土含む 灰褐色の粘土質(Φ 2~4cm)を 10%含む。
4. 黑褐色土 砂質 灰白色粒(Φ 2~3cm)を 5%含む。
5. にぶい黄褐色土 灰白色土 灰白色土(Φ 0.1~2cm)含む。
6. 黑褐色土 粘土質 VI層塊合む 黒褐色土(Φ 0.1~2cm)含む。
7a. 黑褐色土 粘土質 VI層塊合む 黄褐色の粘土層(Φ 4~5cm)混成したもの 赤褐色粒・VI層塊含む。
7b. 黑褐色土 粘土質 VI層塊(Φ 0.3~1.2cm)を 2%含む。
8. 暗赤褐色土 砂質 VI層塊(Φ 0.3~1.2cm)を 10%含む。
9. 黑褐色土 砂質 わざかに赤褐色粒含む。
10. 暗褐色土 砂質 地山由来の土 粒子細かい。
11. 暗褐色土 砂質 黒褐色土と黒色土が混成する VI層塊(Φ 0.4~2cm)含む。
12. 暗褐色土 砂質 VI層塊含む。
13. 暗褐色土 黒褐色土と黄褐色土混成 VI層塊含む H-25 床面を構成する土。
※ 14~16 H-25 壁周溝 2本めぐる
14. 黑褐色土 混入物少ない。
15. 暗褐色土 ゆるいVI層塊(Φ 0.5~0.8cm)を 20%含む 上面に多い。
16. 黑褐色土 混入物少ない。
17. 暗褐色土 ゆるいVI層塊(Φ 0.5~1.5cm)を 10%含む。
※ 18~22 H-29 覆土
18. 灰黄色土 砂質 少量の砂礫含む。
19. 黑褐色土 砂質 細粒の砂質塊(Φ 5cm)含む。
20. 黑褐色土 砂質 少量の砂礫含む。
21. 黑褐色土 砂質 VI層塊含む。
22. 暗褐色土 砂質 少量の砂礫含み下方に客体的にVI層塊含む。



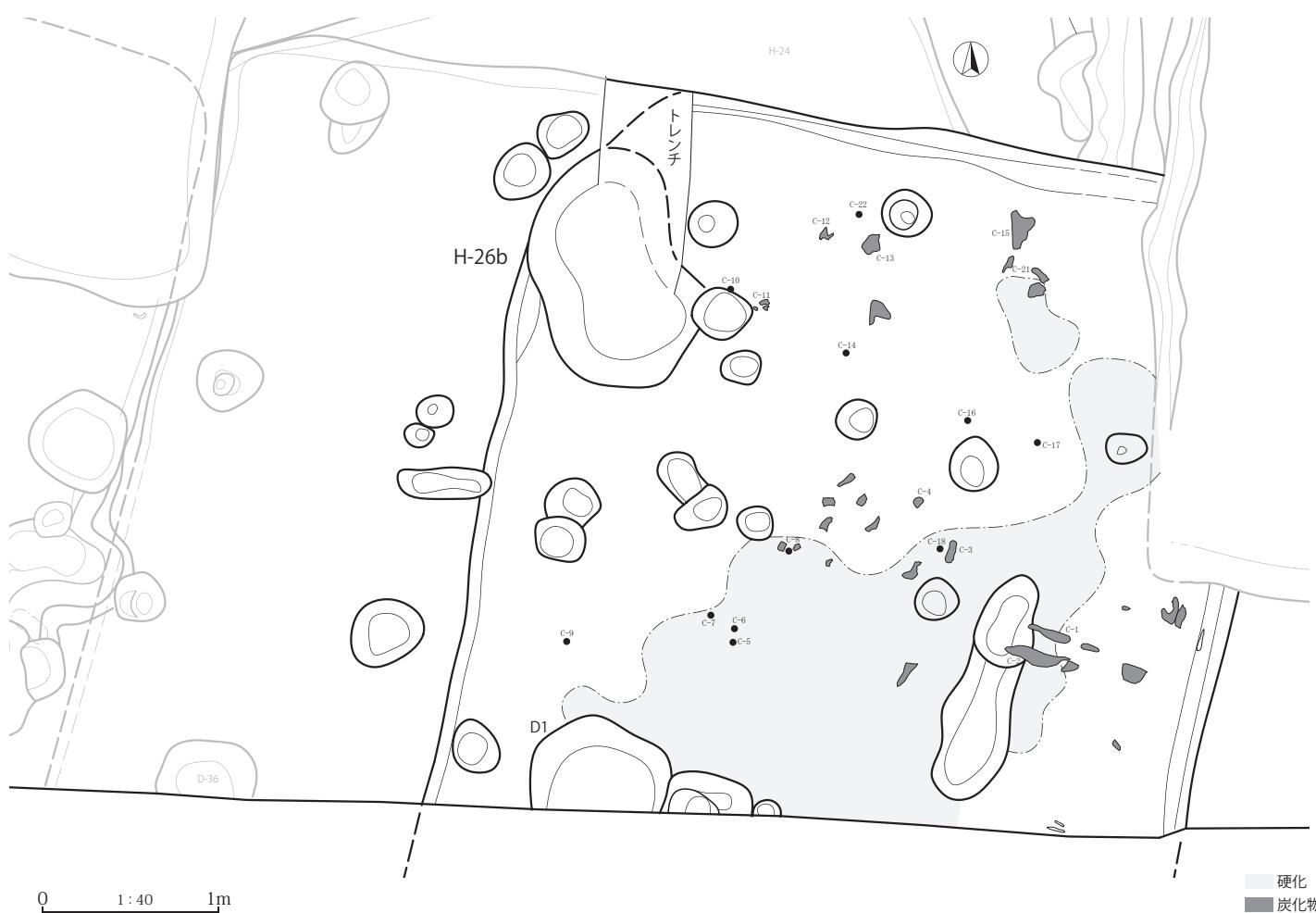
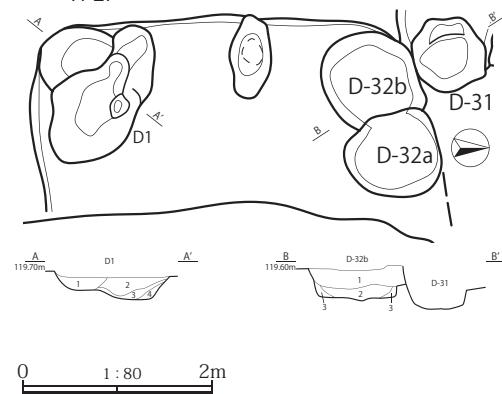


Fig.16 H-26a・26b

H-27 H-27



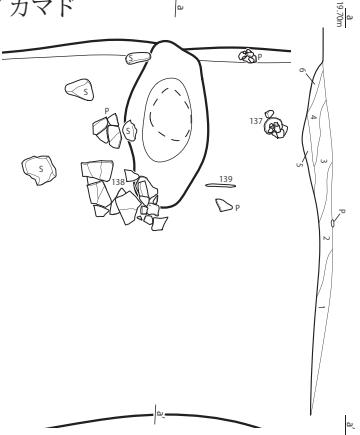
H-27 D1 A-A'

1. 灰褐色土 As-C (Φ 0.5mm) を 3%、炭化物を少量含む。
2. 褐灰色土 灰を 50%、炭化物を少量含む。
3. 灰褐色土 灰を 30%含む。
4. 深色土 粒子細かい。

D-32 B-B'

1. 深褐色土 As-C 粒子 (Φ 0.2mm) を 10%含む。
2. 暗褐色土 VI層の粒子 (Φ 0.5mm) を 1%含む。
3. 暗褐色土 VI層塊を 30%含む。

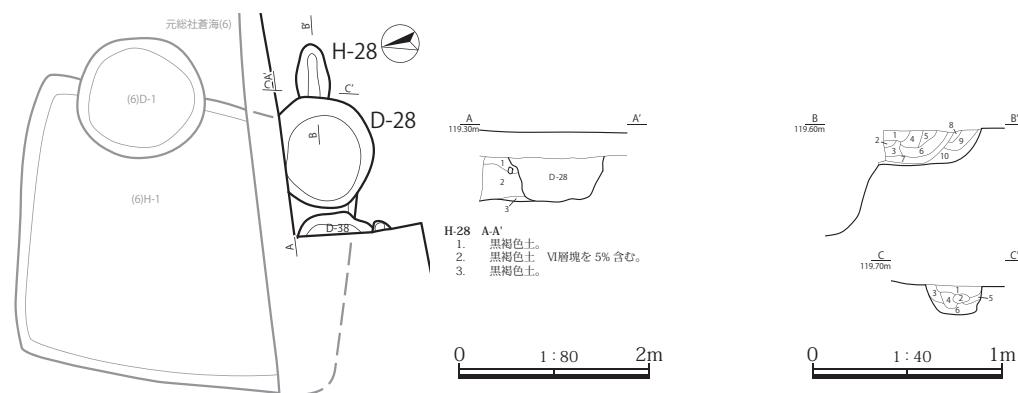
H-27 カマド



H-27 a-a'

1. 暗褐色土 As-C の細粒を 1%含む。砂質は比較的粒子が細かい。
2. 暗褐色土 As-C の細粒を 2%、赤褐色粒を 3%含む。
3. 反褐色土 明赤褐色のブロック (Φ 1~3cm) を 20% 灰白色ブロック を 5%含む。
4. 黑褐色土 赤褐色粒 (Φ 0.1~0.2cm)、白色粒 (Φ 0.1~0.2cm) を含む。
5. 反褐色土 明赤褐色のブロック (Φ 5cm) を含む。
6. にぶい黄褐色土 砂質 少量の砂礫を含む。

H-28 · D-28 · D-38



H-28 カマド B-B'

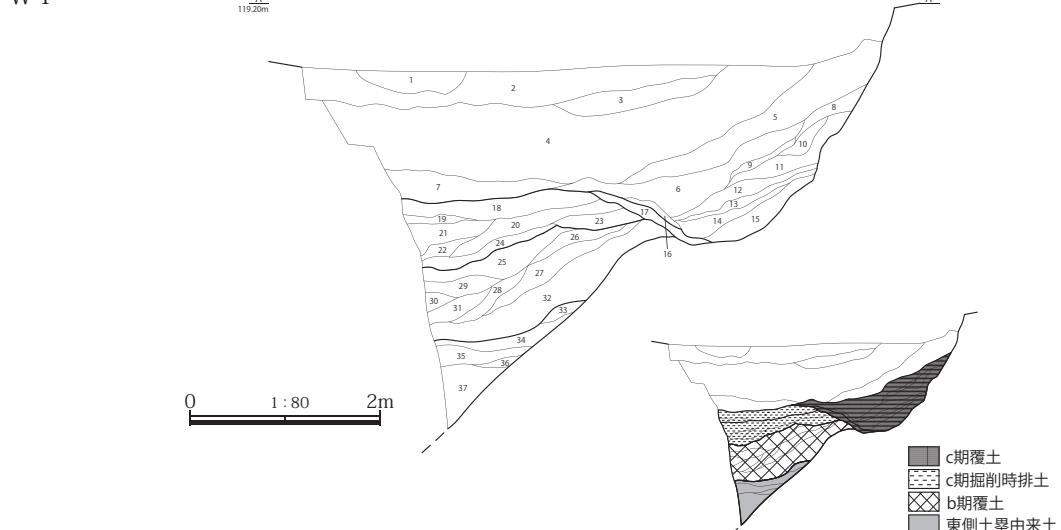
1. 黑褐色土 黑褐色土、灰粒、黒褐色ブロック土を含む。
2. C-C' 2と同じ。
3. C-C' 4と同じ。
4. 暗褐色土 橙色のブロック土 (Φ 1~4cm) を 30%含む。
5. 暗褐色土 塊塊を含まない。
6. 暗褐色土 橙色のブロック土 (Φ 1~4cm) を 50%含む。
7. 反黃褐色土 粒子細かい 煙道。
8. 暗褐色土 橙色のブロック (Φ 1~2cm) を 20%含む。
9. 黑褐色土 少量の砂礫を含む。
10. 黑褐色土 少量の砂礫を含む。

H-28

カマド C-C'

1. 黑褐色土 赤褐色粒、灰粒、黒褐色ブロック土を含む。
2. 黑褐色土 赤褐色粒をわずかに含む。
3. 反黃褐色土 ごく細かい反褐色色粒 (Φ 0.05cm) を含む。
4. 暗褐色土 明赤褐色ブロック土 (Φ 0.3~1cm) を 30%含む。
5. 暗褐色土 わずかに赤褐色土を含む。
6. 深褐色土 灰 (細粒)、赤褐色土をわずかに含む。

W-1



W-1 (北側トレンチ北・南面) A-A' · B-B'

1. にぶい黄褐色土 VI層粒 10%含む。
2. 暗褐色土 粒、VI層砂質・シルト塊少量含む。
3. 暗褐色土 VI層砂粒少量含む。
4. 暗褐色土 砂質少々 VI層砂微量含む。
- 4A. 暗褐色土 小礫を含む VI層砂粒多量含む。
5. 暗褐色土 小礫を含む VI層砂粒微量含む。
6. 明褐色土 VI層砂粒 10%含む。
7. 明褐色土 VI層砂粒微量含む。
8. にぶい黄褐色土 砂質 VI層砂質塊と暗褐色土との混土層。
9. 暗褐色土 VI層砂粒少量含む。
10. 暗褐色土 VI層砂粒 30%含む。
11. 反黃褐色土 砂質 地山 2次堆積。
12. 暗褐色土 VI層砂・シルト・砂粒少量含む。
13. 反黃褐色土 VI層砂質主体。黒褐色土 10%含む。
14. 暗褐色土 黑褐色土とVI層砂質混土層。
- 14A. 14に近似。VI層シルト 10%含む。
15. にぶい黄褐色土 VI層シルト 30%含む。
16. にぶい黄褐色土 VI層シルト 10%含む。
17. 暗褐色土 VI層シルト主体。にぶい黄褐色土 20%含む。

C期溝断面に切り付けたものか。

18. 暗褐色土 VI層砂塊 20%含む。
19. にぶい黄褐色土 VI層シルト・砂粒微量含む。
20. 暗褐色土 VI層砂粒 10%含む。
21. にぶい黄褐色土 VI層シルト・砂粒微量含む。
22. 暗褐色土 VI層シルト 30%含む。
23. 黑褐色土 VI層砂粒少量含む。
24. にぶい黄褐色土 黑褐色土とVI層塊との混土層。
25. 暗褐色土 VI層砂粒少量含む。
26. にぶい黄褐色土 VI層砂粒微量含む。
27. 暗褐色土 VI層砂粒 10%含む。
28. 暗褐色土 やや粒質。VI層砂微量含む。
29. 暗褐色土 砂質。粒粗い。流水痕。
30. 暗褐色土 砂質。粒細かい。流水痕。
31. 暗褐色土 VI層砂粒・シルト少量含む。
32. 黑褐色土 VI層砂粒・シルト微量含む。
33. 暗褐色土 VI層砂粒と暗褐色土との混土層。
34. 黑褐色土 VI層シルト 20%含む。
35. 反黃褐色土 VI層シルトと砂の互層。粒粗い。流水痕。
36. 反黃褐色土 VI層シルト。
37. 反黃褐色土 VI層砂質シルトと砂の互層。粒細かい。流水痕。
38. にぶい黄褐色土 VI層砂粒微量含む。
39. にぶい黄褐色土 VI層砂粒微量含む。
40. 黑褐色土 VI層砂粒ごく微量含む。
41. 暗褐色土 VI層シルト 10%含む。
42. 暗褐色土 VI層シルト 5%含む。
43. 黑褐色土 やや砂質。
44. 黑褐色土 砂質。VI層シルト・砂の混土層。
45. 反黃褐色土 VI層シルト・砂の混土層。
46. 暗褐色土 VI層シルト主体。暗褐色土 20%含む。
47. にぶい黄褐色土 VI層砂塊主体。
48. 暗褐色土 VI層シルト 40%含む。
49. 暗褐色土 小礫微量含む。
50. 黑褐色土 VI層砂粒少量含む。
51. 反黃褐色土 VI層砂塊主体。
52. 暗褐色土 VI層砂砂主体。
53. 黑褐色土 VI層砂粒微量含む。
54. 暗褐色土 VI層砂粒微量含む。
55. 黑褐色土 VI層砂粒微量含む。
56. 暗褐色土 VI層シルト 10%含む。
57. 黑褐色土 VI層砂粒微量含む。
58. 暗褐色土 VI層シルト 10%含む。
59. 暗褐色土 しまり強い。小礫 10%含む。
60. 暗褐色土 VI層砂・シルト 30%含む。

Fig.17 H-27 · 28, D-28 · 31 · 32, W-1

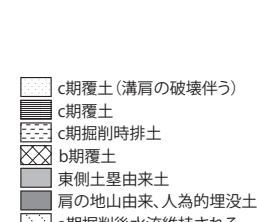
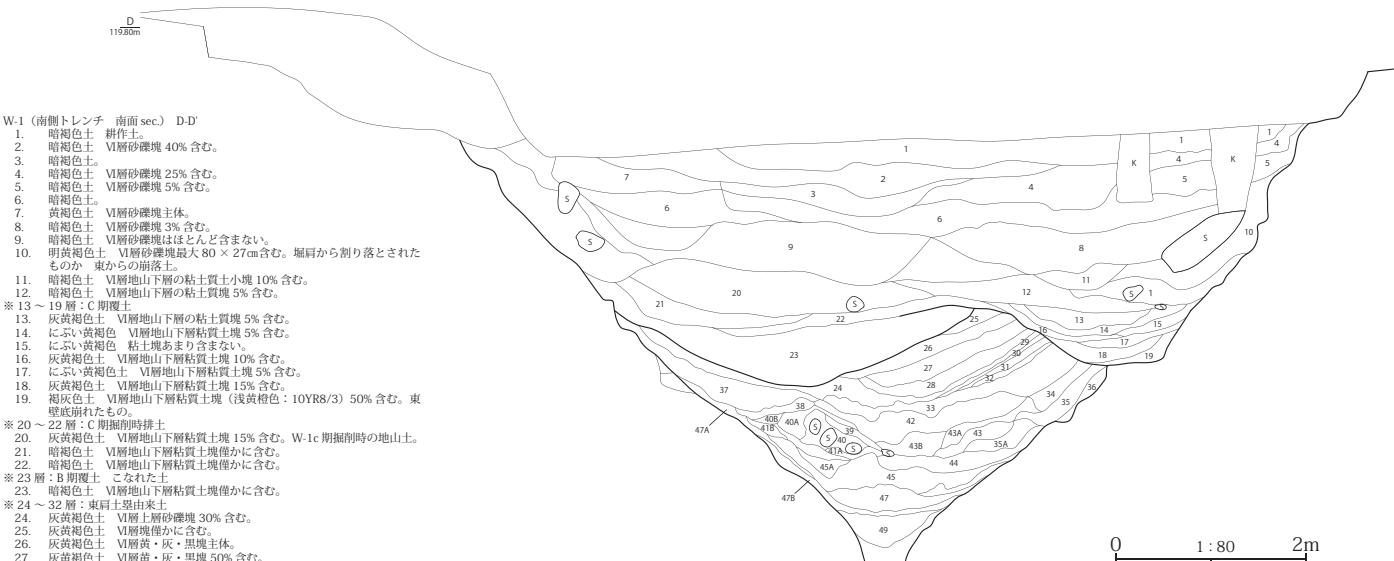
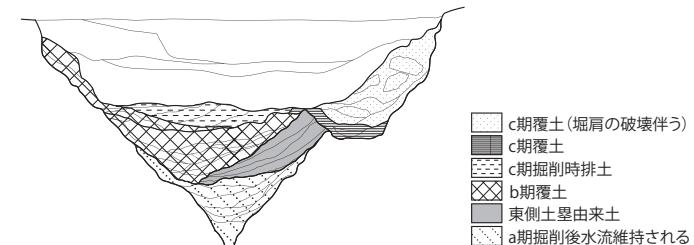
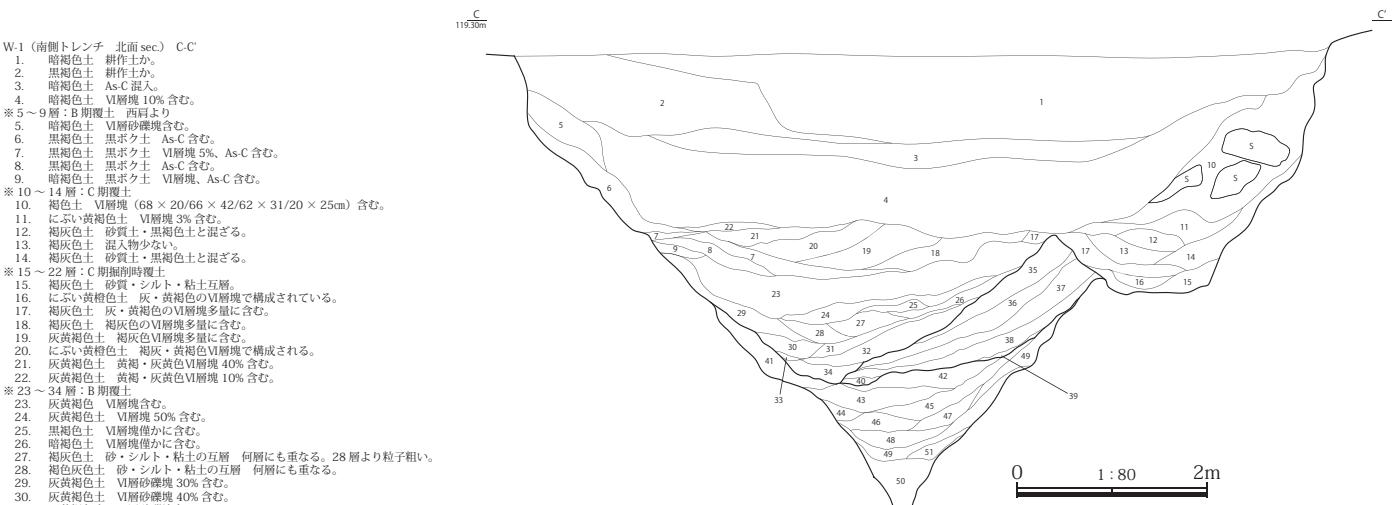
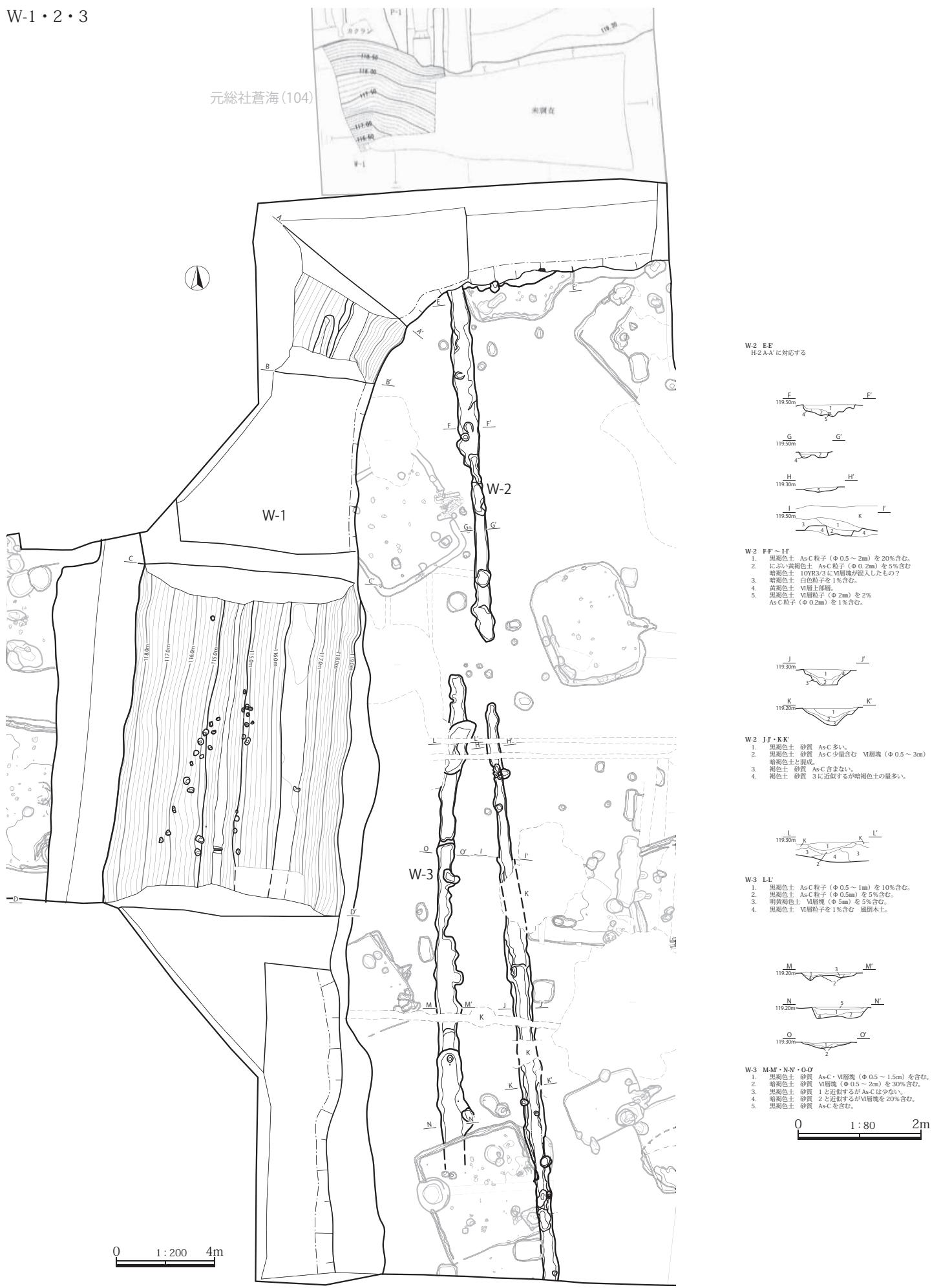
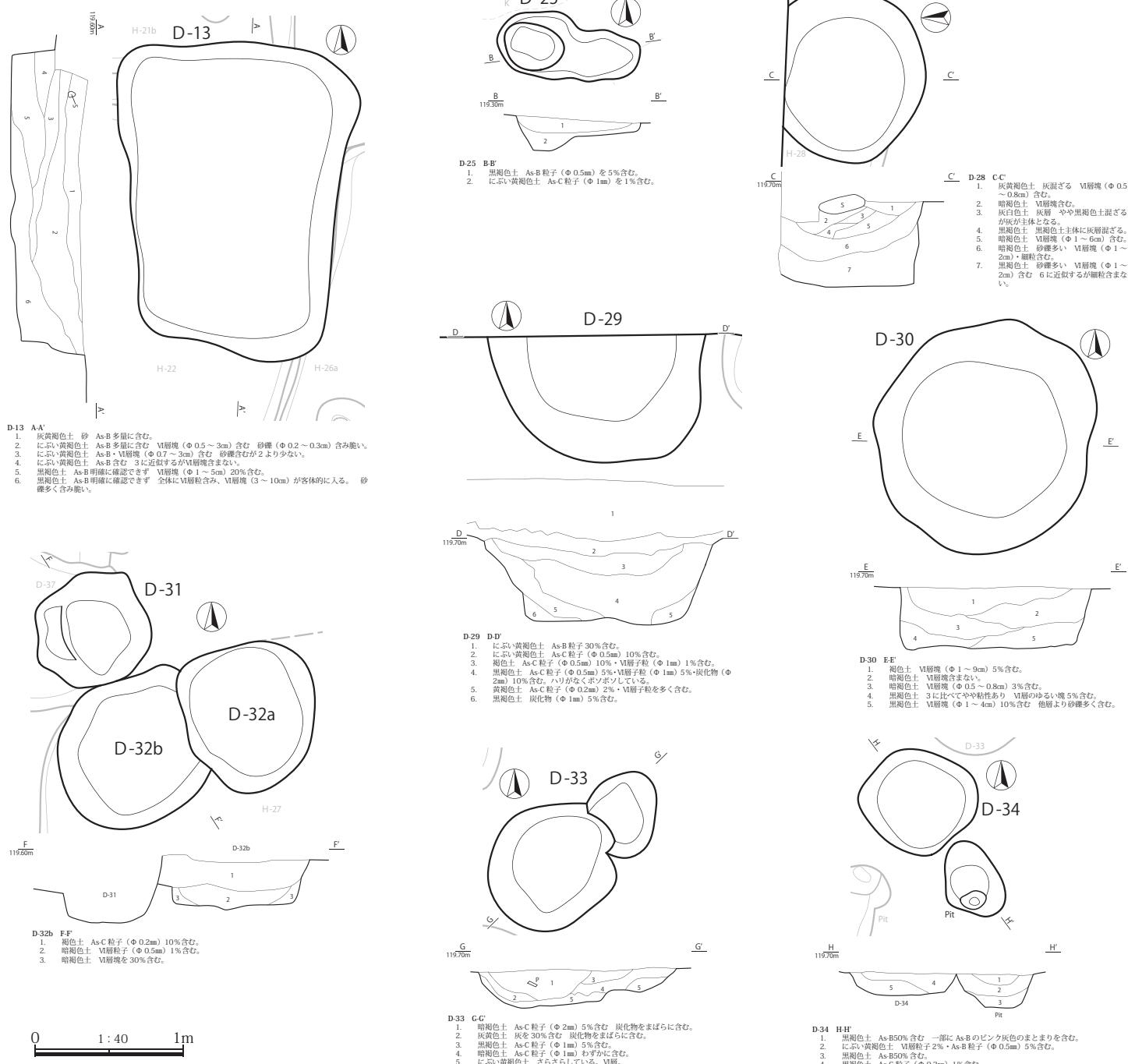


Fig.18 W-1



土坑



墓跡

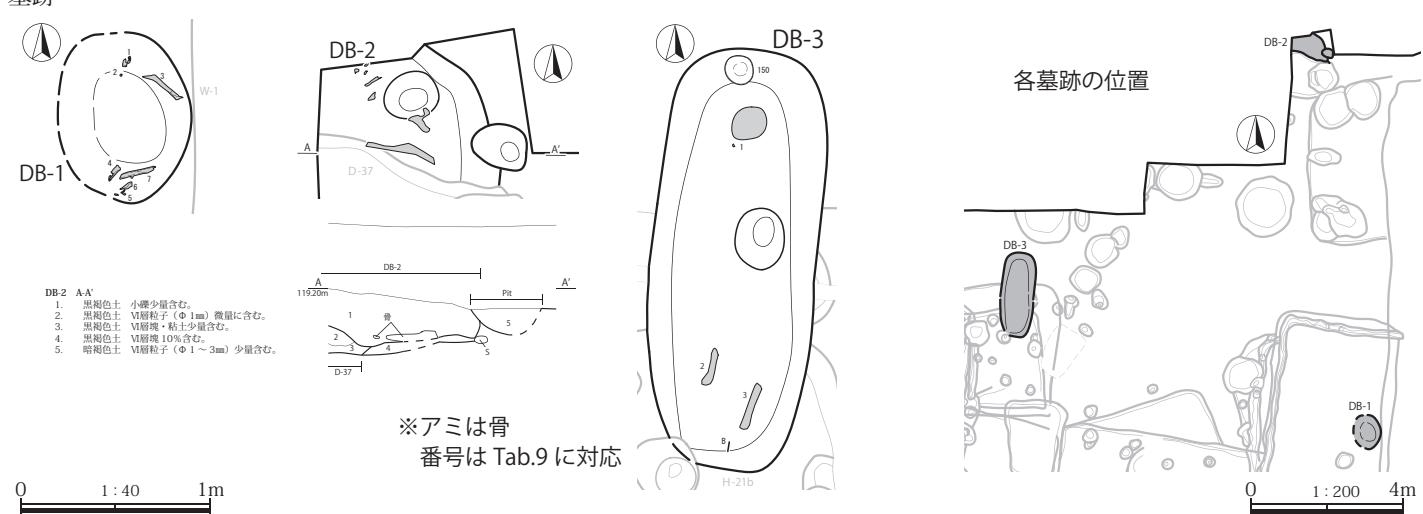


Fig.20 D - 13 · 25 · 28 ~ 34 · DB - 1 ~ 3

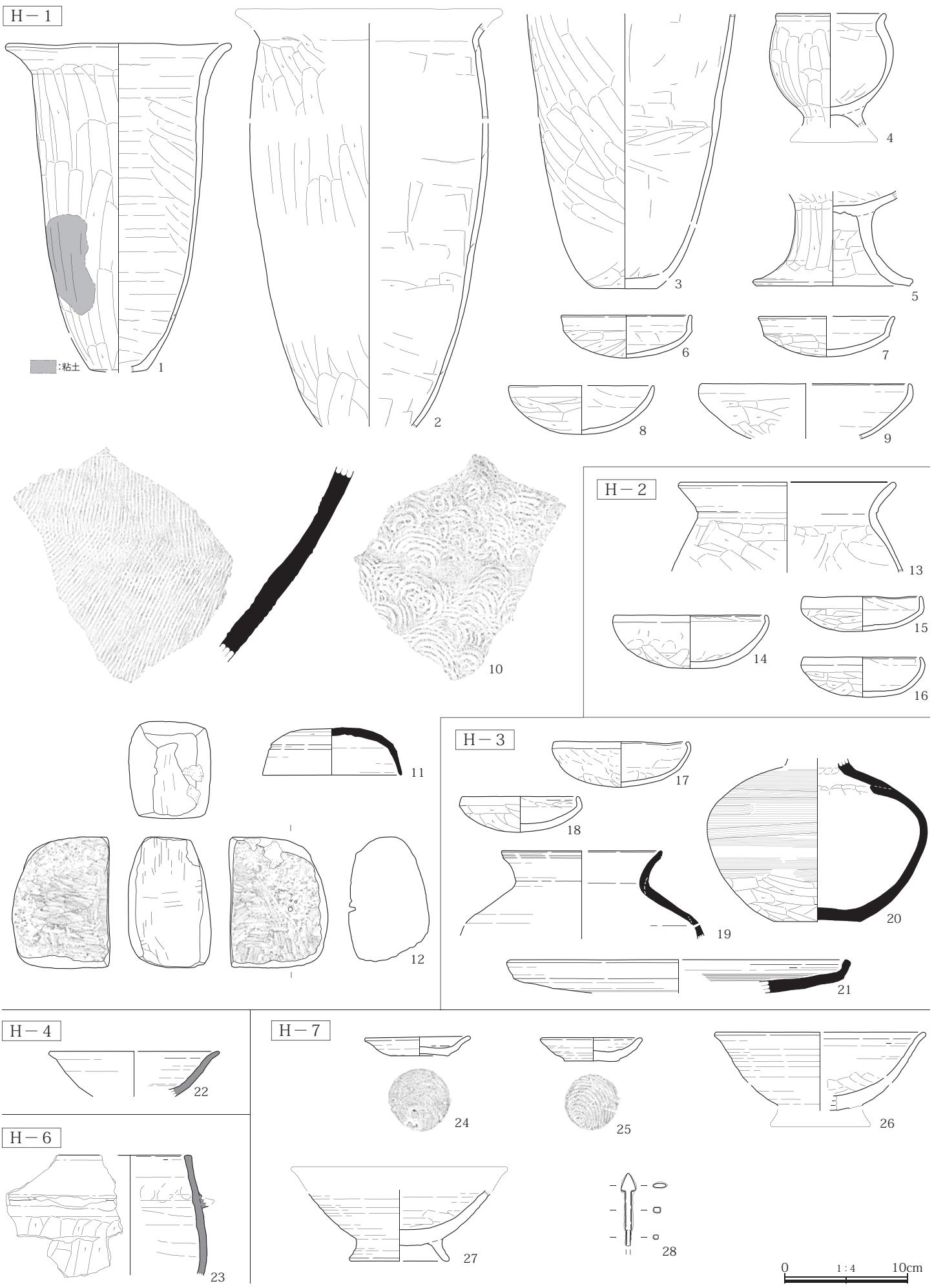


Fig.21 出土遺物（1）

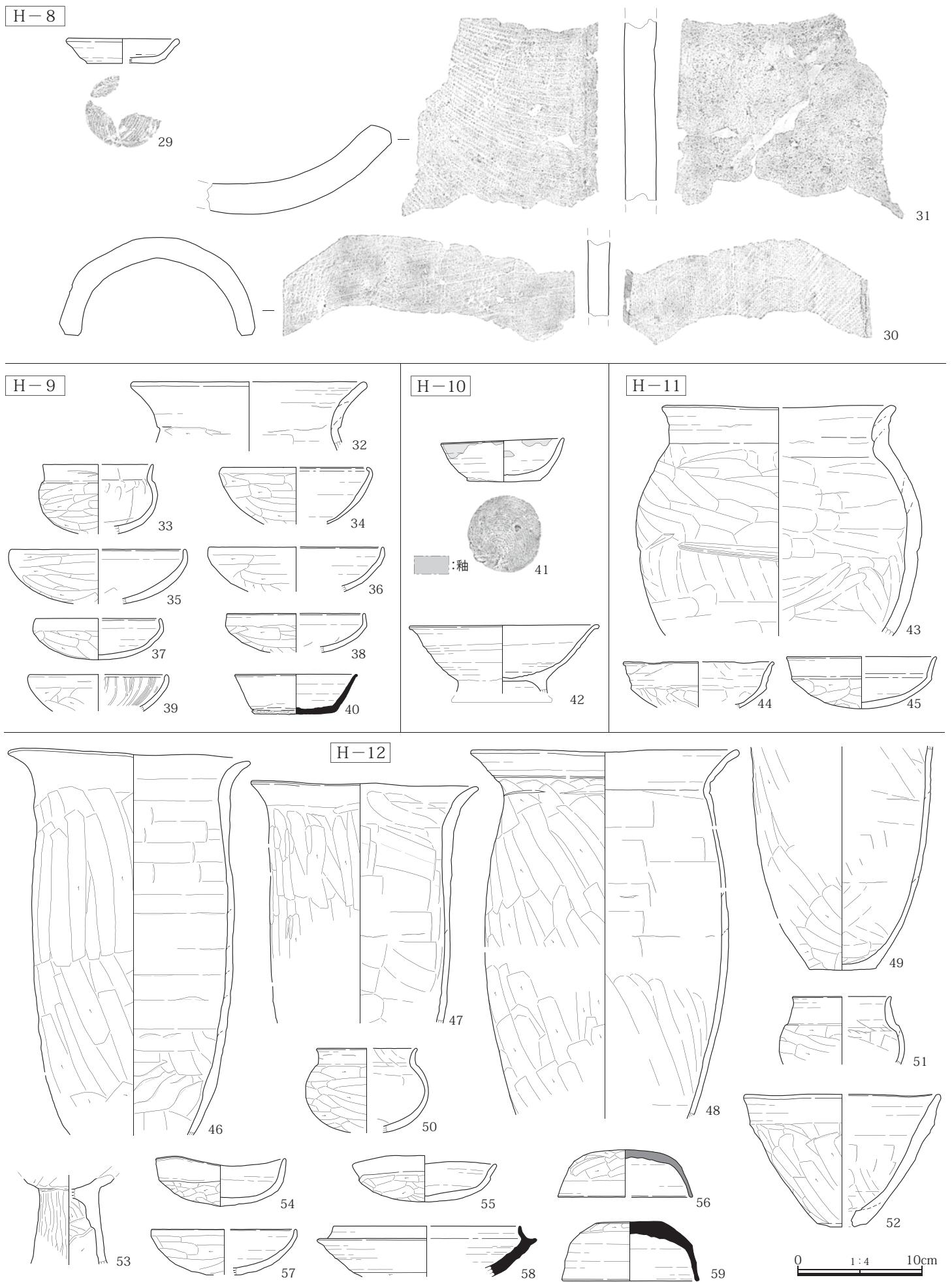


Fig.22 出土遺物（2）

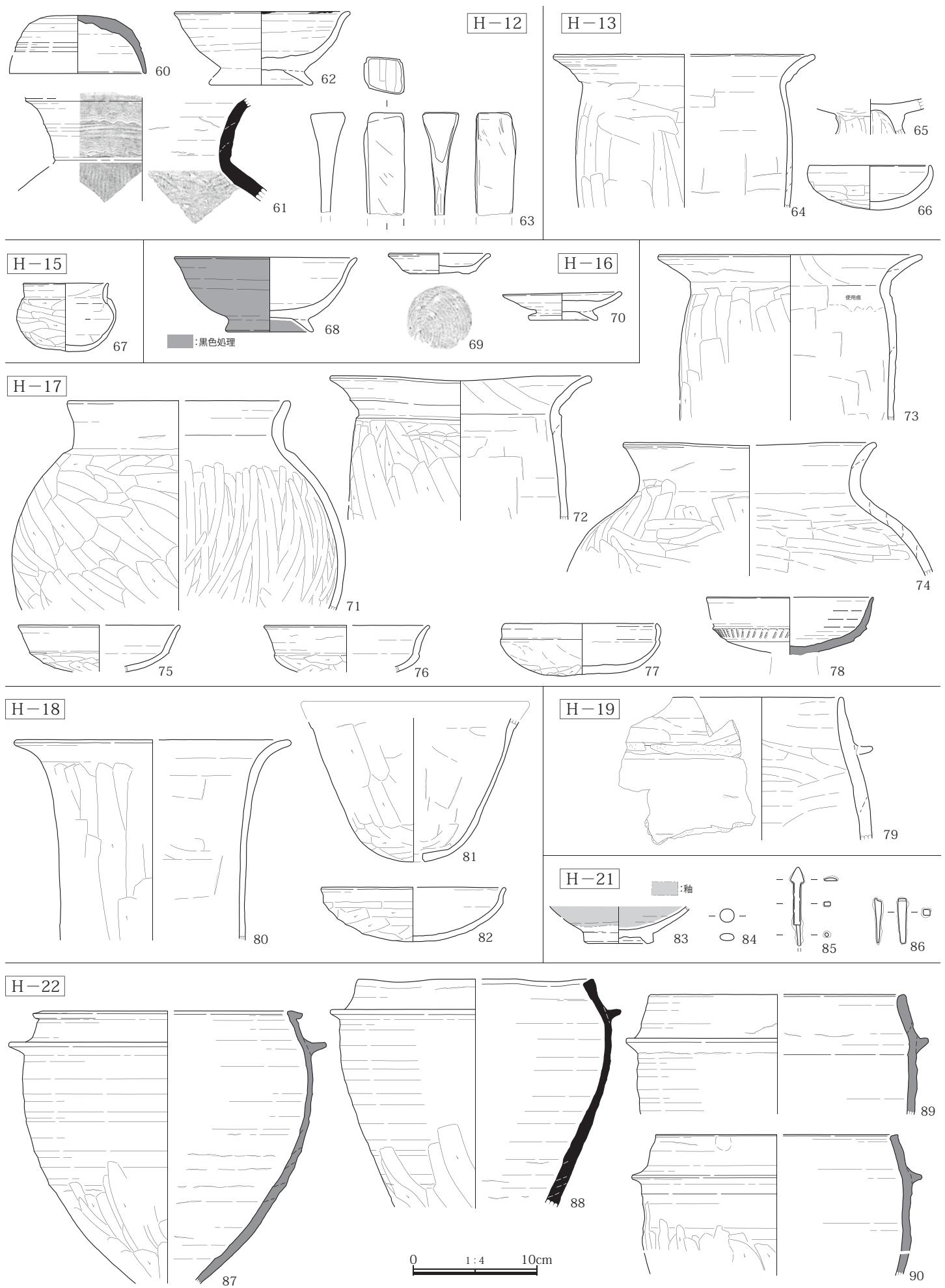


Fig.23 出土遺物（3）

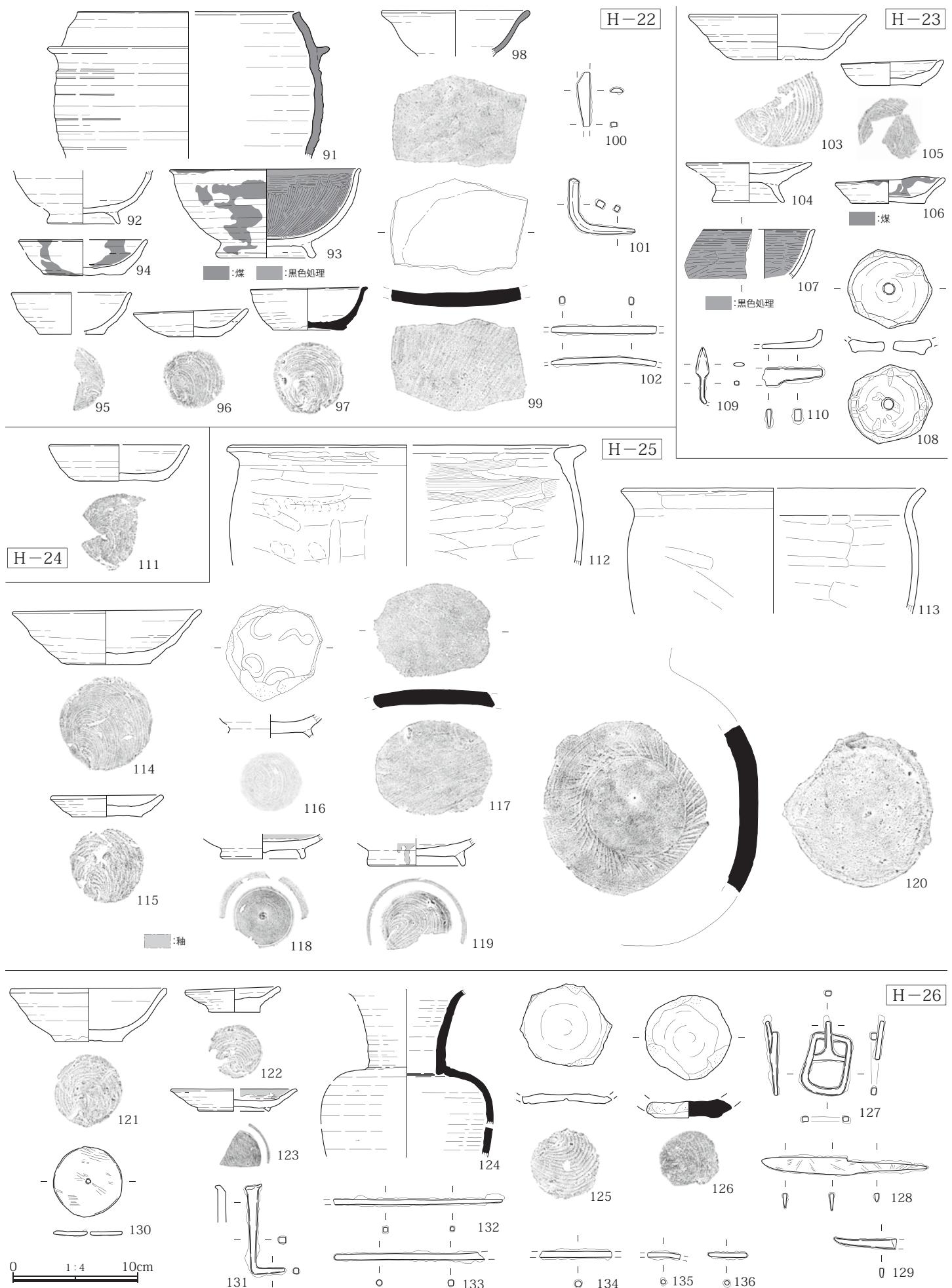


Fig.24 出土遺物 (4)

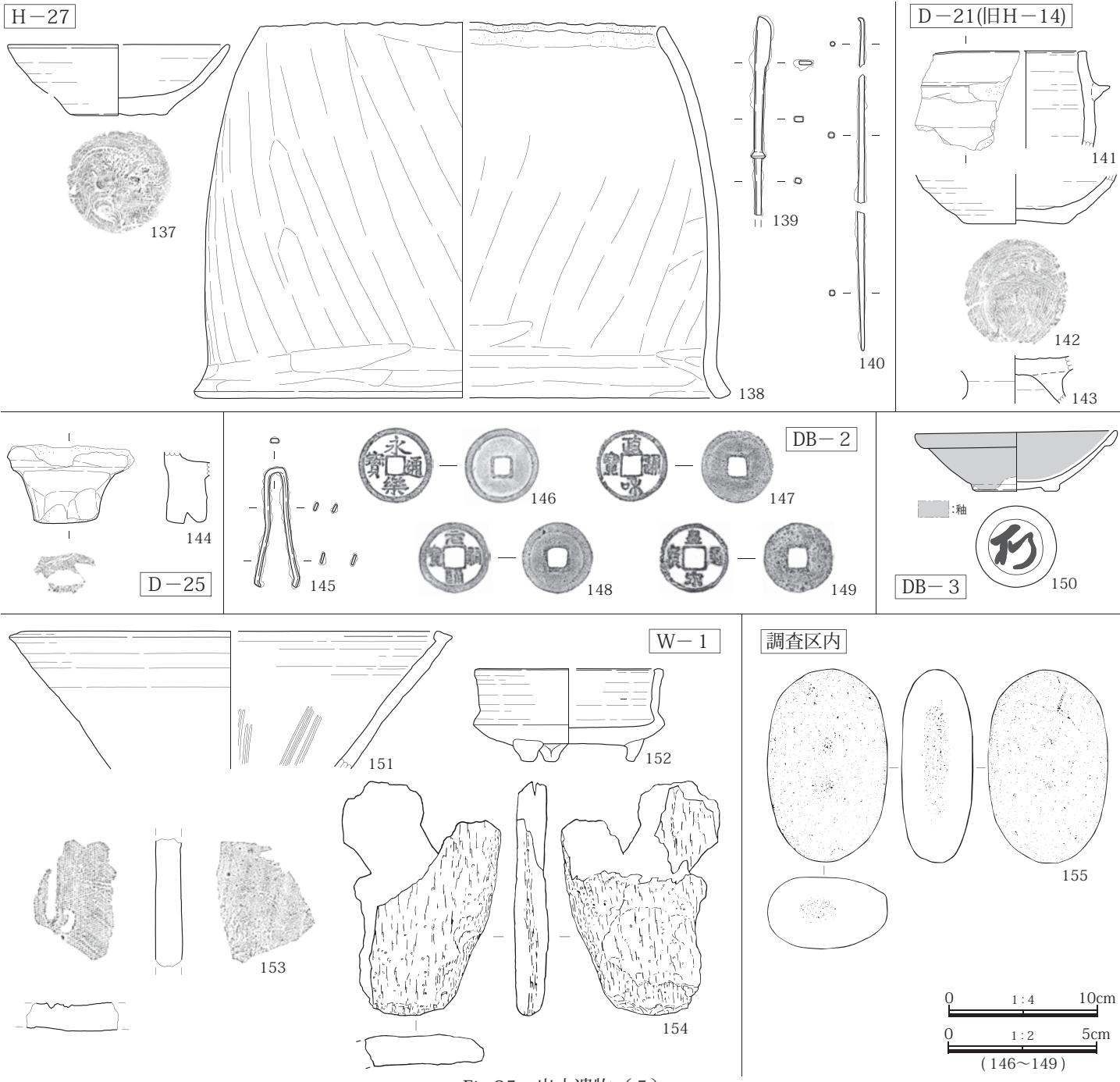


Fig.25 出土遺物 (5)

Tab.3 出土遺物観察表

※()は残存値、< >は推定値

| No. | 遺構 | 種別 | 器種 | 部位 | 法量 (cm) | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 調整 | 備考 |
|-----|-----|-------|-------|-----------|---------|--------|-------|----|-------|-----------------|---|-------------|
| | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | | | |
| 1 | H-1 | 土師器 | 甕 | 口縁~底部9/10 | 18.0 | (27.0) | <4.6> | 良 | 明褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ ナデ | 外面に粘土付着 カマド |
| 2 | H-1 | 土師器 | 甕 | 頸~胴部1/5 | - | (33.0) | - | 普通 | にぶい橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ ヘラナデ | カマド |
| 3 | H-1 | 土師器 | 甕 | 胴~底部1/4 | - | (22.5) | 5.2 | 良 | 明褐 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ケズリ / 内:ヘラナデ | |
| 4 | H-1 | 土師器 | 小型台付甕 | 口縁~脚部4/5 | 8.8 | (9.3) | - | 普通 | 灰黄褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ ヘラナデ | カマド |
| 5 | H-1 | 土師器 | 高坏 | 脚部2/3 | - | (7.8) | 12.4 | 普通 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:体部ナデ 脚部ヨコナデ ケズリ | |
| 6 | H-1 | 土師器 | 坏 | ほぼ完形 | 10.6 | 3.5 | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | P5 |
| 7 | H-1 | 土師器 | 坏 | 口縁~底部1/3 | <12.0> | 3.3 | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 8 | H-1 | 土師器 | 坏 | 口縁~底部1/3 | 11.8 | 4.0 | - | 良 | にぶい橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 9 | H-1 | 土師器 | 坏 | 口縁~体部1/10 | <17.0> | (4.5) | - | 良 | 明赤褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | カマド 挖方 |
| 10 | H-1 | 須恵器 | 甕 | 胴部破片 | - | (16.0) | - | 良 | 灰 | 長石・輝石・石英 | 外:平行タタキ / 内:同心円凹当具 | |
| 11 | H-1 | 須恵器 | 蓋 | ほぼ完形 | 11.3 | 4.1 | - | 良 | 灰 | 輝石・長石・角閃石・小礫 | 外:ロクロ整形 天井部回転ヘラケズリ / 内:ロクロ整形 | 東海産? P5 |
| 13 | H-2 | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部破片 | <17.4> | (7.4) | - | 良 | にぶい褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ ヘラナデ | |
| 14 | H-2 | 土師器 | 坏 | ほぼ完形 | 12.3 | 4.4 | - | 良 | 明赤褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ ナデ | |
| 15 | H-2 | 土師器 | 坏 | 完形 | 9.6 | 2.9 | - | 良 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 16 | H-2 | 土師器 | 坏 | 口縁~底部7/8 | 9.6 | 3.3 | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 17 | H-3 | 土師器 | 坏 | ほぼ完形 | 11.0 | 3.7 | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ後ナデ | 口縁部に歪みあり |
| 18 | H-3 | 土師器 | 坏 | ほぼ完形 | 9.4 | 2.9 | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 19 | H-3 | 須恵器 | 壺 | 口縁~胴部破片 | <13.0> | (7.2) | - | 良 | 黄灰 | 輝石・長石・角閃石・石英 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | |
| 20 | H-3 | 須恵器 | 長頸壺 | 頸~底部4/5 | - | (13.3) | 7.0 | 良 | 灰 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 タタキ→カキ目 胴部下位手持ちヘラケズリ 内:ロクロ整形 | |
| 21 | H-3 | 須恵器 | 高盤 | 口縁~体部破片 | <27.6> | (2.7) | - | 良 | 灰 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 ケズリ / 内:ロクロ整形 カキ目 | |
| 22 | H-4 | 須恵器 | 塊 | 口縁~体部破片 | <13.8> | (3.7) | - | 酸化 | にぶい橙 | 輝石・長石・雲母 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | D2 |
| 23 | H-6 | 須恵器 | 羽釜 | 口縁~胴部破片 | - | (9.8) | - | 酸化 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 ケズリ / 内:ロクロ整形 ナデ | カマド |
| 24 | H-7 | 土師質土器 | 小皿 | 完形 | 8.4 | 1.6 | 4.8 | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り(右回転) / 内:ロクロ整形 | |

Tab.4 出土遺物観察表

※()は残存値、< >は推定値

| No. | 遺構 | 種別 | 器種 | 部位 | 法量 (cm) | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 調整 | 備考 |
|-----|-------|-------|-------|------------|--------------|-------------|-----------|-------------|-------------------|-----------------|-----------------------------------|-----------------------------|
| | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | | | |
| 25 | H-7 | 土師質土器 | 小皿 | 完形 | 8.0 | 1.9 | 4.4 | 普通 | 浅黄橙 | 輝石・長石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り(右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 26 | H-7 | 土師質土器 | 塊 | 口縁~体部1/6 | <17.0> | (6.4) | - | 普通 | にぶい橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 ナデ | 床直 |
| 27 | H-7 | 土師質土器 | 塊 | 体~高台部1/3 | - | (5.8) | 8.0 | 普通 | にぶい黄橙 | 輝石・長石 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 ナデ | |
| 29 | H-8 | 土師質土器 | 小皿 | 口縁~底部1/2 | 8.7 | 2.1 | 5.8 | 普通 | 浅黄橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り(右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 30 | H-8 | 瓦 | 丸瓦 | 破片 | 長さ (6.1) | 幅 15.8 | 厚さ 1.8 | 酸化気味 | 黄灰 | 長石・輝石・鉄斑粒 | 表面:繩タタキ後ヘラナデ / 裏面:糸切り後布目 / 側面:ケズリ | カマド |
| 31 | H-8 | 瓦 | 平瓦 | 破片 | 長さ (17.0) | 幅 (15.8) | 厚さ 2.5 | 普通 | 灰 | 長石・輝石・石英 | 表面:糸切り後布目 / 裏面:ヘラナデ / 側面:ケズリ | 一枚造 |
| 32 | H-9 | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部破片 | <18.6> | (5.6) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 33 | H-9 | 土師器 | 小型短頸壺 | 口縁~体部1/5 | <8.8> | (5.6) | - | 良 | 明赤褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ ヘラナデ | |
| 34 | H-9 | 土師器 | 壺 | 口縁~体部1/4 | <11.8> | (4.6) | - | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 35 | H-9 | 土師器 | 壺 | 口縁~体部1/8 | <14.0> | (4.4) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ ヘラナデ | |
| 36 | H-9 | 土師器 | 壺 | 口縁~体部1/8 | <14.0> | (3.6) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 37 | H-9 | 土師器 | 壺 | 口縁~底部1/3 | <10.0> | 3.3 | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 38 | H-9 | 土師器 | 壺 | 口縁~体部1/4 | <11.0> | (3.1) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ ヘラナデ | |
| 39 | H-9 | 土師器 | 壺 | 口縁~体部破片 | <11.2> | (2.9) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 40 | H-9 | 須恵器 | 壺 | ほぼ完形 | 9.8 | 3.2 | 6.3 | 良 | 灰 | 長石・輝石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 底部回転ヘラ切り / 内:ロクロ整形 | 暗文あり |
| 41 | H-10 | 土師質土器 | 小皿 | ほぼ完形 | 9.9 | 3.6 | 6.0 | 普通 | 浅黄橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り(右回転) / 内:ロクロ整形 | 外面口縁部に煤付着 P1 貯穴 灯明皿 |
| 42 | H-10 | 土師質土器 | 塊 | 口縁~高台部2/3 | 15.3 | (5.6) | - | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・小礫 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | P1 貯穴 |
| 43 | H-11 | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部1/3 | 18.2 | (18.6) | - | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ナデ ケズリ / 内:ナデ | カマド |
| 44 | H-11 | 土師器 | 壺 | 口縁~体部破片 | <12.0> | (3.7) | - | 良 | 橙 | 輝石 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ナデ | 掘方 |
| 45 | H-11 | 土師器 | 壺 | 口縁~底部1/2 | <12.0> | 4.2 | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・小礫 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 46 | H-12b | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部7/10 | 19.3 | (30.4) | - | 普通 | にぶい橙 | 輝石・長石・角閃石・小礫・石英 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヘラナデ | カマド |
| 47 | H-12b | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部1/3 | 18.2 | (19.6) | - | 普通 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ 木口状工具 | |
| 48 | H-12b | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部1/3 | 21.4 | (29.9) | - | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヘラナデ | |
| 49 | H-12b | 土師器 | 甕 | 胴~底部1/6 | - | (18.1) | 5.3 | 普通 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石・小礫 | 外:ケズリ / 内:ナデ | |
| 50 | H-12b | 土師器 | 小型短頸壺 | 口縁~体部1/3 | <8.0> | (6.8) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ナデ | |
| 51 | H-12b | 土師器 | 小型短頸壺 | 口縁~体部1/6 | <7.8> | (5.5) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・小礫 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ナデ | |
| 52 | H-12b | 土師器 | 甕 | 口縁~底部1/2 | 15.6 | 10.7 | 4.0 | 普通 | 外:浅黄橙 内:黒 | 輝石・長石・角閃石・小礫 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ナデ | 内面黒色 |
| 53 | H-12b | 土師器 | 高壺 | 体~脚部破片 | - | (7.2) | - | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:体部ケズリ 脚部ミガキ / 内:体部ナデ 脚部ケズリ | |
| 54 | H-12b | 土師器 | 壺 | 口縁~底部2/3 | 10.4 | 3.9 | - | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | 口縁部に歪みあり カマド |
| 55 | H-12b | 土師器 | 壺 | ほぼ完形 | 11.4 | 3.7 | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | 口縁部の歪みが激しい |
| 56 | H-12b | 須恵器 | 蓋 | 口縁~天井部3/4 | 10.8 | 3.9 | - | 酸化気味 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | 藤岡産 |
| 57 | H-12b | 土師器 | 壺 | 口縁~体部1/4 | <11.6> | (3.7) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 58 | H-12b | 須恵器 | 壺 | 口縁~体部1/10 | <15.0> | (4.1) | - | 良 | 灰白 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 ケズリ / 内:ロクロ整形 | |
| 59 | H-12b | 須恵器 | 蓋 | 口縁~天井部4/5 | 10.8 | 4.9 | - | 良 | 青灰 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 ケズリ 天井部手持ちヘラケズリ / 内:ロクロ整形 | 秋間産? |
| 60 | H-12b | 須恵器 | 蓋 | 口縁~天井部3/4 | 11.0 | 4.7 | - | 酸化気味 | にぶい褐 | 輝石・長石・角閃石・石英 | 外:ロクロ整形 ケズリ 天井部回転ヘラケズリ / 内:ロクロ整形 | 藤岡産 |
| 61 | H-12b | 須恵器 | 壺 | 口辺~肩部破片 | - | (8.4) | - | 普通 断面酸化 | 灰白 | 長石・輝石・角閃石・石英・小礫 | 外:ロクロ整形 平行タタキ / 内:ロクロ整形 当て具 | 頸部に波状文2段の間に2条のス線 藤岡系 |
| 62 | H-12a | 土師質土器 | 塊 | 口縁~高台部9/10 | 14.0 | 6.0 | 8.0 | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | 内面口縁部に煤付着 |
| 64 | H-13 | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部破片 | <11.0> | (12.4) | - | 良 | にぶい褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | カマド燃焼室内 |
| 65 | H-13 | 土師器 | 高盤 | 体~脚部破片 | - | (2.8) | - | 普通 | 明褐 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ナデ ケズリ / 内:ナデ | |
| 66 | H-13 | 土師器 | 壺 | ほぼ完形 | 9.3 | 3.6 | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | P1 |
| 67 | H-15 | 土師器 | 小型短頸壺 | ほぼ完形 | 6.8 | 5.6 | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 68 | H-16 | 土師質土器 | 塊 | 口縁~高台部4/5 | 14.7 | 6.1 | 6.8 | 普通 | 外:黒 内:にぶい 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | 外面と高台部内黑色処理 |
| 69 | H-16 | 土師質土器 | 小皿 | 口縁~底部3/4 | 8.0 | 1.7 | 4.8 | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り(右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 70 | H-16 | 土師質土器 | 皿 | 口縁~高台部5/6 | 9.6 | 2.3 | 5.4 | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | H-17として取り上げ |
| 71 | H-17 | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部1/4 | <18.0> | (15.7) | - | 普通 | 灰褐 | 輝石・長石・雲母・小礫 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ナデ | |
| 72 | H-17 | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部1/8 | 21.0 | (11.7) | - | 良 | 明赤褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | カマド |
| 73 | H-17 | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部1/8 | 21.2 | (13.4) | - | 普通 | にぶい褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 74 | H-17 | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部1/10 | <20.4> | (10.8) | - | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 75 | H-17 | 土師器 | 壺 | 口縁~体部1/4 | <13.0> | (3.8) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 76 | H-17 | 土師器 | 壺 | 口縁~体部1/8 | <13.2> | (3.8) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 77 | H-17 | 土師器 | 壺 | 口縁~底部4/5 | 12.3 | 4.3 | - | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 78 | H-17 | 須恵器 | 高壺 | 口縁~体部1/3 | <13.4> | (4.7) | - | 酸化焰 焼成氣味 | 灰白 | 輝石・長石 | 外:ロクロ整形 口縁部下に連続櫛歯圧痕 / 内:ロクロ整形 | 脚部接合部カキヤブリ (同心円) |
| 79 | H-19 | 土師器 | 羽釜 | 口縁~胴部破片 | - | (11.6) | - | 普通 | 浅黄橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母・石英 | 外:ナデ / 内:ナデ | D2 |
| 80 | H-18 | 土師器 | 甕 | 口縁~胴部破片 | <22.0> | (16.2) | - | 普通 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母・石英 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ナデ | |
| 81 | H-18 | 土師器 | 甕 | 胴~底部破片 | - | (11.6) | - | 普通 | にぶい橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ケズリ / 内:ナデ | |
| 82 | H-18 | 土師器 | 壺 | 口縁~底部2/5 | 14.8 | 4.4 | - | 普通 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ヨコナデ ケズリ / 内:ヨコナデ | |
| 83 | H-21a | 白磁 | 碗 | 体~高台部1/2 | - | (3.0) | 5.0 | 普通 | 素:灰白 釉:灰白 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | |
| 87 | H-22 | 須恵器 | 甕 | 口縁~体部1/8 | <20.0> | (22.2) | - | 酸化 | 灰褐 | 輝石・長石・石英 | 外:ロクロ整形 ケズリ / 内:ロクロ整形 | |
| 88 | H-22 | 須恵器 | 羽釜 | 口縁~胴部1/6 | <19.0> | (18.5) | - | 良 | 灰 | 長石・輝石・雲母 | 外:ロクロ整形 ケズリ / 内:ロクロ整形 | |
| 89 | H-22 | 須恵器 | 羽釜 | 口縁~胴部破片 | <20.6> | (9.7) | - | 酸化 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・雲母・小礫 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | |
| 90 | H-22 | 須恵器 | 羽釜 | 口縁~胴部破片 | <19.6> | (11.4) | - | 酸化 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ロクロ整形 ケズリ / 内:ロクロ整形 | |
| 91 | H-22 | 須恵器 | 羽釜 | 口縁~胴部破片 | <18.8> | (11.8) | - | 酸化気味 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | |
| 92 | H-22 | 土師質土器 | 塊 | 体~高台部1/2 | - | (4.3) | 5.6 | 普通 | にぶい赤褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | |
| 93 | H-22 | 土師質土器 | 塊 | 口縁~高台部9/10 | 15.2 | 7.2 | 7.4 | 普通 | 外:明黄褐 内:黒 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 ミガキ | 内面黒色処理 内外面口縁部に煤付着 灯明? |
| 94 | H-22 | 土師質土器 | 灯明皿 | 口縁~底部7/8 | 10.2 | 2.9 | 6.5 | 普通 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | 内面に煤付着 |
| 95 | H-22 | 土師質土器 | 壺 | 口縁~底部1/2 | 9.6 | 3.4 | 5.0 | 普通 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り(右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 96 | H-22 | 土師質土器 | 小皿 | 口縁~底部3/4 | 9.1 | 2.3 | 4.3 | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母・石英 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り(右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 97 | H-22 | 須恵器 | 塊 | ほぼ完形 | 9.3 | 3.5 | 5.6 | 普通 | 暗灰 | 長石・輝石・雲母・石英 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り(右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 98 | H-22 | 須恵器 | 塊 | 口縁~体部1/4 | <11.6> | (3.7) | - | 酸化 | 浅黄 | 輝石・長石・雲母・小礫 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | |
| 99 | H-22 | 須恵器 | (転用硯) | - | 10.5 | 7.8 | 1.1 | 良 | 灰 | 長石・輝石・雲母 | 外:平行タタキ / 内:当て具 | 甕胴部破片内面を転用 |
| 103 | H-23 | 土師質土器 | 壺 | 口縁~底部2/5 | 14.0 | 3.7 | 7.0 | 普通 | にぶい橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り(右回転) / 内:ロクロ整形 | 内面に煤付着? カマドA |
| 104 | H-23 | 土師質土器 | 皿 | 口縁~高台部3/4 | 10.0 | 3.2 | 5.6 | 良 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | カマドA |
| 105 | H-23 | 土師質土器 | 小皿 | 口縁~底部1/2 | 8.6 | 2.1 | 5.0 | 普通 | にぶい黄橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り(右回転) / 内:ロクロ整形 | カマドB |
| 106 | H-23a | 土師質土器 | 灯明皿 | 完形 | 8.6 | 2.1 | 5.8 | 普通 | 灰黄褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | 口縁部に歪みあり 内外面に煤付着 |
| 107 | H-23 | 土師質土器 | 塊 | 口縁~体部破片 | - | (4.0) | - | 普通 | 黒 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 ミガキ / 内:ロクロ整形 ミガキ | 黒色土器 D1貯蔵穴 |

Tab.5 出土遺物觀察表

※()は残存値、< >は推定値

| No. | 遺構 | 種別 | 器種 | 部位 | 法量 (c m) | | | 焼成 | 色調 | 胎土 | 調整 | 備考 |
|-----|------|-------|--------------------|------------|-------------|------------|-----------|----|--------------|-----------------|-------------------------------------|--|
| | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | | | |
| 108 | H-23 | 土師質土器 | 土器片製 紡錘車? | - | 長さ 6.8 | 幅 6.4 | 厚さ 1.1 | 良 | 橙 | 長石・輝石・雲母 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | 焼成後に穿孔 高台付塊を転用 |
| 111 | H-24 | 土師質土器 | 壺 | 口縁～底部 1/4 | <11.0> | 3.0 | <6.2> | 普通 | 灰黃褐 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り (右回転) / 内:ロクロ整形 | 2次被熱 H-26 の混入? |
| 112 | H-25 | 土師器 | 土釜 | 口縁～胴部破片 | <28.0> | (9.7) | - | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母・石英 | 外:ナデ / 内:ハケ ヨコナデ | |
| 113 | H-25 | 土師器 | 土釜 | 口縁～胴部破片 | <24.0> | (10.1) | - | 普通 | 黒褐 | 長石・輝石・角閃石 | 外:ナデ / 内:ナデ | |
| 114 | H-25 | 土師質土器 | 塊 | 口縁～底部 7/8 | 15.0 | 4.4 | 7.1 | 良 | 浅黃橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り (右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 115 | H-25 | 土師質土器 | 小皿 | 口縁～底部 5/6 | 8.7 | 1.8 | 5.6 | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母・石英 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り (右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 116 | H-25 | 土師質土器 | 塊 | 体～高台部 1/5 | - | (1.8) | - | 普通 | にびい黄橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り / 内:ロクロ整形 | 内面黒色処理? 暗文あり 上層 |
| 117 | H-25 | 須恵器 | 土器片製 円盤 | - | 長さ 9.8 | 幅 8.2 | 厚さ 1.1 | 良 | 灰 | 長石・輝石・雲母 | 外:平行タタキ / 内:當て具 | 大甕胴部破片を転用 上層 |
| 118 | H-25 | 灰釉陶器 | 塊 | 体～高台部 1/5 | - | (2.0) | 6.2 | 良 | 灰白 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | |
| 119 | H-25 | 灰釉陶器 | (転用窯) | - | - | (2.2) | 7.4 | 良 | 褐灰 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り (右回転) / 内:ロクロ整形 | 塊底部破片内面を転用 外面高台部内パレット? |
| 120 | H-25 | 須恵器 | 堤瓶 | 胴部破片 | - | (13.4) | - | 良 | 暗灰 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 同心円状力ギヨン 形連続櫛歯圧痕 内:ロクロ整形 | 金山産? |
| 121 | H-26 | 土師質土器 | 塊 | 口縁～底部 9/10 | 12.4 | 4.3 | 5.4 | 良 | 明黄褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り (右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 122 | H-26 | 土師質土器 | 小皿 | 口縁～底部 4/5 | 7.3 | 2.1 | 4.1 | 良 | にびい黄褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り (右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 123 | H-26 | 灰釉陶器 | 皿 | 口縁～高台部 1/5 | <10.0> | 1.8 | <5.6> | 良 | 灰白 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り (右回転) / 内:ロクロ整形 | |
| 124 | H-26 | 須恵器 | 長頸壺 | 頭～胴部 2/5 | - | (13.5) | - | 良 | 灰白 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | |
| 125 | H-26 | 土師質土器 | 土器片製 紡錘車 未完成 | - | 長さ 7.2 | 幅 6.5 | 厚さ 0.8 | 良 | 橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り (右回転) / 内:ロクロ整形 | 焼成後に穿孔 (未貫通) |
| 126 | H-26 | 須恵器 | 土器片製 円盤 | - | 長さ 7.0 | 幅 6.9 | 厚さ 1.5 | 普通 | にびい黄橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り / 内:ロクロ整形 | |
| 137 | H-27 | 土師質土器 | 塊 | 口縁～底部 2/3 | <14.9> | 4.8 | 6.5 | 普通 | にびい黄橙 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り / 内:ロクロ整形 | |
| 138 | H-27 | 土師器 | 土釜 | 口縁～底部 1/3 | <35.0> | 25.1 | - | 普通 | にびい黄褐 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ナデ / 内:ナデ | 移動式窯に転用 |
| 141 | D-21 | 土師質土器 | 羽釜 | 口縁～胴部破片 | - | (6.5) | - | 普通 | にびい褐色 | 輝石・長石・角閃石 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | 旧 H-14 |
| 142 | D-21 | 土師質土器 | 皿 | 体～底部 1/3 | - | (3.3) | 7.0 | 良 | にびい橙 | 輝石・長石・角閃石・雲母 | 外:ロクロ整形 底部回転糸切り (右回転) / 内:ロクロ整形 | 旧 H-14 |
| 143 | D-21 | 土師質土器 | 塊 | 底～高台部破片 | - | (3.2) | - | 普通 | にびい褐色 | 輝石・長石・角閃石・雲母・小礫 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | 旧 H-14 |
| 144 | D-25 | 瓦質土器 | 香炉又は 火鉢 | 脚部破片 | - | (4.9) | - | 普通 | 黄灰 | 輝石・長石・雲母 | 外:ナデ / 内:ヨコナデ | |
| 150 | DB-3 | 白磁 | 碗 | ほぼ完形 | 13.6 | 4.1 | 5.4 | 良 | 素:灰白 釉:灰白 | 輝石・長石 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | 底部に墨書「梅」 |
| 151 | W-1 | 陶器 | 擂鉢 | 口縁～胴部破片 | <28.0> | (9.3) | - | 普通 | 黒褐 | 輝石・長石・雲母 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | |
| 152 | W-1 | 陶器 | 蛤蛤香炉 | 口縁～脚部 2/3 | 12.2 | 6.3 | 7.2 | 良 | 素:灰白 釉:褐 | 長石・輝石 | 外:ロクロ整形 / 内:ロクロ整形 | 美濃 (連房田 a 期) 乙塚東塚 1670～1710 年 灰釉流し |
| 153 | W-1 | 瓦 | 平瓦 | 破片 | 長さ (8.6) | 幅 (6.2) | 厚さ 1.8 | 普通 | 灰 | 長石・輝石 | 表面:布目 / 裏面:ナデ | 刻書あり (不明) |

Tab.6 石製品觀察表

※()は残存値

Tab.7 鐵製品觀察表

* () は残存値、〈 〉 は推定値

| No. | 遺構 | 種別 | 器種 | 部位 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 | No. | 遺構 | 種別 | 器種 | 部位 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 |
|-----|-------|-----|-------|------|--------|-------|--------|----------------|-----|------|-----|--------|------|--------|-------|--------|----------|
| 28 | H-7 | 鉄製品 | 鉄鑓 | 先端 | (5.9) | 1.2 | 0.4 | D1出土 錫身部三角形丸丸造 | 132 | H-26 | 鉄製品 | 棒状鉄製品 | - | (13.6) | 0.4 | 0.3 | 断面方形 |
| 85 | H-21b | 鉄製品 | 鉄鑓 | 先端 | (6.4) | 1.1 | 0.3 | 錫身部三角形片丸造 | 133 | H-26 | 鉄製品 | 丸棒状鉄製品 | - | (12.1) | 0.5 | 0.4 | 断面方～円形 |
| 86 | H-21b | 鉄製品 | 不明 | - | 3.6 | 0.7 | 0.5 | くさび形 鉤? | 134 | H-26 | 鉄製品 | 丸棒状鉄製品 | - | (5.8) | 0.5 | 0.5 | 断面円形 |
| 100 | H-22 | 鉄製品 | 鉄鑓か | 先端 | (4.4) | 1.0 | 0.3 | 錫身部片丸造 | 135 | H-26 | 鉄製品 | 棒状鉄製品 | - | (2.6) | 0.3 | 0.3 | 断面円形 |
| 101 | H-22 | 鉄製品 | 鉄釘 | ほぼ完形 | 5.3 | 4.4 | 0.5 | L字型に屈曲 | 136 | H-26 | 鉄製品 | 棒状鉄製品 | - | 3.1 | 0.4 | 0.4 | 断面円形 |
| 102 | H-22 | 鉄製品 | 棒状鉄製品 | - | (8.5) | 0.5 | 0.4 | 断面方形 | 139 | H-27 | 鉄製品 | 鉄鑓 | 先端 | (13.4) | 1.0 | 0.3 | 錫身部片刃 |
| 109 | H-23 | 鉄製品 | 鉄鑓 | 先端 | (4.6) | 1.0 | 0.3 | 錫身部三角形片丸気味 | 140 | H-27 | 鉄製品 | 棒状鉄製品 | - | <22.5> | 0.4 | 0.3 | 図上復元 |
| 110 | H-23 | 鉄製品 | 刀子 | 茎部 | (4.8) | 1.4 | 0.5 | 茎尻屈曲 | 145 | DB-2 | 鉄製品 | 毛抜形鉄製品 | ほぼ完形 | 8.0 | 3.0 | 0.2 | 頭付近出土 |
| 127 | H-26 | 鉄製品 | 鉈具 | ほぼ完形 | 5.9 | 4.1 | 0.6 | 馬具か | 146 | DB-2 | 銭 | 永樂通寶 | 完形 | 径2.5 | 孔径0.5 | 厚さ0.1 | 明錢頭付近出土 |
| 128 | H-26 | 鉄製品 | 刀子 | ほぼ完形 | 13.3 | 1.4 | 0.3 | ワラ状木質付着 | 147 | DB-2 | 銭 | 政和通寶 | 完形 | 径2.4 | 孔径0.6 | 厚さ0.1 | 北宋錢頭付近出土 |
| 129 | H-26 | 鉄製品 | 刀子 | 刃部 | (5.0) | 0.8 | 0.3 | 切先のみ | 148 | DB-2 | 銭 | 元祐通寶 | 完形 | 径2.4 | 孔径0.6 | 厚さ0.1 | 北宋錢頭付近出土 |
| 130 | H-26 | 鉄製品 | 紡錘車 | ほぼ完形 | 5.7 | 5.5 | 0.3 | ワラ状木質付着 | 149 | DB-2 | 銭 | 皇宋通寶 | 完形 | 径2.3 | 孔径0.6 | 厚さ0.1 | 北宋錢頭付近出土 |
| 131 | H-26 | 鉄製品 | 釘 | ほぼ完形 | 7.3 | 3.1 | 0.4 | L字状に屈曲 | 156 | H-19 | 銅製品 | 不明 | - | 0.3 | 0.3 | 0.2 | 銅鋸か |

Tab.8 穹穴建物跡出土 土器・陶磁器・瓦一覧表（重量比）

| 遺構名 | 土師器 (g) | | | | | | | | | | 須恵器 (g) | | | | | | | | | | 金 (g) | | | | | | | | | | 陶器 (g) | | | | | | | | | | 磁器 (g) | | | | | | | | | | 瓦 (g) | | | | | | | | | | 小計 (g) | | | | | | | | | |
|------|-------------------|-------------|-------------------|-------------|-----------|-----------|----------|-----------|-------|-------------------|-------------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|--|--|--------|--|--|--|--|-------|--|--|--|--|--------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | 土師器 (g) | | | | | 須恵器 (g) | | | | | 金 (g) | | | | | 陶器 (g) | | | | | 磁器 (g) | | | | | 瓦 (g) | | | | | 小計 (g) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 小型品 (环・塊 他) | 大型品 (甕類) | 小型品 (环・塊 他) | 大型品 (甕類) | 羽釜・ 土釜 | 陶器 (g) | 瓦 (g) | 小計 (g) | 遺構名 | 小型品 (环・塊 他) | 大型品 (甕類) | 金 (g) | 陶器 (g) | 磁器 (g) | 瓦 (g) | 小計 (g) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-1 | 422.0 | 3,061.0 | 155.5 | 635.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 4,273.5 | H-16 | 7.5 | 29.0 | 377.0 | 9.5 | 0.0 | 9.0 | 0.0 | 226.0 | 658.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-2 | 568.5 | 471.0 | 74.0 | 308.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 1,421.5 | H-17 | 207.0 | 2,814.0 | 201.0 | 271.5 | 0.0 | 7.0 | 0.0 | 60.5 | 3,561.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-3 | 378.0 | 485.0 | 75.0 | 1,491.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 2,429.0 | H-18 | 116.0 | 335.5 | 0.0 | 94.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 545.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-4 | 16.5 | 61.5 | 54.0 | 67.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 199.5 | H-19 | 58.0 | 488.0 | 175.5 | 98.5 | 148.0 | 0.0 | 0.0 | 260.0 | 1,228.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-6 | 0.0 | 63.0 | 6.0 | 0.0 | 86.0 | 0.0 | 0.0 | 155.0 | H-21 | 17.5 | 317.5 | 62.0 | 137.0 | 12.0 | 18.5 | 125.0 | 241.5 | 931.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-7 | 37.0 | 229.5 | 498.5 | 88.0 | 0.0 | 13.5 | 171.0 | 1,037.5 | H-22 | 73.5 | 892.0 | 1,277.0 | 461.5 | 1,968.0 | 26.5 | 0.0 | 36.0 | 4,734.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-8 | 31.5 | 188.0 | 160.0 | 50.0 | 111.5 | 0.0 | 2,128.5 | 2,669.5 | H-23 | 130.0 | 888.0 | 417.0 | 107.0 | 83.5 | 76.0 | 0.0 | 310.5 | 2,012.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-9 | 553.0 | 808.0 | 196.0 | 460.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 2,017.5 | H-24 | 22.0 | 227.5 | 122.5 | 121.5 | 32.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 526.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-10 | 7.0 | 24.5 | 462.0 | 0.0 | 15.5 | 6.0 | 232.0 | 747.0 | H-25 | 52.0 | 1,133.5 | 1,105.0 | 1,022.0 | 264.0 | 176.0 | 0.0 | 1,005.0 | 4,757.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-11 | 298.5 | 1,704.5 | 90.0 | 313.5 | 0.0 | 0.0 | 149.5 | 2,556.0 | H-26 | 0.0 | 1,216.0 | 442.0 | 1,068.0 | 0.0 | 84.0 | 0.0 | 4,439.0 | 7,249.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-12 | 994.0 | 6,473.5 | 615.0 | 3,427.0 | 467.0 | 46.5 | 944.5 | 12,967.5 | H-27 | 1.0 | 492.0 | 230.0 | 4.0 | 2,443.0 | 40.0 | 0.0 | 0.0 | 3,210.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-13 | 209.0 | 377.5 | 226.0 | 273.5 | 0.0 | 5.5 | 0.0 | 1,091.5 | H-29 | 0.0 | 0.0 | 116.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 116.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| H-15 | 122.5 | 279.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | 21.0 | 0.0 | 441.5 | 合計(g) | 4,322.0 | 23,059.0 | 7,040.0 | 10,624.5 | 5,631.0 | 529.5 | 125.0 | 10,204.0 | 61,535.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

VI 元総社蒼海遺跡群（143）出土人骨

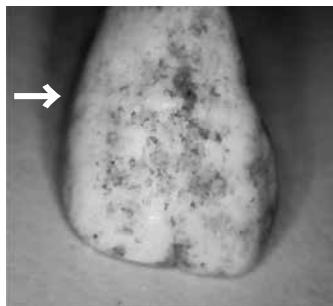
谷畠美帆（明治大学）

人骨は3遺構（DB-1～3）から出土している。いずれの資料についても遺存状態は不良であり、詳細を把握することは困難である。しかし、数点の歯牙など同定が可能な部位も出土しているため、以下、遺構ごとに記述する。

（1）DB-1（中世）遺構

歯槽は遺存していないが、本遺構からは合計6本の歯が出土している（歯式を下記に示す）。上顎第2切歯はシャベル型切歯であり、エナメル質減形成の所見が確認できる（第1図）。咬耗はエナメル質にとどまるが、上顎第1切歯では不規則な咬耗が確認できている。この他、切歯や犬歯とみなされる歯根が数本遺存している。成人個体である（性別不明）。

| | | |
|---|-------|---------|
| 右 | 3 2 1 | 左 |
| | 1 2 | —歯牙遺存なし |



第1図

（2）DB-2（中世）遺構

本遺構からは、比較的華奢な左大腿骨骨幹の一部が出土している。この他、歯根を含め、約30本の歯が遺存している。咬耗は切歯および犬歯ではエナメル質にとどまるが、小白歯および第1大臼歯では、象牙質の多くが露出しており、不規則な咬耗を呈し、歯冠の形態がく

ずれてしまっている（第2図）。歯槽は、上顎左右第1大臼歯および下顎左右第1大臼歯においてのみ遺存している。女性と推定される成人個体である。

| | | | |
|---|-----------------|-------------|---------|
| 右 | 6 5 4 — 2 1 | 1 2 3 4 5 6 | 左 |
| | 8 — 6 — 4 3 — 1 | 1 — — — 6 | —歯牙遺存なし |



第2図

（3）DB-3（古代）遺構

本遺構からは下肢骨片および大臼歯片が数点出土している。咬耗はエナメル質にとどまっている。遺存部位が少ないため、詳細は不明であるが、成人個体と記しておく。

Tab.9

| | No.3 | 破片 |
|----------|------|-------------|
| DB-1（中世） | No.4 | 下肢骨片 |
| | No.5 | 破片（長骨？） |
| | No.7 | 破片（下肢骨片？） |
| | — | 頭蓋骨片 |
| DB-2（中世） | 胸付近 | 下肢骨片 |
| | — | 左大腿骨骨幹（女性？） |
| | — | 下肢骨片 確認 |
| DB-3（古代） | No.2 | 下肢骨片 |
| | No.3 | 下肢骨片 |
| | No.1 | 骨粉・臼歯片 |

VII 元総社蒼海遺跡群（143）出土獣骨・魚骨の同定結果

樋泉岳二（明治大学）

H-22（10世紀の竪穴建物跡）、W-1（蒼海城堀跡）、D-28（中世土坑）、D-16（近世土坑）から獣骨4点と魚骨3点が検出された。同定結果をTab.10に示す。

（1）獣骨

No.1：H-22床面からウマ左前肢骨が交連状態で出土した。保存状態は悪いが、辛うじて原型を保っている。上腕骨骨幹部から基節骨までが確認できた。上腕骨遠位端は癒合しており成獣である。上腕骨近位端と中節骨・末節骨は確認できなかったが、保存状態が悪いことからみて、元は存在していた可能性が高く、肩関節で切り離された前肢が持ち込まれたのではないかと推測される。ただし肉がついた状態であったか、肉の除去後の骨だけであったかは不明である。

No.2：ウマ上腕骨の骨幹部で遠位の関節部を欠く、保存状態は比較的良好。

No.3：ウマ臼歯破片。

No.4：シカ角（落角）。角製品の素材として持ち込まれたものか（ただし加工痕は認められなかった）。

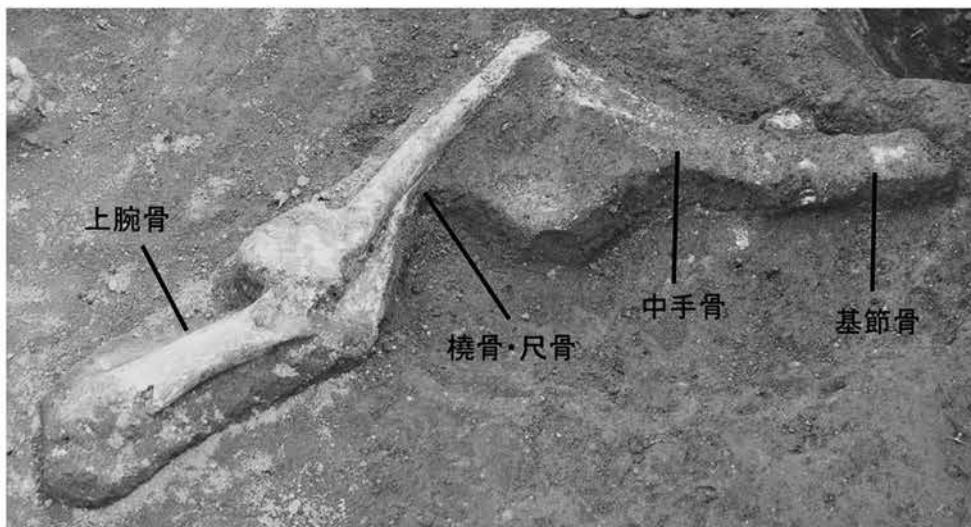
（2）魚骨

No.1・2：カツオの左右の主鰓蓋骨で、おそらく同一個体。保存状態は比較的良好。

No.3：カツオ尾椎、No.1・2と同一個体の可能性がある。保存状態は比較的良好。

Tab.10. 元総社蒼海遺跡（143）出土獸骨・魚骨の同定結果

| 資料 No. | 出土位置 | 種類 | 部位 | 残存位置 | 左右 | 計測 | 備考 |
|----------|------------|-----|------|--------|----|-----------|------|
| 獸骨 No. 1 | H-22 床面 | ウマ | 上腕骨 | 近位端欠損 | L | | 交連 |
| | | | 橈骨 | 完存 | L | | |
| | | | 尺骨 | 完存 | L | | |
| | | | 中手骨 | 完存 | L | SD=31.3mm | |
| | | | 基節骨 | 遠位端欠損 | L | | |
| 獸骨 No.2 | W-1 覆土 | ウマ | 上腕骨 | 骨幹 | R | | |
| 獸骨 No.3 | D-28 | ウマ | 臼齒 | 破片 | ? | | |
| 獸骨 No.4 | H-22 床面 | シカ | 角 | 角座～中央部 | ? | 角座径約 40mm | 落角 |
| 魚骨 No.1 | D-16 他 | カツオ | 主鰓蓋骨 | | L | | 同一個体 |
| 魚骨 No.2 | D-16 他 | カツオ | 主鰓蓋骨 | | R | | |
| 魚骨 No.3 | D-16 他 | カツオ | 尾椎 | | | | |



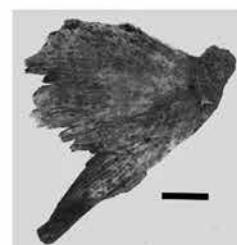
獸骨No.1 ウマ前肢骨



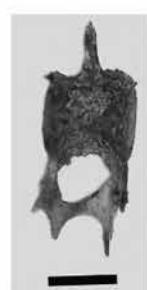
獸骨No.2 ウマ上腕骨



魚骨No.1 カツオ主鰓蓋骨



獸骨No.4. シカ角



魚骨No.3 カツオ尾椎

VIII 元総社蒼海遺跡群（143）出土炭化材・炭化種実の同定

高橋 敦（株式会社古生態研究所）

はじめに

10世紀末と考えられる竪穴建物跡H-26bから出土した炭化材の樹種同定と炭化種実の種実同定を実施した。

（1）試料

H-26b出土の炭化物22点（C-01～22）で、このうち19点（C-01～14, 16～20）が炭化材、3試料（C-15, 21, 22）は炭化種実である。

（2）分析方法

炭化材は、自然乾燥させた後、木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の3断面について割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。炭化種実遺体は、双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本と特徴を比較して分類群を同定する。

（3）結果

樹種同定結果および種実同定結果をTab.11に示す。炭化材は広葉樹11分類群（アワブキ属、ハギ属、エノキ属、サクラ属、コナラ属コナラ節、クリ、クマシデ属イヌシデ節、ヌルデ、カキノキ属、ハイノキ属サワフタギ節、エゴノキ属）に同定された。炭化種実は、イネの穎果（炭化米）、ダイズ属およびダイズ属？の種子に同定された。なお、紙面の関係で、記載と図版は割愛する。

（4）考察

出土した炭化材のうち、C-01, 02の2点は床面直上出土で、垂木などの建築部材に由来する可能性がある。2点の炭化材はクリとアワブキ属に同定され、少なくとも2種類が利用されたことが推定される。強度の高いクリと、やや重硬なアワブキ属が利用されている。

その他の炭化材は、中央部を中心に炭化種実も含めて散在しており、元位置から動いていると考えられる。炭化材のうち、C-04, 20は芯持丸木、C-05, 06は芯持材、C-04は節付近の破片、C-08はミカン割状を呈しており、いずれも小径材に由来すると考えられる。炭化材は、アワブキ属、エゴノキ属、イヌシデ節、ハギ属に同定され、比較的強度の高い分類群が多い。これらは、小径材でも利用可能な部位（横木など）に由来する可能性がある。なお、C-20は、直径が1cm未満の小径材（当年枝）であり、萱材等として利用された可能性がある。

残る炭化材は小さな破片で、形状や部位の詳細は不明である。エノキ属、サクラ属、コナラ節、クリ、ヌルデ、カキノキ属、エゴノキ属、サワフタギ節が認められ、様々な種類が利用されたことが推定される。

伊東・山田（2012）のデータベースを用いて、周辺地域の調査例を見ると、半田剣城遺跡（渋川市）、保渡田八幡塚古墳（高崎市）、下東西清水上遺跡（前橋市）で住居跡出土炭化材の樹種同定が実施されている。その結果を見ると、いずれの遺跡でも多くの分類群が確認されており、その中にはイヌシデ節、サクラ属、エノキ属、コナラ節、クリなど、今回の調査で確認されている分類群も含まれているなど、今回と類似した用材傾向が推定される。確認できる範囲では、同様の傾向を示す資料は同時期の県内他地域では確認できない。このことは、本地域の地形や土地利用とそれに起因する古植生を考え上で注目される。一方、炭化種実には、イネとダイズ属（ダイズ属？を含む）が確認され、これらの穀類が植物食糧として利用されたことが推定され

る。また、種実は認められなかったが、炭化材に認められたクリも食糧として有用である。炭化材に確認されたことから果実の入手も可能であったと考えられる。また、カキノキ属には、在来種と栽培種が含まれるが、在来種のトキワガキは静岡県以西に分布している。同じく在来種のリュウキュウマメガキは、埼玉県南部の越生町や飯能市付近が分布北限とされている（須田, 2019）。これらの分布状況から、今回のカキノキ属は、栽培者のカキノキまたはマメガキの可能性がある。なお、日本の遺跡出土大型植物遺体データベース（石田ほか, 2016）によれば、カキノキ属は万歳寺廻り遺跡（吉岡町）の平安時代とされる種実遺体中に確認された例がある。また、種実遺体に認められたダイズ属については報告例が確認できないが、元総社寺田遺跡（前橋市）の奈良時代～平安時代とされる種実遺体や、阿久津遺跡（吉岡町）および万歳寺廻り遺跡の平安時代とされる種実遺体の中にマメ科の種子が確認された例がある。

引用文献

- 石田糸絵・工藤雄一郎・百原 新, 2016. 日本の遺跡出土大型植物遺体データベース. 植生史研究, 24, 18-24.
伊東隆夫・山田昌久（編）, 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 444p.
須田大樹, 2019. 埼玉県の暖温帯域の石灰岩地で見出されたリュウキュウマメガキ *Diospyros japonica*（埼玉県新産）について. 埼玉県立自然の博物館研究報告, 13, 61-64.

Tab.11 H-26bの樹種同定及び種実同定結果

| 試料名 | 状態 | 部位 | 形状 | 樹種 | 備考 |
|------|------|-----|-------|-------------|-------|
| C-01 | 炭化材 | 垂木？ | 棒状 | クリ | |
| C-02 | 炭化材 | 垂木？ | 棒状 | アワブキ属 | |
| C-03 | 炭化材 | 不明 | 破片 | コナラ属コナラ節 | |
| C-04 | 炭化材 | 不明 | 芯持丸木 | エゴノキ属 | |
| C-05 | 炭化材 | 不明 | 節付近破片 | アワブキ属 | |
| C-06 | 炭化材 | 不明 | 芯持材 | アワブキ属 | 小径材 |
| C-07 | 炭化材 | 不明 | 芯持材 | クマシデ属イヌシデ節 | 小径材 |
| C-08 | 炭化材 | 不明 | ミカン割状 | クマシデ属イヌシデ節 | |
| C-09 | 炭化材 | 不明 | 破片 | コナラ属コナラ節 | 壁面 |
| C-10 | 炭化材 | 不明 | 破片 | エゴノキ属 | |
| C-11 | 炭化材 | 不明 | 破片 | エゴノキ属 | |
| C-12 | 炭化材 | 不明 | 破片 | サクラ属 | |
| C-13 | 炭化材 | 不明 | 破片 | クリ | |
| C-14 | 炭化材 | 不明 | 破片 | エノキ属 | |
| C-15 | 炭化種実 | — | — | イネ（穎果） | 塊状 |
| C-16 | 炭化材 | 不明 | 破片 | カキノキ属 | |
| C-17 | 炭化材 | 不明 | 破片 | クリ | 板状 |
| C-18 | 炭化材 | 不明 | 破片 | ハイノキ属サワフタギ節 | |
| C-19 | 炭化材 | 萱材？ | 芯持丸木 | ハギ属 | 当年枝 |
| C-21 | 炭化種実 | — | — | イネ（穎果） | 短粒極小型 |
| | | — | — | イネ（穎果） | 小型以上 |
| | | — | — | イネ（穎果） | 小型以上 |
| | | — | — | ダイズ属？（種子） | 破片 |
| C-22 | 炭化種実 | — | — | ダイズ属（種子） | 完形未満 |
| | | — | — | ダイズ属？（種子） | 完形未満 |
| | | — | — | ダイズ属？（種子） | 完形未満 |

IX 発掘調査の成果と課題

今回報告した元総社蒼海遺跡群（143）では、多岐にわたる遺構が確認され、多様な遺物の出土をみた。区画整理事業に伴う発掘調査は未だ進行中で、令和5年2月現在も、今回報告地点の南隣接で（148）地点の発掘調査実施中である。本章では（143）地点で確認された遺構・遺物を時期別に再確認し、特記される成果について幾ばくかの見解を提示し、総括としたい。

（1）古墳時代後期～飛鳥・白鳳期、国府成立以前

豊穴建物跡を12軒確認した。全て北に対して斜行する軸方向の方形プランで、最も古いのはH-17、6世紀後半に遡り藤岡系の須恵器無蓋高壺が出土している。最新は7世紀末～8世紀初頭のH-2・3・9・13で、土師器・須恵器の高盤が出土、律令的土器様式を窺える。6世紀～7世紀前半が豊穴部は正方形で揃うが、竈や貯蔵穴の位置は比較的多様という特徴がある。一方で7世紀後半～8世紀初頭は豊穴部が丸みを帯びる方形や南側出入口に張出部をもつもの、小形で長方形のもの等、バリエーションがある反面、竈は東で貯蔵穴は竈の右というように統一感がある。また、新旧間わず壁周溝や柱穴、竈や貯蔵穴の様相から大規模な改修が行われたものが多い。廃屋段階で竈材の採掘を行うH-9の存在も踏まえれば、多数の豊穴建物跡の実態は、新築も多いが廃屋やそれをリノベーションする利用形態が指摘可能で、一定人口が定住する一般的な集落のイメージとは異なる。該期集落は既往の調査によれば5世紀後半まで遡り、粗密はあるが牛池川の両岸に広く豊穴建物が展開する、一見すると大集落遺跡と言って良い様相だが、その実は人の出入りが頻繁な飯場的様相という点は注意すべきと思う。遺跡北東に展開し、継起的に大型古墳が造営された総社古墳群と無関係とは思えない。こうした視点での分析が急務だろう。

（2）奈良時代 大規模な区画の出現

前時期までの豊穴建物群は一斉に姿を消す。調査区内では区画溝であるW-2のみである。この区画溝は、今回調査区では一直線、北に対して西へ5°振れている。平面図を合成したところ、北に隣接する（104）で「方形周溝墓」とされているL字状の溝跡は、この区画溝の延長かつ屈曲部に相当することが判明した。南方は未調査部分や既調査地点であっても中世蒼海城堀跡に相当している為、不明であった。なお、総社神社の旧所在地伝承がある宮鍋神社の南方では、東西軸の総地業建物跡や布地業建物跡が現在までに10棟確認されている。この建物群が何であるのかは諸説あるが、国府北方に所在していた倉庫群か、群馬郡衙正倉である可能性が考えられる。これに伴う区画溝は、市教育委員会による長年の確認調査から推定されており、南・西辺はほぼ確定しつつある。ところで現在実施中の上野国府等範囲内容確認調査の79トレンチでは、この南辺区画溝の立ち上がり部分から、先行区画溝の可能性がある遺構が確認された（市文化財保護課阿久澤智和氏ご教示）。これを今回確認した区画溝W-2による区画の南辺と仮定すると南北約370m、東西は牛池川までの間最大約350mという、大規模な区画が想定される。さらに言えばW-2から推定される区画は、現在推定されている区画より大きく、かつ先行する。屋上屋を架すかも知れないが、今回W-2から想定した区画は、群馬郡衙正倉初期の区画と考えたい。溝自体が小規模である点はやや気になるところだが、これについては計画線として先行掘削された地割の可能性も考えている。今少しデータの蓄積を俟って、改めて検討を行いたい。

（3）平安時代 国府のマチ

10世紀になると、再び豊穴建物跡が確認される。今回は17軒を確認したが、周辺調査区でも多数確認されており、その総数は数え切れず、夥しいという表現が相応しい。ほとんどの建物は地形の勾配に

関わらず正方位ないしはそれに近く、計画性は高いと言える反面、土地区画を示す痕跡は具体的な遺構としてははっきりしない。また、豊穴建物跡は12世紀初頭までの200年に満たない時期幅であるにも関わらず改修・重複が激しく、不特定多数の人が離合集散を繰り返した結果と思われる。また、豊穴建物の重複する間に土壙墓（DB-3）も存在しており、土地利用の変化も激しかったようである。遺物としては、当該期に一般的な土師質土器の壺・塊・小皿や羽釜・土釜に加え、綠釉・灰釉陶器や白磁も目立つ。金属製品の出土も多く、今回のH-26bでは各種鉄器が多く出土しているが鍛治遺構は確認できず、リサイクルに伴う故鉄収集の結果と考えられる。H-19では銅滓も出土しており、何らかの工房が一定数存在していることは確かである。H-22では床面から馬骨と鹿角が出土しており、馬は食用の可能性もある。

白磁を副葬する土壙墓（DB-3）が豊穴建物群の中に、突如として営まれている点も興味深い。土壙墓を直接切るH-21a・b以外、つまり土壙墓とほぼ同時期と考えられる豊穴建物跡は、H-22→H-23（一部重複する建替え）、H-26b→H-26a（改修としての拡張）という位置関係で、H-23がその周堤帯推定範囲に土壙墓がかかる可能性があるものの、墓と建物は一定の距離を置いている。とは言え限りなく接近していることには変わらず、豊穴建物=住居とは見え、現代人の感覚では理解しがたい。ところで本遺跡南方の西部第一落合遺跡群の古代墓を検討した佐野良平は、『日本後記』延暦十六年（797）正月壬子条の山城国についての記述から、8世紀末には家の側に死者を葬る習慣が存在していたとし、「屋敷墓」のようなものと推定している（佐野2022）。西部第一落合遺跡群と元総社蒼海遺跡群、双方の遺跡相がどう同じで、どこが異なっていたのかは現状未だわからないが、今回の土壙墓も「屋敷墓」のような性格を想定することは不可能ではない。近々の課題としたい。何れにせよ、現時点での上野国府のマチは、複雑かつ混沌とした様相であることは否めない。関わった調査機関の垣根を超えた、純粹に考古学的な検討の場が必要だと感じるのは、きっと報告者だけでは無いだろう。

（4）中世 蒼海城

今回の調査では、蒼海城の主たる堀跡としては初めて、堀底まで調査することが出来た。詳細な所見はV章に譲るが、調査し得た部分の堀の最初期は断面がV字状の薬研堀で、少なからず水流があったことが予想された。おそらく堀は北方の牛池川から取水し、「本丸」とされる城の中核部分の堀を巡った後、最終的には南方の染谷川に落ちる仕組みとなっていたと考えられる。具体的な時期については、明確な出土遺物も無いために判然としなかったが、防御的な機能に加え、むしろ水利権を示す、古墳時代の「豪族居館」の延長にあるように思えた。また、堀跡はある程度埋没が進んだ後、東側の立ち上がりを切岸状の垂直に近い断崖を削り出す改修を行っている。調査時の感覚では極めて高い防御性をもった、戦国時代のイメージさながらといった構造であった。この改修は本調査区東方の（31）地点でも確認されており、その内側は『蒼海城絵図』によれば「諫訪屋敷」とされ、「本丸」の北を守る曲輪であったと思われる。今回の調査では城に伴う明確な遺構は不鮮明であった。蒼海城についても国府のマチ同様、全体的な検討の段階に来ているように思う。今後に期待したい。

引用文献

- 中村岳彦 2018 「推定上野国府周辺の古代景観」『群馬文化』332
佐野良平 2022 「DB-3号木棺墓について」『西部第一落合遺跡群（4）』
日沖剛史 2016 「群馬県前橋市元総社地域における地形の形成と土地利用」『地域考古学』1号
※他に多くの報告書を参考とさせて頂いたが、紙面の都合で割愛させて頂く。



最初の作戦会議



人海戦術



竪調査の指導

元総社蒼海遺跡群 (143)

写真図版



太田の二人



雪に埋まる調査区



重機でダメ押し



蒼海城堀跡 堀底まで頑張って掘りました



北方上空から見た元総社蒼海遺跡群（143）調査区



南東上空から見た元総社蒼海遺跡群（143）調査区



調査区垂直（北が上）



H-1 完掘（南西から）



H-1 遺物出土状況（南西から）



H-1 遺物出土状況 南東壁際の葦編石



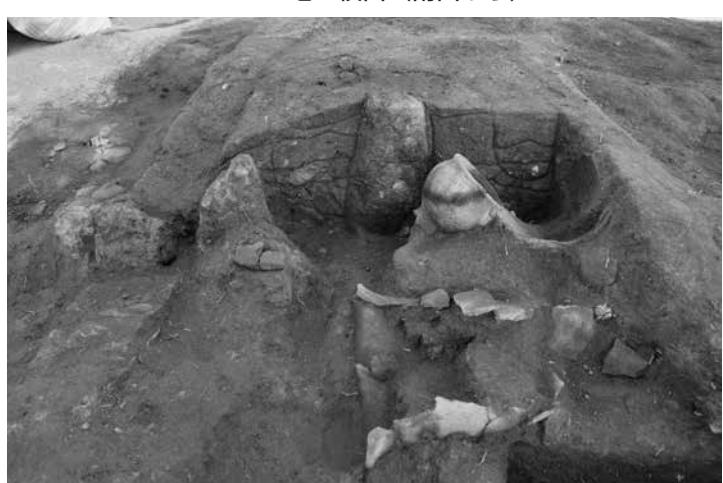
H-1 遺物出土状況 貯蔵穴の土器 2点



H-1 竪 検出（南西から）



H-1 竪 調査状況（南西から）



H-1 竪 遺物と土層断面（南西から）



H-1 竪 掘方（南西から）



H-2 完掘（北から）



H-2 完掘（南東から）



H-3 完掘・遺物出土状況（南から）



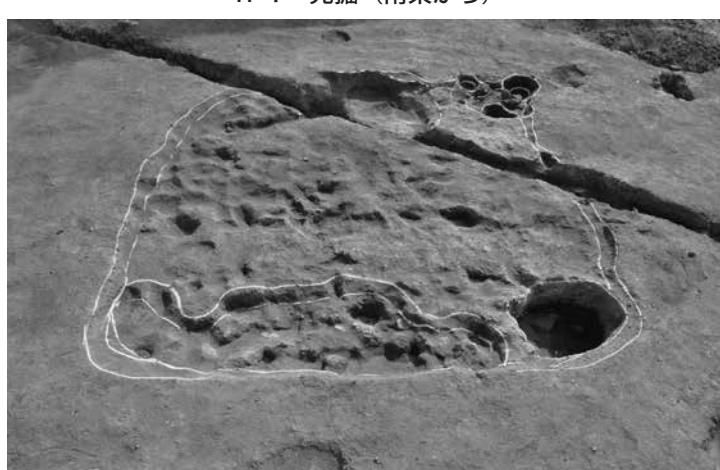
H-3 遺物出土状況近景（南から）



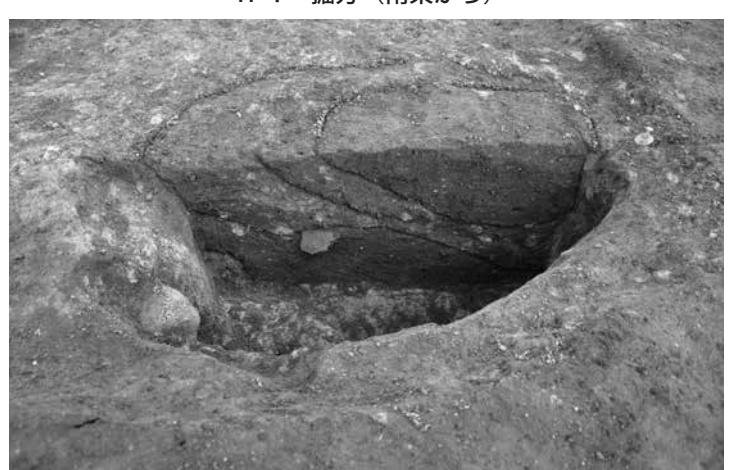
H-4 完掘（南東から）



H-4 掘方（南東から）



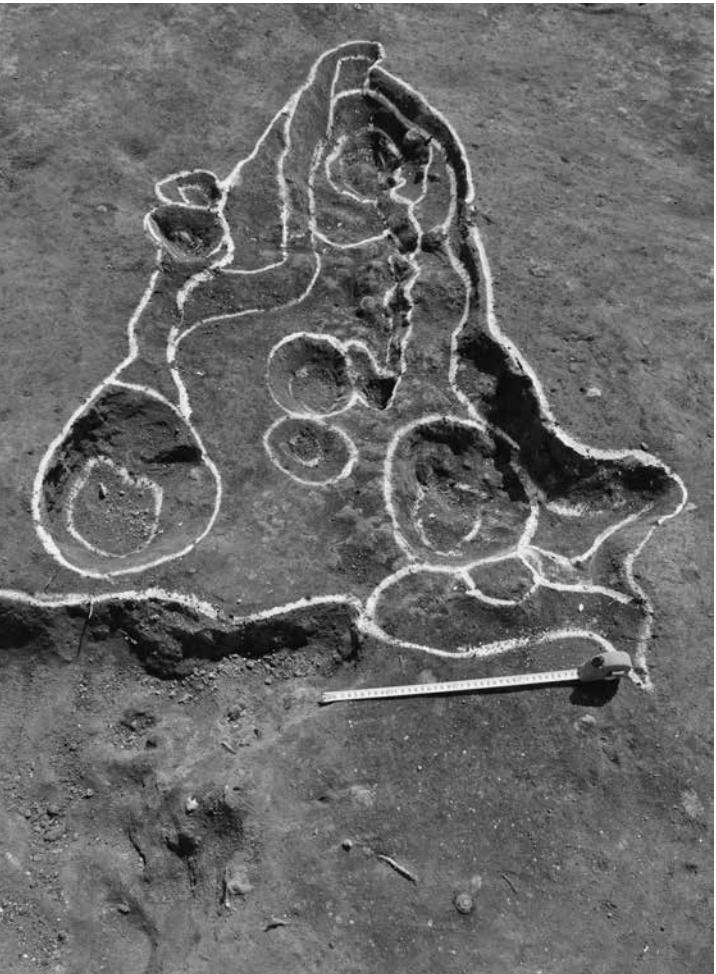
H-6 完掘・掘方（西から）



H-6 貯蔵穴 土層断面（西から）



H-7 遺物出土状況（北から）

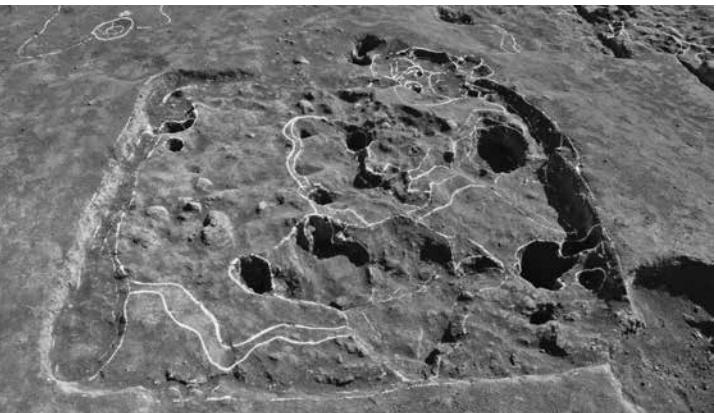


H-7 窟 使用面（南西から）

H-7 窟 掘方（北西から）



H-8 完掘（西から）



H-8 掘方（西から）



H-8 窟 空焚き面（西から）



H-8 窟 掘方（西から）



H-9 完掘（南西から）



H-9 完掘・掘方（南西から）



H-9 窟 調査状況（南西から）



H-9 窟 完掘（南西から）



H-10 調査状況（西から）



H-10 掘方（西から）



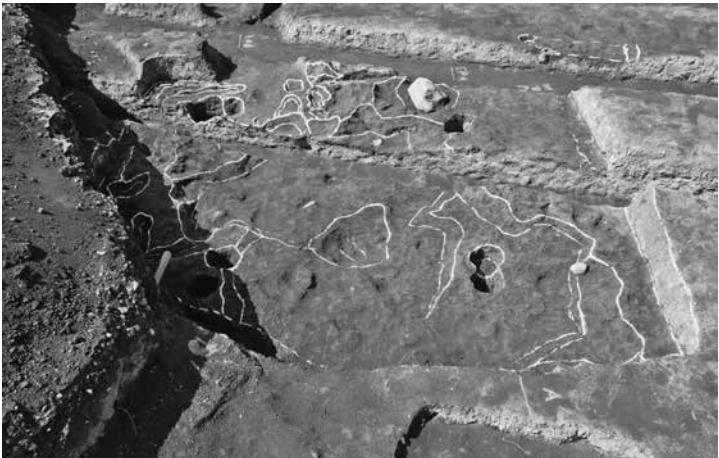
H-10 貯蔵穴 土層断面と遺物（西から）



H-10 貯蔵穴 遺物出土状況（東から）



H-11 完掘（北東から）



H-11 掘方（北東から）



H-11 竈掘方（北東から）



H-11 貯蔵穴（北東から）



H-12a 床面 検出状況（西から）



H-12a 床面 遺物出土状況（北から）



H-12b 完掘（南西から）



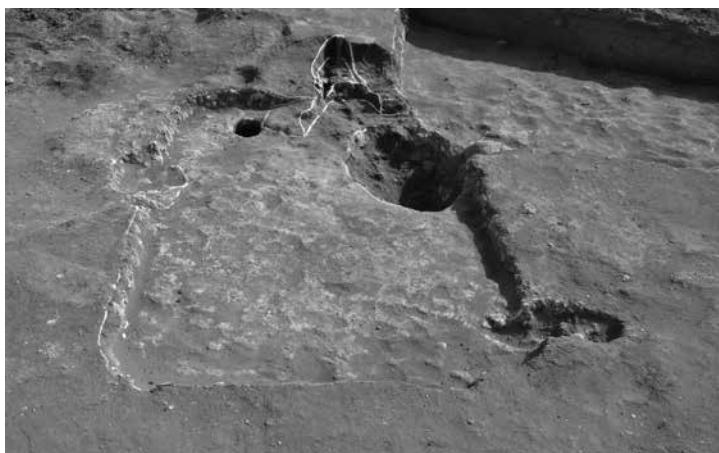
H-12b 遺物出土状況（北から）



H-12b 竪 空焚き面（南西から）



H-12b 竪 煙道（東から）



H-13 完掘（南西から）



H-13 竪（南西から）



H-13 竪 調査途中（南西から）



H-14 完掘（南西から）



H-15 完掘（南西から）



H-15 新竪（南西から）



H-16 床面検出状況 (北から)



H-17 完掘 (西から)



H-17 竪 空焚き面 (南西から)



H-17 竪 掘方 (西から)



H-17 貯蔵穴 (西から)



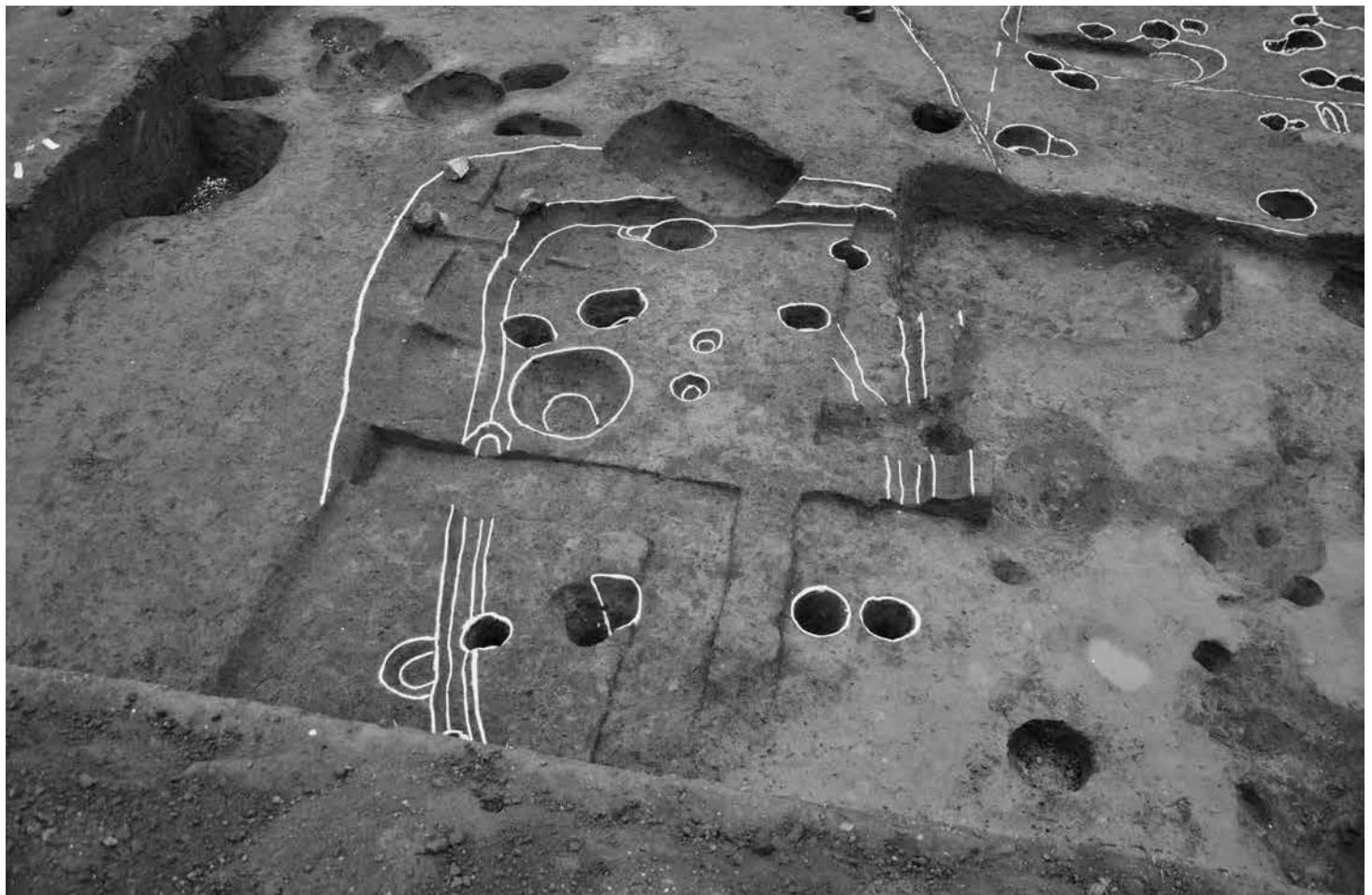
H-18 調査状況 (北から)



H-19 完掘・掘方 (西から)



H-19 貯蔵穴と竪の残骸 (西から)



H-21a・b 調査状況（西から）



H-21a 調査状況（北から）



H-21a 白磁片出土状況（西から）



H-21a・b 土層断面（南から）



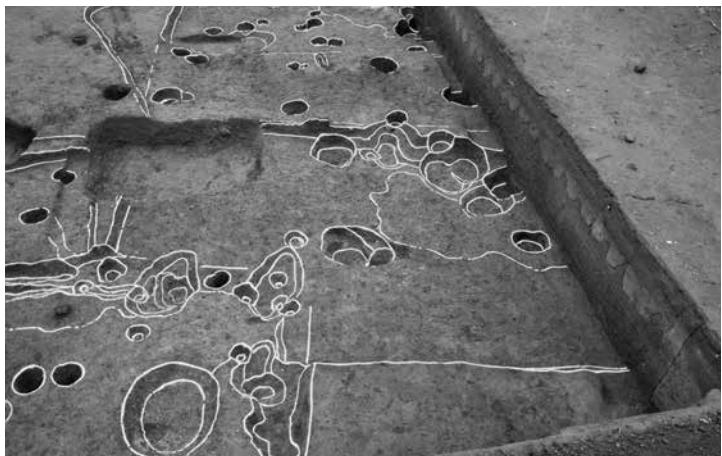
H-21a 瓢 調査状況①（南から）



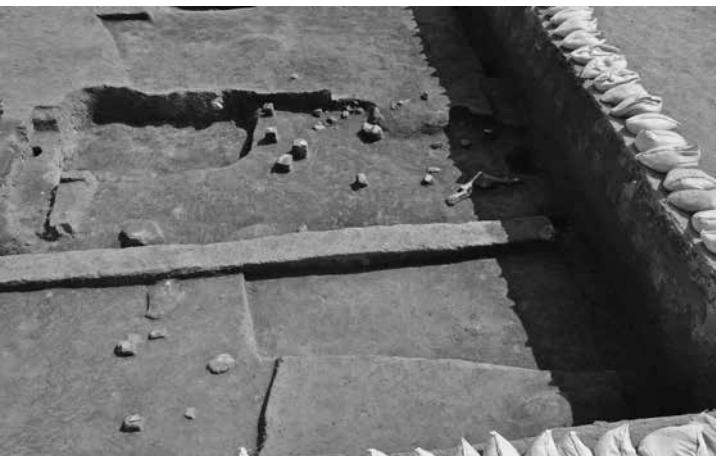
H-21a 竪 調査状況②（西から）



H-21a 竪 調査状況③（南から）



H-22 完掘（西から）



H-22 遺物出土状況（西から）



H-22 竪 左脇遺物出土状況（西から）



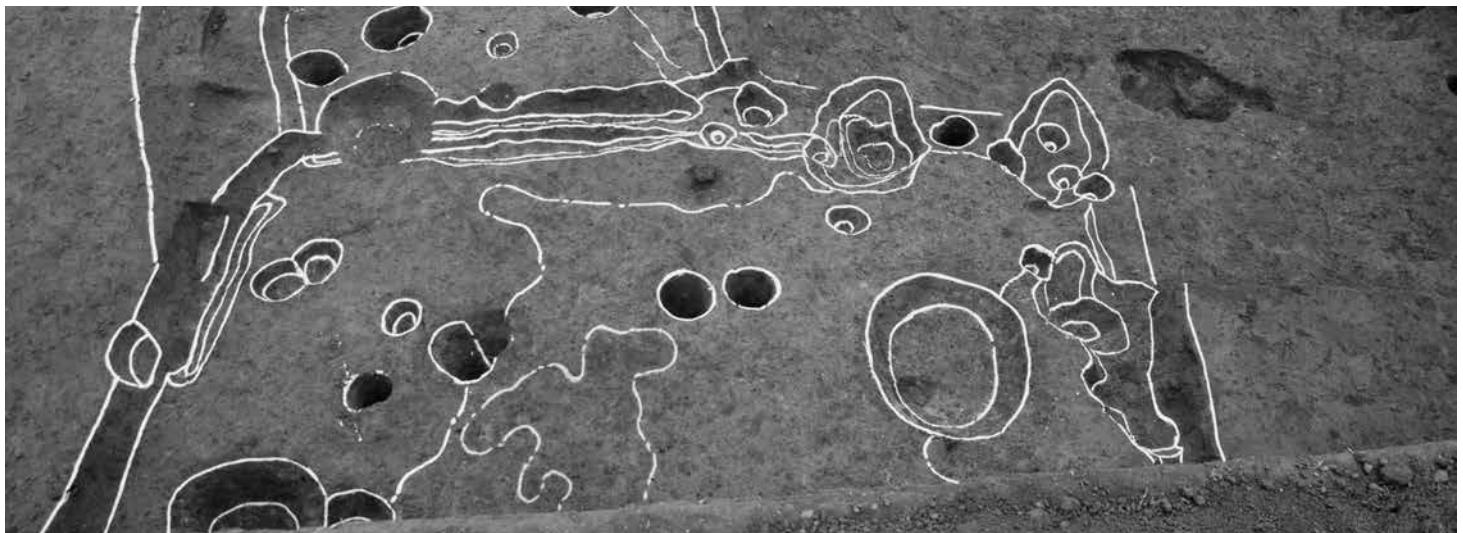
H-22 竪前 馬骨出土状況（西から）



H-22 竪 遺物出土状況（西から）



H-22 竪 完掘（西から）



H-23 完掘（西から）



H-23 A 竪 調査状況（南から）



H-23 B 竪 調査状況（北から）



H-25 完掘（東から）



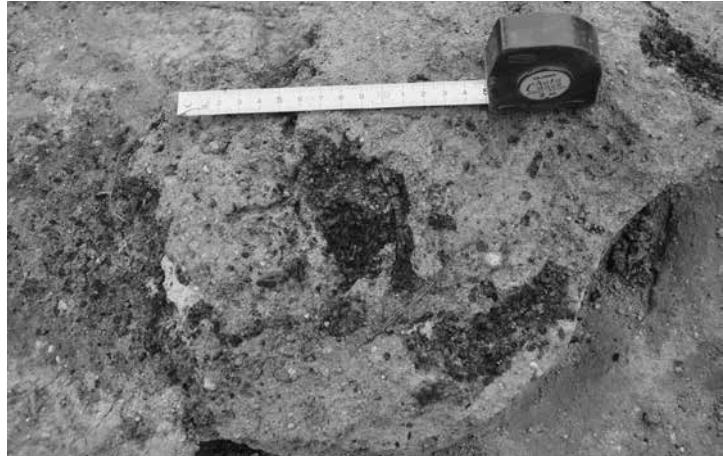
H-25 遺物出土状況（南から）



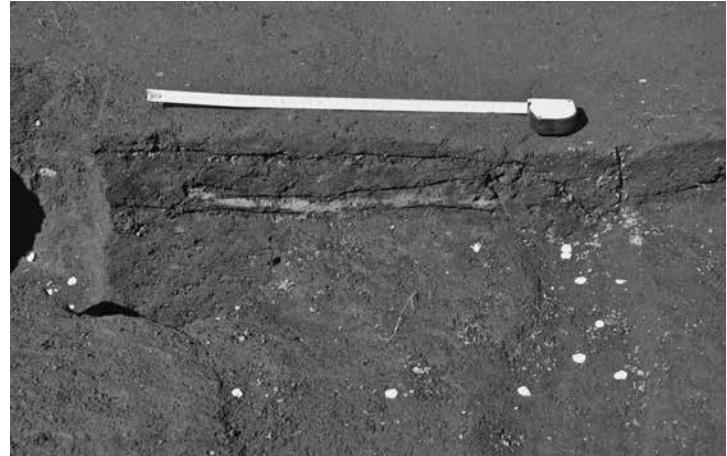
H-24・26a・26b 完掘（北から）



H-26b 炭化材・焼土検出状況（北から）



H-26b 炭化米・穀物塊



H-26b 土屋根状の焼土断面



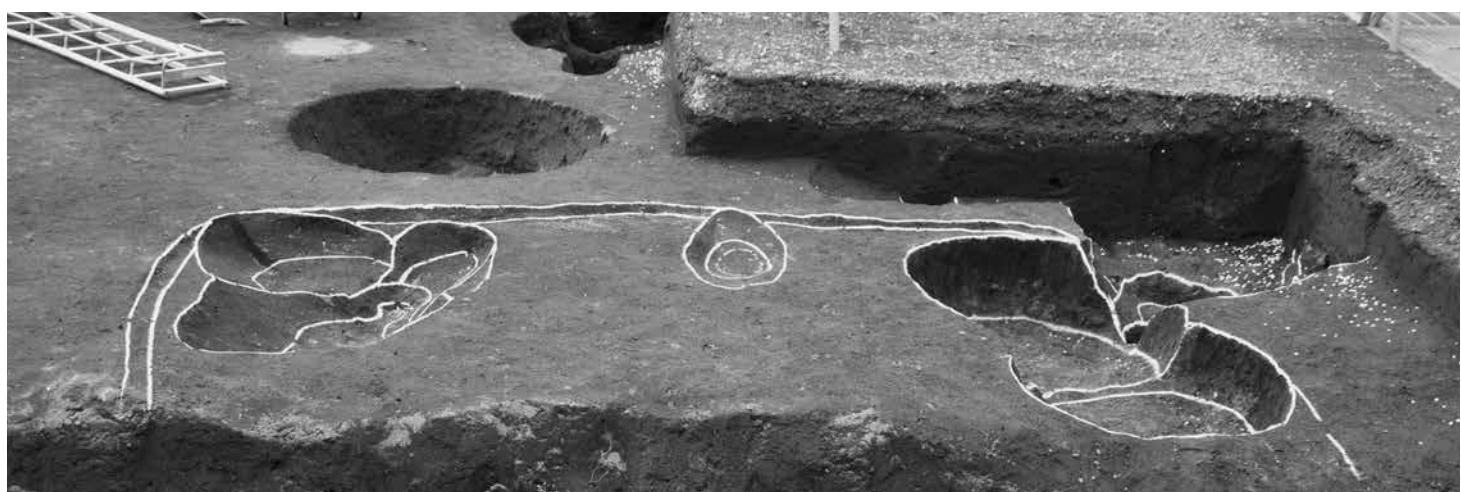
H-26b 鉄製品（紡錘車）



H-26b 鉄製品（刀子）



H-26b 鉄製品（鉗具）



H-27 完掘（東から）



H-27 遺物と土層断面（南から）



H-27 竪前の土釜（転用移動式竪）



H-28 窟（西から）



H-29 完掘（東から）



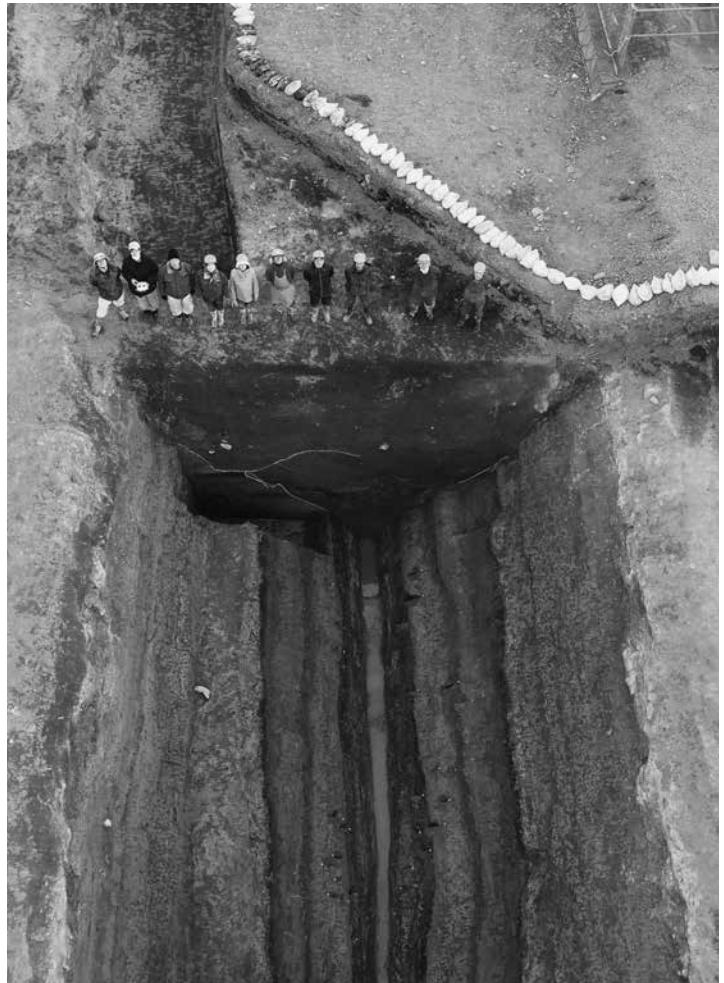
W-1 蒼海城堀（北が上）



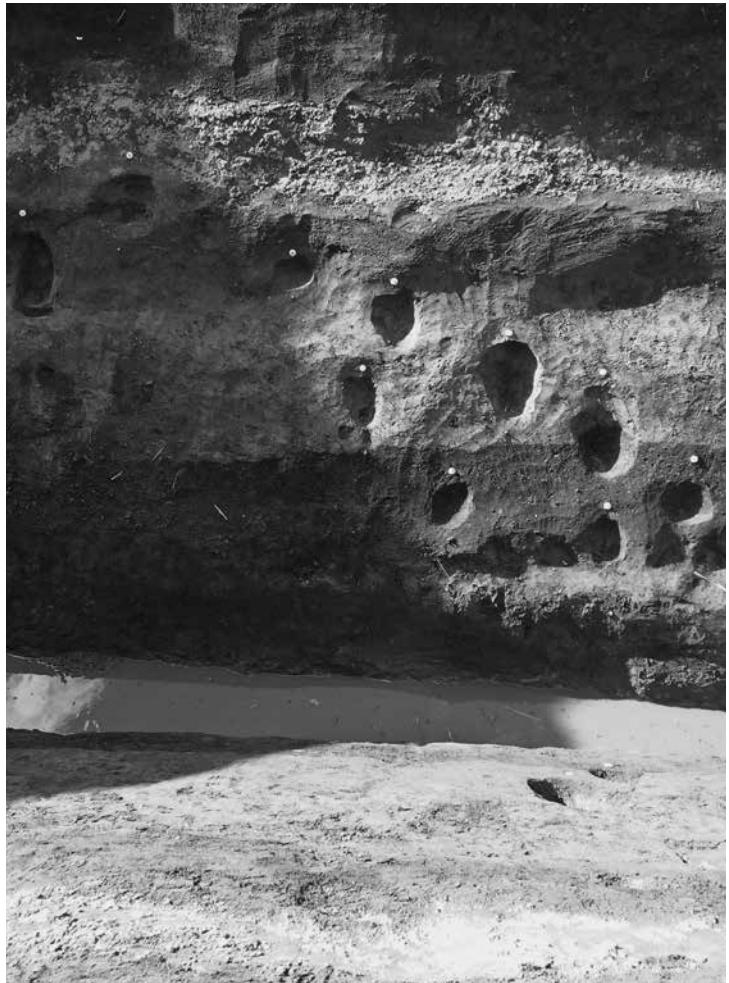
W-1 蒼海城堀（北から）



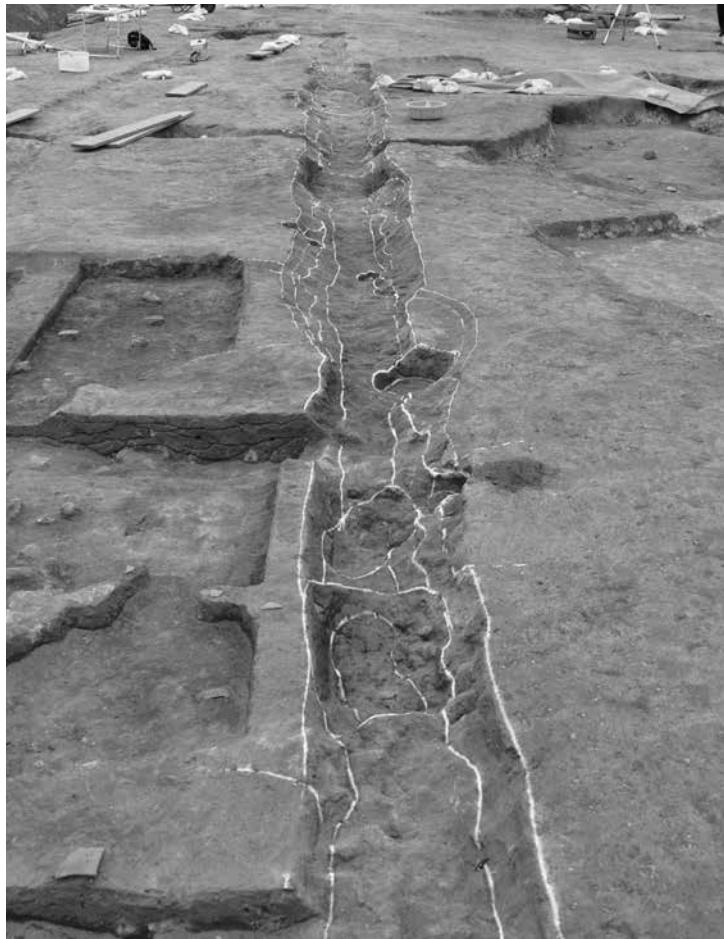
W-1 蒼海城堀（南から）



W-1 蒼海城堀 対人比（北から）



W-1 側面のピット列 足場？（東から）



W-2 古代区画溝（南から）



W-2 古代区画溝 土層断面 C（北から）



W-2 古代区画溝 土層断面 D（北から）



DB-1 骨 検出状況（西から）



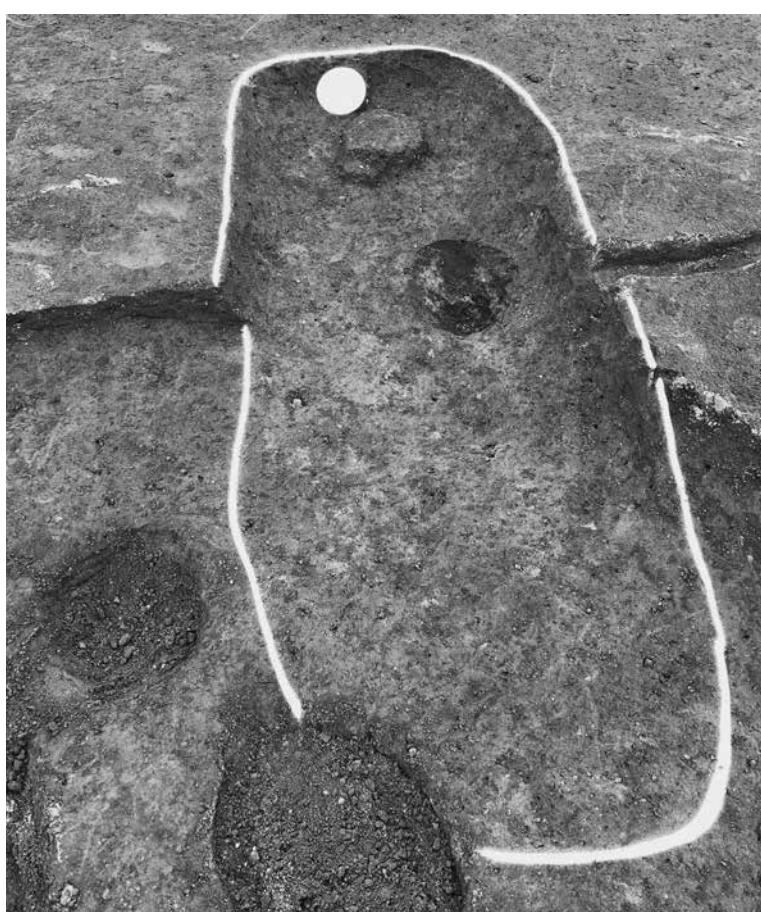
DB-1 歯 検出状況（西から）



DB-2 骨 検出状況（西から）



DB-2 毛抜形鉄製品 出土状況



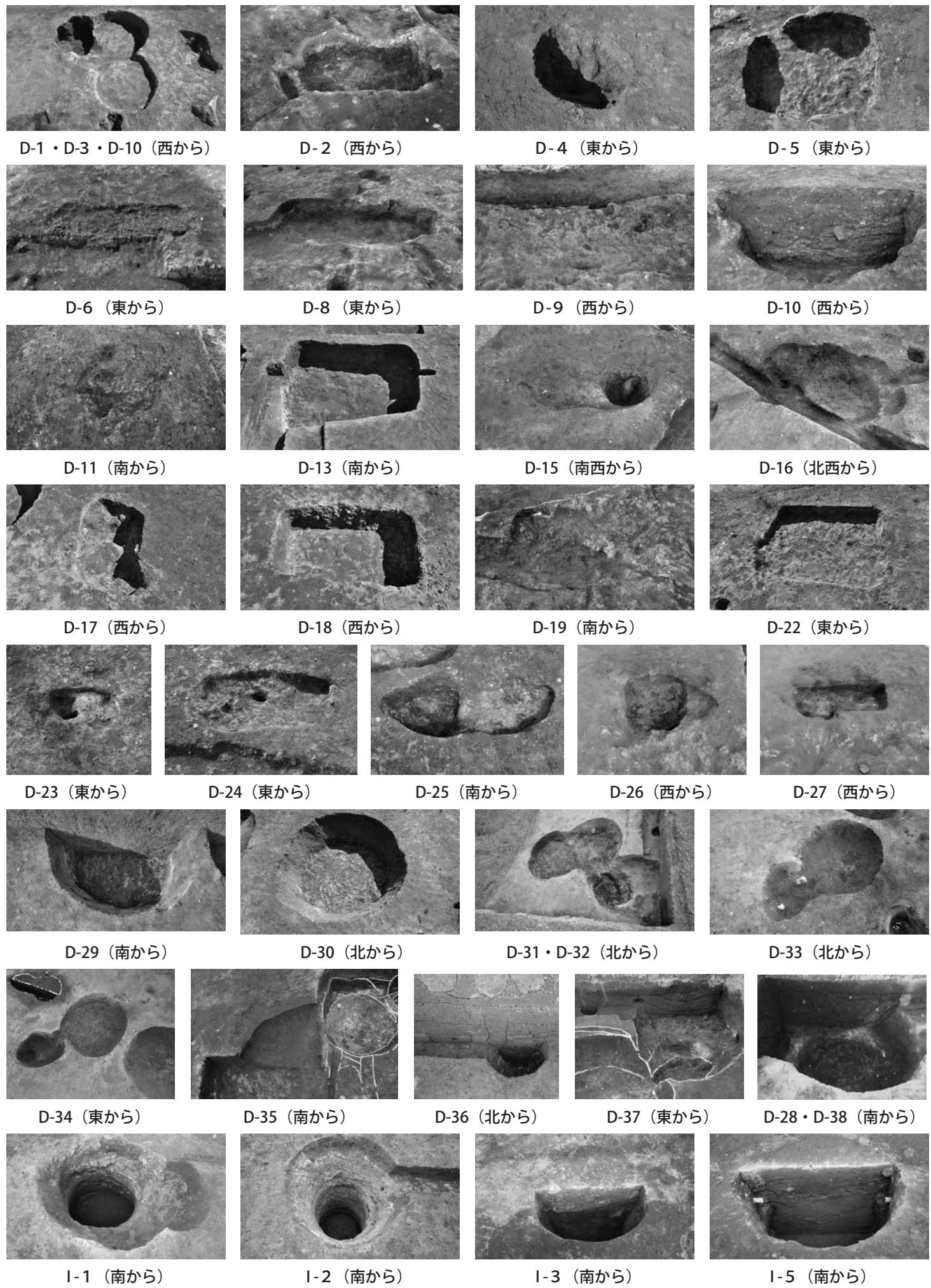
DB-3 (南から)

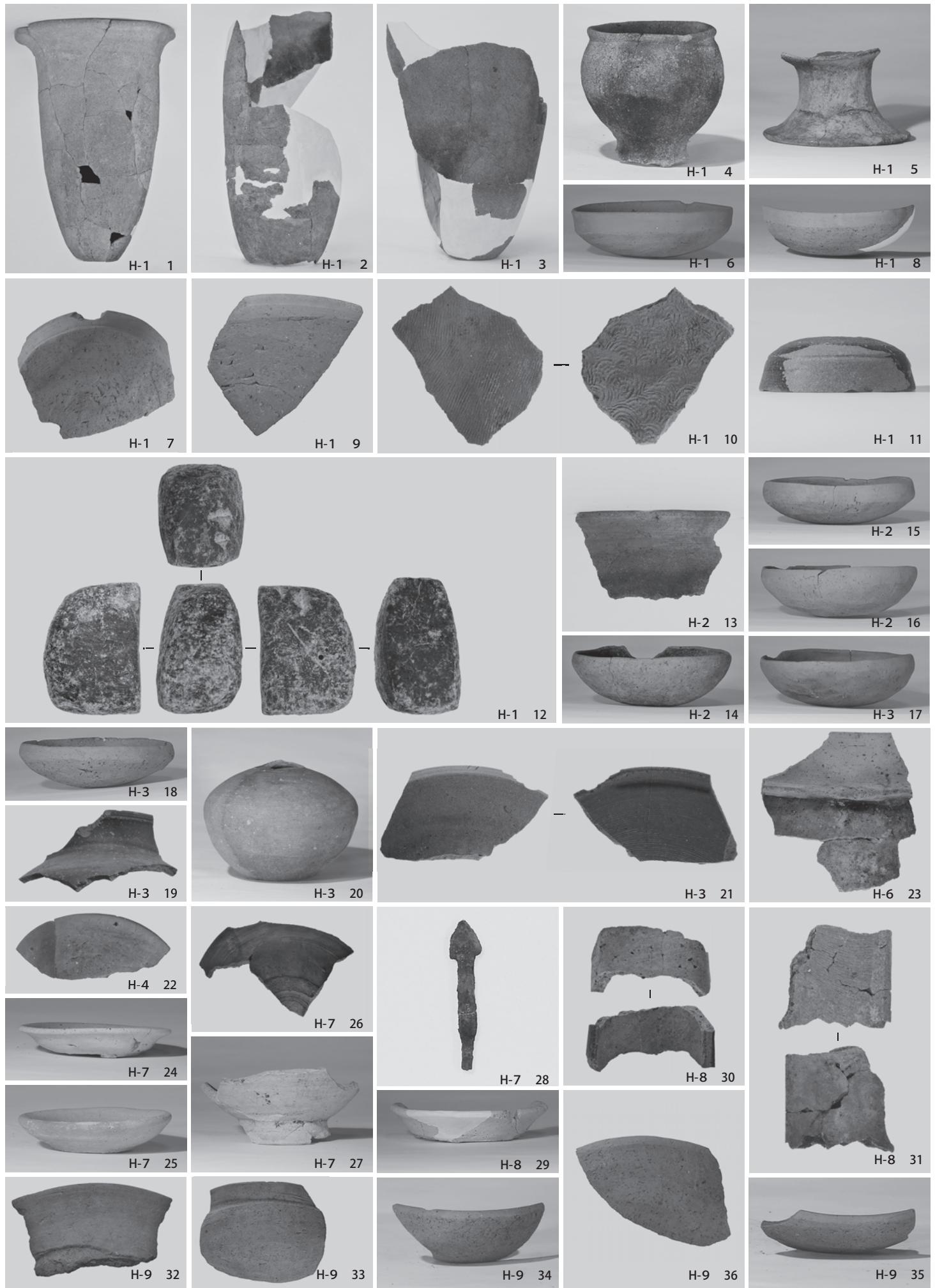


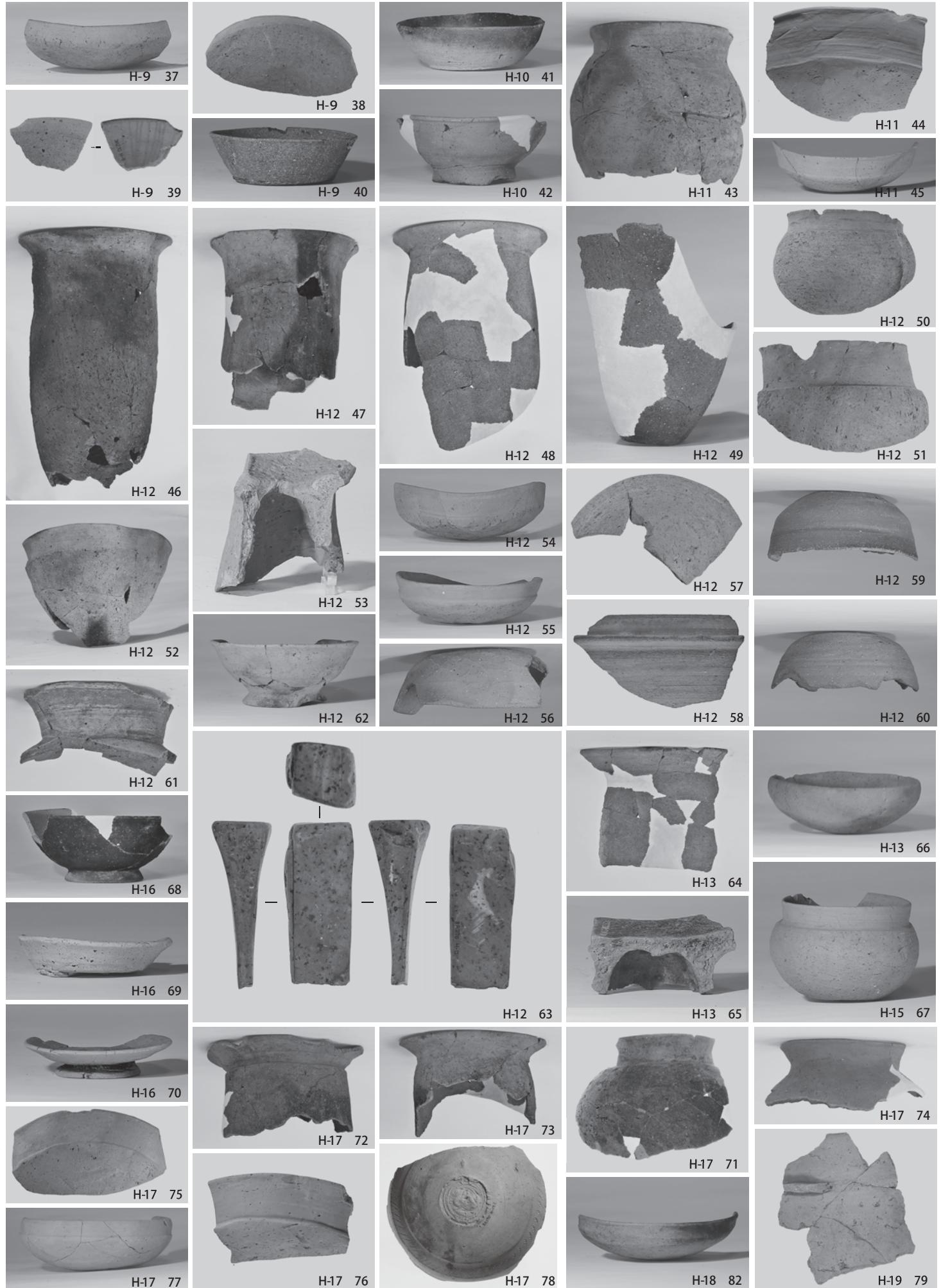
DB-3 白磁と頭骨（南から）

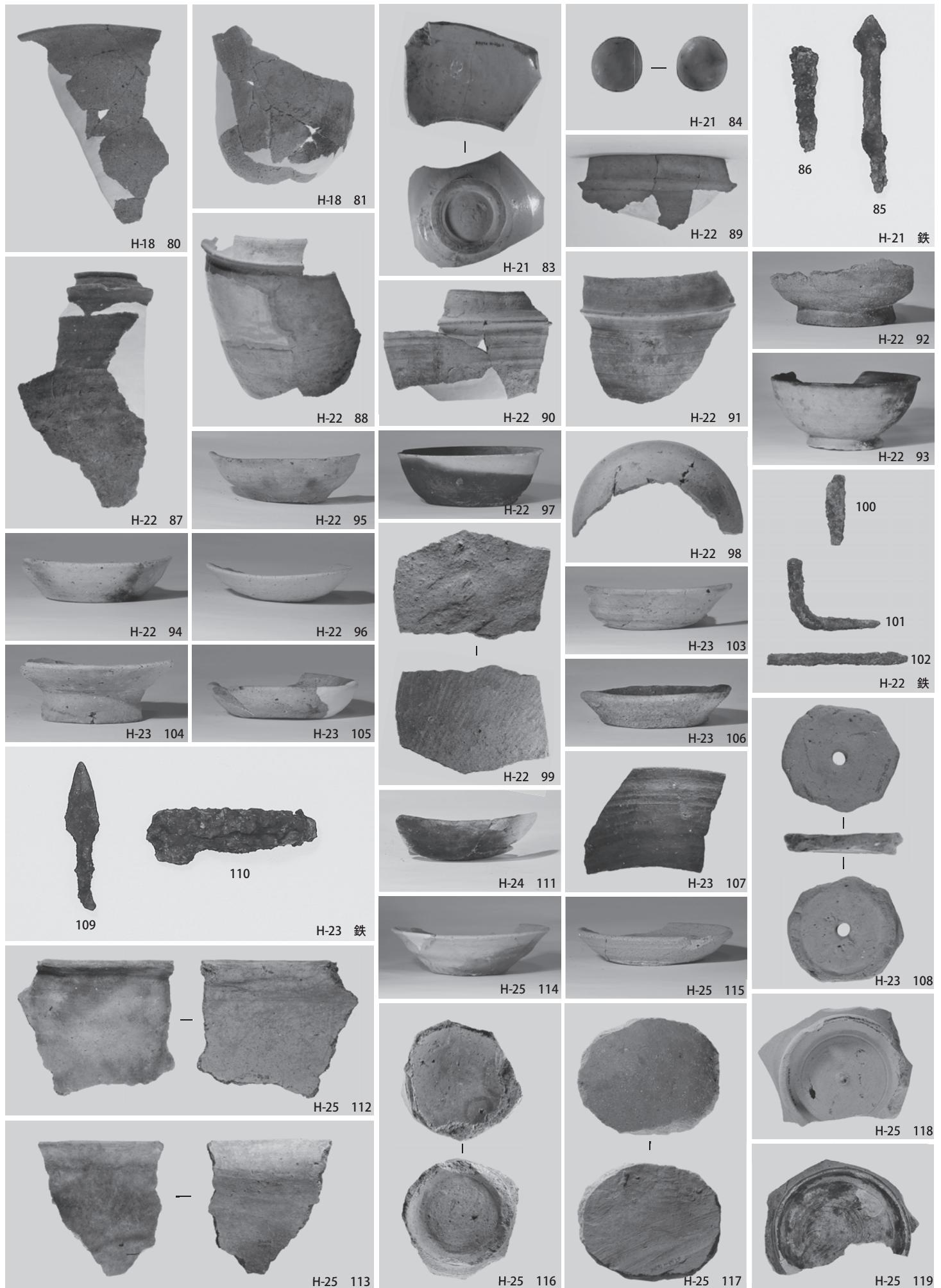


DB-3 肢骨検出状況（西から）





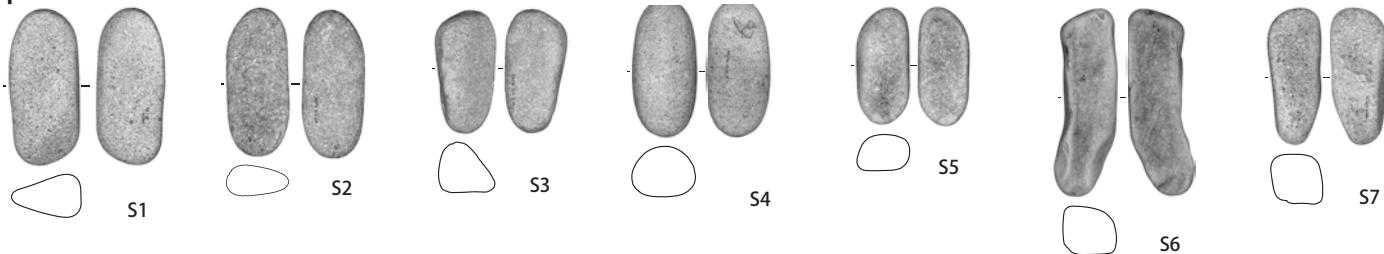




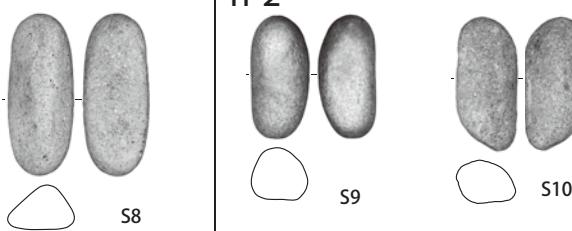


菰編石

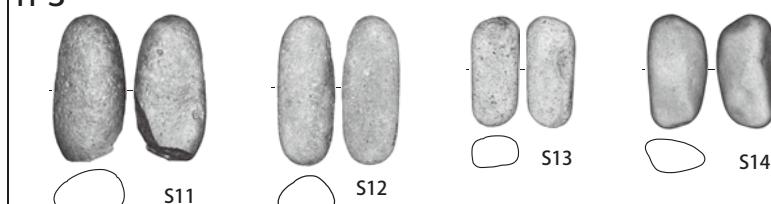
H-1



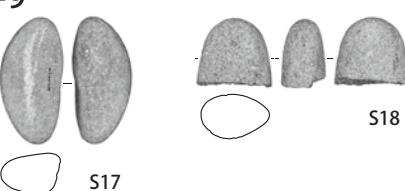
H-2



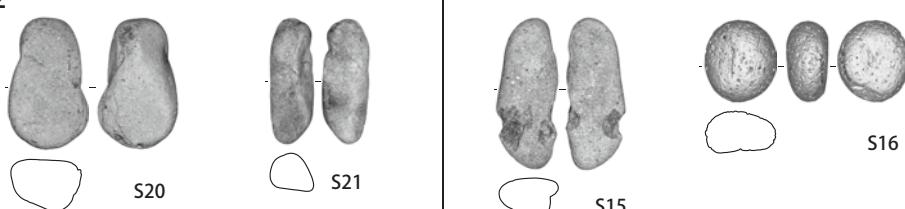
H-3



H-9



H-12



H-10



H-17



0 1:8 20cm

Tab.12 石製品観察表

※()は残存値

| No. | 遺構 | 種別 | 器種 | 部位 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 備考 | No. | 遺構 | 種別 | 器種 | 部位 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 備考 |
|-----|-----|-----|-----|------|--------|-------|--------|-------|---------|----|-----|-------|-----|-----|------|--------|-------|--------|-------|-----|---------|
| S1 | H-1 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 16.5 | 7.2 | 4.6 | 831 | 閃緑岩 | | S18 | H-9 | 石製品 | 磨石 | 1/2 | (7.3) | 7.5 | 4.7 | 377 | 安山岩 | |
| S2 | H-1 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 15.6 | 6.4 | 3.2 | 553 | 安山岩 | | S19 | H-10 | 石製品 | 菰編石 | ほぼ完形 | 13.0 | 5.5 | 4.8 | 532 | 安山岩 | 敲石 |
| S3 | H-1 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 13.0 | 6.5 | 5.0 | 576 | 安山岩 | | S20 | H-12 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 13.6 | 8.6 | 6.1 | 952 | 安山岩 | |
| S4 | H-1 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 14.1 | 6.3 | 5.0 | 791 | 安山岩 | | S21 | H-12 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 13.0 | 4.5 | 4.1 | 395 | 安山岩 | |
| S5 | H-1 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 12.3 | 5.4 | 4.2 | 485 | 安山岩 | | S22 | H-12b | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 13.5 | 5.6 | 4.6 | 603 | 閃緑岩 | |
| S6 | H-1 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 19.5 | 5.5 | 4.9 | 1072 | ホルンフェルス | | S23 | H-12b | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 11.9 | 5.3 | 4.3 | 380 | 安山岩 | 敲石 |
| S7 | H-1 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 14.1 | 5.5 | 6.1 | 778 | 安山岩 | | S24 | H-12b | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 15.5 | 5.9 | 4.0 | 712 | 流紋岩 | |
| S8 | H-1 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 17.0 | 7.0 | 4.8 | 856 | 安山岩 | | S25 | H-12b | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 13.8 | 5.7 | 4.9 | 671 | 安山岩 | |
| S9 | H-2 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 12.9 | 5.7 | 5.6 | 694 | 閃緑岩 | 敲石 | S26 | H-12b | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 14.3 | 6.8 | 4.5 | 589 | 閃緑岩 | |
| S10 | H-2 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 13.7 | 5.5 | 4.7 | 653 | 安山岩 | | S27 | H-12b | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 12.7 | 5.0 | 3.3 | 373 | 安山岩 | |
| S11 | H-3 | 石製品 | 菰編石 | 9/10 | (15.2) | 7.1 | 4.3 | 798 | 安山岩 | | S28 | H-17 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 15.7 | 7.2 | 4.2 | 808 | 安山岩 | |
| S12 | H-3 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 14.0 | 5.2 | 3.8 | 453 | 安山岩 | | S29 | H-17 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 12.0 | 6.9 | 3.3 | 417 | 砂岩 | オレンジ+白色 |
| S13 | H-3 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 11.4 | 4.9 | 3.3 | 343 | 安山岩 | | S30 | H-17 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 13.7 | 7.1 | 3.6 | 605 | 安山岩 | |
| S14 | H-3 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 12.0 | 6.1 | 3.4 | 404 | 安山岩 | | S31 | H-17 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 12.4 | 5.5 | 4.0 | 443 | 片岩 | |
| S15 | H-3 | 石製品 | 菰編石 | ほぼ完形 | 16.0 | 5.9 | 4.4 | 665 | 安山岩 | | S32 | H-17 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 14.0 | 7.0 | 4.1 | 758 | 安山岩 | |
| S16 | H-3 | 石製品 | 磨石 | 完形 | 8.2 | 7.3 | 4.2 | 175 | 輝石 | | S33 | H-17 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 13.8 | 6.3 | 4.4 | 613 | 安山岩 | |
| S17 | H-9 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 13.2 | 6.4 | 4.2 | 528 | 安山岩 | 敲石 | S34 | H-17 | 石製品 | 菰編石 | 完形 | 15.3 | 5.7 | 4.3 | 564 | 安山岩 | 敲石 |

報告書抄録

| ふりがな | もとそうじやおうみいせきぐん (143) | | | | | | | |
|----------------|---|-------|----------------------------|--|------------|---|---------------------|-----------------------|
| 書名 | 元総社蒼海遺跡群 (143) | | | | | | | |
| 副書名 | 前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 永井智教・樋泉岳二・谷畠美帆・高橋敦・辻口菜穂子・岡田萌 | | | | | | | |
| 編集機関 | 山下工業株式会社 〒371-0244 群馬県前橋市鳴石町 207-8 | | | | | | | |
| 発行機関 | 前橋市教育委員会 文化財保護課 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2023年3月6日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査対象面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 元総社蒼海遺跡群 (143) | 群馬県前橋市元総社町 1799-1、1888-1、1888-2、1888-5、2691-8 | 0142 | 0147 | 36°23'29" | 139°02'00" | R4. 1. 5 R4. 3.23 | 1,293m ² | 前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業 |
| | 種類 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| | 包含層 | 縄文時代 | — | 土器・石器 | | 後世の遺構に遺物混入。 | | |
| | 集落 | 古墳時代 | 堅穴建物跡 12軒 | 土師器（甕・短頸壺・壺）須恵器（甕・高壺・壺）菰編石 | | 堅穴建物跡は全て正方位に対して斜行する。柱穴や壁周溝、竈の様相から、大半の建物で上屋解体を伴う大規模な改修が行われたことが判明した。 | | |
| | 官衙 | 奈良時代 | 区画溝 1条 | 土師器細片 | | 北に接する(104)調査区や近年の範囲確認調査の成果を合わせると、一辺300m以上の方形区画の可能性があり、群馬郡衙正倉初期の区画と推定される。 | | |
| | 集落 | 平安時代 | 堅穴建物跡 17軒 土壙墓 1基 土坑 | 土師器（土釜・壺） 土師質土器（塊・壺・小皿） 須恵器（甕・羽釜） 灰釉陶器（壺・塊・皿） 白磁（碗） 鉄製品（鎌・紡錘車・馬具） 鉄滓・銅滓 石製品（砥石・碁石） 炭化穀物（米・豆） | | 堅穴建物跡はほぼ正方位で、10世紀以降に出現し、12世紀初頭まで確認される。 多くの建物は壁周溝や竈の様相から改修されており、重複も顕著である。人の出入りが激しい、国府のマチ特有の現象と言える。建物内から馬骨・鹿角の出土も特徴的である。 また、12世紀初頭の堅穴建物跡に切られる土壙墓から出土したほぼ完形の白磁碗は、底外面に墨書き「梅」が確認された。日宋貿易の際、商人によって記された一種のサインと考えられる。 | | |
| | 城館 | 中世 | 堀・溝 2条 井戸跡 5基 土壙墓 2基 | 陶磁器（甕・塊） 土師質土器（鍋・カワラケ） 鉄製毛抜・錢 | | 堀と溝は蒼海城に伴うもので、堀には最低3時期が確認される。井戸跡と土壙墓も城に伴う可能性が高い。土壙墓は堀の端に位置する。 | | |
| | その他 | 近世・近代 | 土坑 | 陶磁器・煙管 | | 農業関連と推定。蒼海城廃城以降。 | | |

元総社蒼海遺跡群 (143)

—前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023年 3月6日 印刷・発行

編集 山下工業株式会社
発行 前橋市教育委員会
印刷 朝日印刷工業株式会社